

---

# **恋愛不感症**

汐井サラサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛不感症

### 【Zコード】

Z2517X

### 【作者名】

汐井サラサ

### 【あらすじ】

三十路を目前に、夫も子どもも居て何不自由なく暮らしている私。世間からいえばリア充と思われていてもおかしくない。そう見えているはずだ。私はそう見えるように努力している。でも、本当は独りぼっち……あまりに孤独すぎて泣けてきた。

真っ白で無意味だった世界たちが、少しづつ色付いていく。

## 第一話

……一人で居て独りなのと 同じ空間に誰か居ても独りなのは  
どうか……

どちらがより独りなのだ

るうか……

見渡す限り白。

白い壁、白い天井。

広い窓には白いドレッサーなカーテンが掛かっている。

そして、私は四本の白い柱に囲まれた白くて広い寝台の上で、獣の相手をする。熱く、早く。打ち付けるような震動にぼんやりと身を任せせる。

これは夢。  
本当に夢。  
私のもう一つの顔。

目の前の男は西の方の国で宰相閣下を勤めている立場ある人らしい。

そんな人が、こんな人形みたいな私を抱いて何が楽しいのだろう？いや、楽しいかどうか、そういうレベルで私は抱かれているわけじゃない。

彼はこの場所に”癒し”を求めてきている。そして、私の存在そのものがこの世界では”癒し”になるらしい。

夢の世界だからよく分からぬ設定だ。

実際の私は三十を目前に控えて、結婚もし、子どももいて世間的に見てもごく普通の奥様だ。一般的な概念に取り入れるなら、きっと十分に幸せな環境にいるのだろう。

でも私は、リアルでも、この夢の世界でも独りだ。  
けれど、夢の中ではこうやって私を求めてくれる人が居る。リアルとは小さくてとても大きな違いだ。

私がこの夢を見始めたのはいつだつたか、もうとも昔のようないろとも最近のような。曖昧でよく分からぬ。最初はどれだけ私は欲求不満なのかと、頃垂れたけれど、こうも立て続け、毎日のようすに夢を見続けていれば、そこに何か意味があるのかもと思い始める。

どうせ私は何年も一人で眠つてゐる。どんな夢を見ようと私の勝手だらう。

夢の中での私の位置づけは『癒しの神子』だつた。

私の声を聞き、姿を見、触れる。どれでも良い。それで人々は癒されるらしい。実際、手傷をおつたものの傷が綺麗さっぱりなくなつたこともあるから本当なのだと思う。

その私は聖域と呼ばれる場所に建つ、この神殿の中に住まわされ、沢山の信者たちに囲まれて何不自由なく過ごさせてもらつてゐる。昼間は巡礼者に微笑みかけ、人々が救われますようにと声を掛け、そつと頭を垂れる彼らの額に手を掛ける。ただそれだけを繰り返しているだけなのに、人々の列は収まらない。

権力・財力のあるものはこうして夜伽に訪れることがある。

国なんでものを支えるためには、憂つこともあるのだろ？。私は分からない。ただの遊女のようなものだと思ったこともあるけど、それなら普通に色町でその類の女性と遊ぶほうが楽しいはずだ。

それなのに彼らは通つてくる。

他にも、北の国の騎士とか東の国の魔術師、南の国の王子、各国の王陛下なども顔を見せることがある。正直その全てを把握しているわけじゃない。

そして、全てこうやつて関係を持つているわけでもない。求められれば断らない。性別も関係なく……それだけでもある。

私はただの人形で心は必要ないから。

「…………っく、っ！」

ほんやりと考え事をし、天蓋を眺めている間に宰相閣下は達してしまつたらしい。

彼は達するまでに時間が掛かるくせに、そのあとは何事もなかつたように夜が明けぬうちに寝台をあとにする。

「煌く星の輝きさえも奪つ円のような姫。この熱が冷め切らぬうち  
にまた、窺います……」

天井を眺めながら、宰相閣下の残した言葉を復唱する。

馬鹿馬鹿しい。

何が月のような姫、だ……。

恋愛的な感情なんて、私に一欠けらも持つていなくて。口先だけで雄弁に語られる愛の台詞。私は馬鹿馬鹿しいとしか思えない。けれど、

「……寂しい」

好きとか嫌いとか、そんな感情を抜きにしても、つい先ほどまでは人のぬくもりがあつた。

夢であつてもそういう感覚だけは鋭敏で、それだけは心地良いと思つ。それがあつさりと取り除かれてしまうと残るのは寂しさと虚しさだけだ。

じりりと寝返りを打つて、夢の中で瞼を落とす。適度な疲労感が私を夢の又夢へと誘つていく。

\* \* \*

..... P P P ..... P P P .....

「ん」

枕元に置いてある目覚まし時計の音で目が覚める。カーテンの隙間から差し込んでくる朝日が眩しい。今朝もぐだらない一日が始まった。

私はいつもと同じように朝食の準備をする。主人と自分の分、子どもの分。

毎日毎日用意する。

それなのに、なくなるのは私の分だけ。残りは私のお昼になる。みんな朝食を取るより五分でも十分でも長く眠つていいらしい。それならそれで、私も作らなければ良いのだろうけど、もし、今日は食べていこうと気が変わったときに可哀想だと思い、毎日一応

何かしら用意する。

「いってきまーす」

とハンドセルを背負つた子どもが近所の子の誘ひ声に呼ばれて出て行つた。それに続く形で夫も出て行く。

いつてらっしゃいと、告げても帰つてくるのは「ん」「ん」の一言。いつてきます。が正解だよ。もう、いうのも面倒臭くなつた。以前は夫の気を取り戻そうと躍起になつていた。

エステにも通つたし、骨盤ダイエットとかもやってみた。その甲斐あつて、結婚前と体型はあまり変わらないと思つ。年齢と共に襲つてくる肌の張りとかは、むづ、ざつともないけれど。

「はあ」

鏡に映る姿を見て溜息。

心が離れているのか身体が離れているのか、もう私には分からない。その両方でないことを探るけど、きっとそういう日も近い。子は鎌とはよくいったもので、何の特技もない私にはあの子を一人で育てていくだけの甲斐性がない。正直、そうなるのが恐い。だから、独りであることくらい我慢する。邪険にされるわけでも喧嘩を毎日しているわけでもない。

ただ、独りなだけだ。

洗濯機を回して、掃除をして……ネットオークションでも覗いてみようかな。そして、お昼を食べて、買い物に行って、夕飯の準備をして……帰りを待つて、また片付けて……毎日毎日毎日ほぼ変わることのないサイクル。

早く生き終れば良いの。」

ふと氣を抜くとそんなことばかり考えるよつになつていた。

「ねえ、もう一緒に寝ても良いかな?」

「疲れてるからこつもと一緒に良いだろ?」

「そ、そうだよね。うん……おやすみなさい」

一緒に眠らなくなつたのは子どもが産まれてからだ。

夜泣きが酷かつたし、彼には仕事があるから夜はちゃんと寝てもらわなくてはいけなくて、必然的に私と子どもは寝室を出ることになつた。

それからは一階の和室が私の寝室。子どもが一人部屋を持つよつになつた、今でも、だ。

今夜も、ぱんぱん。とお布団の端っこを揃えて眠る支度を整える。

## 第一話

\*\*\*

……珍しいな。

気が付いたら私はまた、いつもの神殿に居た。私は、のんびりと緑の美しい中庭を散歩している。周りが全て白いもので覆いつぶされているせいもあってか、そこにある緑が眩しく感じた。

中央には柔らかい水を、延々と循環させている噴水があり、私はその水盆に自分の姿を映す。

この世界では、私は現実より十歳前後若いような気がする。長い髪は、不思議な色をしていてエメラルドに輝く水面のようだと、皆が褒め称えた。

抜けるように白い肌、整つてバランスの良い目鼻立ち。柔和な雰囲気を持っている。もうすでにそれは私ではない別の誰かだ。

「……神子姫様」

水盆の水を弾いて自分の姿を乱し溜息。丁度そこへ掛かった声に顔を上げた。

「皆が探していましたよ？」

「本日の参拝時間は終わっているでしょう？」

そうなのか？ 自らの口から発せられる言葉も良く分からぬ。

私は立ち上がりにこやかに歩み寄つてくる男に、につこりと微笑んだ。癒しの神子、聖女なのだから常に穏やかで淑やかに微笑んでいれば良いだろう。

私は常にその体を崩さない。

そう思つてゐるのに彼にはいつも調子が狂う。今日も、だ。

「貴方、また怪我をしたんですか？ 優秀なんて実は嘘なんじや」「ああ、まあ、そうですね」

左腕の上腕が血で汚れていた。

そのまま来るなんて、この男くらいだ。彼は北の方の国の騎士。王陛下の側近で騎士のくせに盾になりたがる。だから向ひことよりも受け取ることが多くて生傷が耐えない。

神殿に使っている人たちからは、とても優秀な人であると聞いたのだけど、そんな風ではない。

腕の届く位置まで歩み寄つて、そつと傷口に手を伸ばす。切れて開いた袖の中を見れば肉が断たれている。それでも骨が見えていいからまだ浅い。

「痛くないの？」

恐る恐る、ちょこんと触ると顔を顰めた。  
そりや痛いに決まつている。

「痛いに決まつてます」

本人もそういうている。

くすりと笑みが零れてしまう。騎士のだから、そこは強がるべきだと私は思うんだけど。痛がる彼を無視して、私は傷口に触れ瞼

を閉じ、治ったときのイメージを頭に描いておらずと嘆かれる。

「ひー も、つと優しく

無視した。

もつと強く押してやる。

手のひらがじわりと暖かくなり、頭の中で光が弾けて溶けてなくなる。もう、傷は跡形もないはずだ。

ゆつくつと目を開くと、血の痕だけが残っていた。痕にならなくて良かつた。あまりに酷い傷のときは一度では治らない。

「他にも傷がないか確認して貰いたいんですけど?」

懐いた犬のような顔でそう問い合わせてくる彼に私は断る術もなく私室へと向づ。

彼は彫刻のように均整の取れた身体つきをしていて、とてもしなやかで美しい。

男の人には美しいところのもうひとつかなあと想つけど……。

そして彼は、騎士なんて身分のせいとかとても優しく思へすタイプだ。

誰かのために何か、というのが染み付いているのだと思つ。そういうところはリアルな私に少し似ている。でも、決定的に違うのは、彼は國民から、王陛下から信頼され必要とされているところだ。

居ても居なくても同じなのではないかと感じることしか出来ない私は全く違う。

「…………タベ、誰か来てました?」

「来てましたよ」

寝台の中でもあつさり答える。

私はどうせ人形なのだから、誰かの持ち物ではない。強いていうならこの神殿の持ち物だ。隠すこともないだろう。

どうせ、誰もそんなこと気に止めない。

「痛くされませんでしたか？」

「分からないです……あまり覚えていないから……」

枕を背にして、座った私の服を丁寧に降ろしていく。  
身体つきの割りに動きはとても纖細だから、心地良い。柔らかく  
身体を撫でてくれる手つきに、ゆっくりと双眸を落とした。

「傷、付いていますよ、」「……」

「つ！」

べろりと、足の付け根を舐められて私は悲鳴を殺した。ちゅうと  
軽く吸い付かれ、ひりひりした感覚が少しだけ和らぐ。

私の恥ずかしく開かれた足の間から、顔を覗かせ見上げてくる彼  
の瞳は綺麗だ。

「神子姫様は、自身の傷は癒せないのだから、きちんと文句をつけ  
ないと駄目ですよ」

ぎじりとベッドを軋ませ私の畳の前まで戻ってきて、そう告げる  
と、ついつい頬を撫でその指先で唇をなぞる。ふ……つと吐息が零れ、  
思わず頬が赤くなる。

無感情でいよつと思つてこるので、どうにもペースを崩される。

「俺が優しくしてあげますから……」

言葉尻で吐息が重なり、唇は塞がれた。

甘く唇を吸い、微かに開いた唇から舌が割りいつてきて、歯列を丁寧に撫でる。そしてその奥へと入つてくる舌先を、自ら絡め取りそうになつて慌てて引っ込めた。

私は動かない感情を持たない人形でなくちゃ……他がきっと辛くなる。

きゅっと瞳を閉じて、やわやわとした、丁寧な愛撫に身を任せた。彼はこの一時だけでも”私”を抱いていると感じさせてくれる。私自身は他と同じように特に何もしないけど、思わず私も何かしてあげたくなってしまう。稀有な存在だ。

そして、ことが終わっても朝までだらだらと私の傍に居てくれる数少ない人物でもある。

「…………名前、聞いても良いですか？」

「神子姫で結構です」

夢なのだから、私が私である必要はない。

名前なんて必要ない。だから私は誰にも名乗らない。

しつこく聞いてくるのはこの男くらいだ。どうして、そんなものに拘るのだろう。この人だって国に帰れば恋人の一人や一人居るだろうし、もしかしたら、妻帯者とかかもしれない。

私が神子姫で、神に近い存在だなんて馬鹿げたことを思つてくれているうちには、私はその痛みから解放される。私は誰も裏切つてい

ない。夢なのだから……。

枕してくれている腕の先が優しく私の髪を撫でる。こんなことしてくれるのは、夢の中では時折あるけど、毎回そうなのはこの騎士だけだ。

リアルでは絶対にない。

誰も、私に触れない。

指先が触れることも、頬を寄せることも、唇を寄せることもない。私なんて露のようなものだ。

恋愛なんてものをしていたころは、甲斐甲斐しく触ってくれたしがい言葉も掛けてくれた。夫婦になり、家族になったところから、私は……家に人数が増えていくと共に独りになつた。

「…………え？」

「つ！　あ、す、すみません」

そんなことを考えていたものだから、思わず彼の胸に頬を寄せてしまつた。私からなんて何もしちゃいけないのに……自分自身の驚きと羞恥心から私の顔は真っ赤になつてしまつた。

お口様が傾いてしまつていて良かつた。きっとハッキリ見たり出来ないはずだ。

慌てて顔を逸らし、背を向けた。  
もう、帰つてくれれば良いのに。

そう思つけど、彼はそんなことはしなくてその大きな身体で私のことを包み込んでしまつ。私に名を『えよつとする。無感情に意味を持たせようとする。

正直、私はこの人が怖い。

\* \* \*

目が覚めると変わらない一日が始まる。  
私はいつもと同じように動き、いつもと同じように過ごす。今日  
の変わったことといえばお隣りの愛犬が赤ちゃんを産んだことくらい  
だ。

見せてもらつたけどすっごくちつちゃくて頼りなさげで可愛かつ  
た。  
そんなちつちゃなこれから命にすら、羨ましいと思つてしまつ  
私は本当に早く終わつてしまえば良いと思つ。

## 第三話

\*\*\*

「麗しき姫神子様、どうか私の思いを……」

「貴女を思わない日はありません、貴女のお姿を拝めない日は空に太陽が昇らないも同然……」

「神子姫様。貴女には最上級の贅沢が……」

……ひるとい。

今日は朝からずつとこんな調子での謁見が続いている。

気持ちなんて微塵も籠つていなくて。私に恋なんてしてないいくせに。私なんて必要ではないいくせに。

こぞ戦になれば私の力が最大限に役に立つと思つてゐる下心が見え見えた。

囮い込んだものの勝ち。

だから、私はどの台詞にもにっこりと微笑んで「ありがとうございます」と繰り返す。

リアルにもうんざり。

夢の中でもうんざり。

結局私に居場所なんてない。

次に田を覚ましたら、もう、どこにも行きようがない、どこか遠くへと身を落とそう。きっとその方が楽だ。もう生き終わるのを待てない。

子どものことは心配だけだが、でも、きっと私が親じやないほうが

あの子には幸せだと思つ。私みたいに誰にも相手にされない愛されない、

独りぼっちの女居ないほうが良い。

「……本日の礼拝は終了しました」

礼拝堂に響いた声に胸を撫で下ろす。

馬鹿馬鹿しい駆け引きの時間が終わった。今日はみんな帰った。他人が居ても独りなのと、一人でいて独りなの、どちらが良いだろう。

そんなことを考えると自嘲的な笑みが浮かぶ。

今日はここにも居る気がしない。

さつさと田が覚めて、終わりを……。

「神子姫様。良かつたまだここに居たんですね？」

珍しい。

一日連続で彼が来た。

私が驚いて顔を上げると、こつもと同じようににやかに大股で歩み寄つてくる。

「また、怪我をしたのですか？」

「まさかっ！ 僕そんなに怪我ばかり……んー、まあ、しますかね？」

私の意地悪な台詞に彼は苦笑して頭を搔いた。

彼は全体的に印象の強い人だからなんとなく仕草とか覚えている。つい、頭を搔くのは子どもみたいな癖だ。そう思つとちょっとびり可

愛らしい気がしてくる。

顔には出さないけど、少しそうと胸のうちだけで微笑んだ。

「他の国の騎士はそんなに頻繁に来ないわ」

「……ふーん」

あれ？ 声が翳つた。

珍しい。いつでも明るめの優しい声色だから、余計に目立つた気がする。

「昨日の傷口が傷むんです。もう一度見てもうえませんか？」

前に流れていた私の髪を一束掬つてそっと唇を寄せた。  
髪の毛に感覚なんてないのに、その所作に、心臓がくんくんと高鳴ってしまった。

嫌だな……恐い。

「…………嫌です」

思わず口から出でてしまった。

出でてしまつたあとで慌てて私は口を塞ぎ「なつ、何でもありません」と首を振る。お人形は否定なんてしない拒絕りしない。私は

「お姫様は」機嫌斜めなんですね？」

慌てる私とは対照的に、彼は人好きのする顔に笑顔を浮かべた。

「そんなこと、ありません……参りましょう」

「ほんと一つだけ咳払いして、表情を消すことに尽力した私はそれに成功したこと自覚して、踵を返す。

「待つて待つて、今日はひい

「はい？」

がしつと大きな手に手首を掴れた。

「街に出でましましょ？」

「え？ ですが私は」

「誰か、出では駄目だといつたんですか？ 僕は姫が良しとしないことはしてはならないということしか聞いてませんけど？」

「で、でも、そんなこと今まで誰も……」

私は夢の中でもこの籠の中にしかいなかつた。  
夢だからこよつ外があるなんて思つてもいなかつたから。

「じゃあ、俺が初めてですね。なら、善は急げ参りましょ。貴女  
が消えてしまふ前に、さあ、神子姫様」

ぐいぐいと私の手を引いて突き進む。

しかし、彼はふと手を止めて「それでは立りますね？」と、私  
を見て、礼拝堂に私を迎えてきたのだろう信者に事情を説明し身支  
度を整えてくれた。

夢の中の私はいつも白い服を着ていたし、他なんて何も考えてい  
なかつたから新鮮。少しジプシー風の服は、私の気分だけでもお話  
の中の遊牧民のように自由にしてくれる気がした。

「綺麗ですよ」

「そうですね、ありがとうございます」

褒められたのは服だと分かっている。私を、私個人を褒める人など居ない。

だから素直に照れもせず謝辞が述べられた。確かに丁寧な刺繡は職人技だと思うし、とても綺麗だ。スカートを少し引っ張つてその柄に魅入ると、顔が自然と綻ぶ。

「俺は……」

「はい？」

「いいえ、なんでもありません。行きましょう」

いい掛けでやめられると気になるのだけど、言及するのはきっとここでの私“神子姫様”らしくはないだろう。私は、ぐっと飲み込んで「はい」と頷いた。

そして、彼は神殿の大きくて重厚な扉をこともなく、ぱんっと開く。西日が眩しく差し込んできた。思わず両目を閉じて、身を硬くする。

「大丈夫ですよ。お日様は貴女に悪さなどしません」

くすくすと笑う彼に「わかってます」と告げて、額に手を翳すとゆっくりと目を開く。

「これはとても高いところに建てられている神殿だった。

見渡す限りの大自然。

僅かに夕日の赤に染められる緑がとても優しい。長く続く道の先には小さく街並みが広がっている。

みんなこんなところまでわざわざ私に会いに来ていたのかと思つ  
と、少し感慨深い気持ちになつた。

「馬に乗つた」とはありますか?」

傍の大樹に馬を寄せていたらしい。

手綱を引いて私の傍に戻ってきた彼は、私が小さく首を振ると「  
それは、良かった」と微笑む。

出来ないことを喜ばれるのは初めてだ。

その気持ちが顔に出ていたのか、彼は馬の隣りで膝を折りながら  
私を呼ぶ。

「俺にも貴女にしてやしあげる」とが増えるでしょ?」

何が楽しいのか、彼はにこにことそう告げて私の前に手を組み差  
し出した。

「え?」

「ひらひら足を掛けてください」

私は神殿の中でしか生活しないし、さつき卸してくれたばかりだ  
から、靴が汚れているということはないけど、それでも人の手に足  
を掛けるというのには抵抗がある。躊躇した私に、「お一人では無理  
です」と微笑んで「さあ」と重ねる。

「…………」「みんなさー…………」

小声で詫びて私は馬の腹に手を置いて足を掛けた。

そして声を掛けたあと、ぐんつと持ち上げられ馬上へと上げられ

る。

「ひー」

本当に高い。

思わず眩暈を起しそうになつてふらりとすると、直ぐに鞍に足を掛け身軽に私の後ろへと乗つた彼に支えられた。

「暗くなる前にいつて戻らなくてはならないでしょひー。急ぎますから、しっかり掴つていってくださいね」

そういうて私も手綱を握らせて、抱き込むようにしたら、ぱんっと手綱を弾いた。

道に両脇の木々が迫つてくるようで恐い。ジヒットコースターに乗つているようだ。序にお尻も痛い！

でも……頬に当たる風が気持ち良い。  
背にしたぬくもりが暖かい。

一十分くらいだと思つ。

正確な時間は分からない。ずっと馬を飛ばして下つてみると塀に囲まれた街に到着した。

馬を預けにいった彼を待ちながら、ちらちらと門の中を覗き込む。夕方のせいか、みんな忙しそうに行きかつている。

厩は門番の傍にあり、彼はそこに馬を預け戻ってきた。

行きましょう。と差し出された手を取つて街の中へと入つた。  
レンガで舗装された道はでこぼこしていたけど、なんだか楽しく  
田にする景色はどこか可愛らしい。童話の中の街みたいだ。  
神殿の外はこんな世界が広がつていた。これまで出てこなかつた  
のが惜しいくらいに素敵だ。

……凄い。

暫らく歩くと広場に出た。

その中央には大きな噴水があつて、水が踊つている。神殿の噴水  
はただ静かにお行儀良く、水を湛えるだけなのに、ぱしゃぱしゃと  
跳ね、西日を反射して煌いている。

「宝石みたいね」

キラキラキラキラ……輝いている。凄い。凄い！

生きてるみたいだ。

踊つてゐる、歌つてゐるみたいでもある。

凄い、凄い。

綺麗。

とても、綺麗だ。

私は彼の手を解いて気ままに歩いた。

道行く人は忙しく私に気を取られる人は居ない。時折、足を止める人が居るけど、声まで掛けてくることはない。

広場には人が集まるのだろう。

その周りにはお店が沢山軒を連ねていた。日用雑貨屋さんやアクセサリー屋さん、お菓子屋さん、ぱっと見て分かるのはそんなところだ。

……可愛い。

私がふと足を止めたのはアクセサリー店だ。  
ショーウィンドウに飾つてある品はどれもアンティーク調のもので凄く可愛くて、静かにそつと煌きを押し留めている姿がいじらしい。

そういえば、私、こういうのが好きだった。  
リアルでもすっかり忘れていた。

数字は書いてあるけど、物価も分からぬし私は文無しだし、何より夢だから、見るだけだ。

暫らく眺めて堪能したあと、私は次に足を進めた。

次に足を止めたのは、お菓子屋さんだ。棚に並べられた瓶の中に綺麗で可愛いお菓子が沢山入っていた。

素敵。

綺麗。

可愛い。

私はこの短時間にこれを何度も口に仕掛けて飲み込んだだろ。ひどきどきとわくわくが一緒に押し寄せてきて、凄く高揚している自分が居る。こんな気持ちとても久しぶりだ。

「少し買つてきましょうか？」

「うん……つあ、い、いえ、私は別に……その……」

不意に声を掛けられて、思わず満面の笑みで振り返ってしまった。

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。

私はここでこんな役回りじゃない。

わたわたと取り成したけど後の祭りだ。彼はここここして「噴水のところで、待ってください」と店の中に入ってしまった。

私は申し訳なく思ったものの、あとを追い掛け止めるという行為も彼にとつて侮辱に当たるような気がして、いわれたとおり噴水のところまで歩いていった。

近くによると水が掛かりそうだと思ったのに、そんな杜撰な作りはしていなくて上手に受け止められている。

そして直ぐに戻ってきた彼に小さな瓶を渡してもらつた。

「……ありがとうございます」

神殿に居れば、山ほど貢いでもらうから、何かを受け取るのはこれが初めてというわけではないのに、凄くどきどきした。

手の上に載せられた瓶の中に入っているものが、物凄く高価な宝物のように感じじる。

「これ、キャンディですか？」

「そうですよ、おまけに貰つたからひかりもどりっせ」

あーんつと続けられ、反射的に口を開けてしまった。

そこへビーンズくらいの大きさの飴が入れられる。じわりと甘い味が広がる。

美味しい。

ふわふわと笑みが零れるような優しい甘さだ。

……幸せ。

そんなことを思つてしまつた自分に驚いた。目が覚めたら、もう永い眠りにつくことを望んでいたのに、私ときたら何を考えているんだろう。

「可愛い」

「え？ あ、ああ。そうですね。とても可愛らしいです。それに美味しい」

驚いた。

一瞬私のことをいわれたのかと思った。

どんな自意識過剰だろう。恥ずかしい。そんなはずない。外見はどんなに取り繕つたとしても、私はもつ誰からも愛されることのない空っぽの人間だ。

可愛いなどといわれて良いような人間じゃない。

私はどんな顔をして良いか分からなくて、手の中でキラキラしている小瓶を見詰めた。

「ですから、それが何ではないのですか？」

「え？」

「いーえ、何でもないです。そういう、それから、これも」

「ここに」と楽しそうにやういって彼は私にもう一歩、近寄るとし  
やうじと首にネックレスを掛けてくれた。

「さつや、そのまま硝子破つて持つて帰るんじゃないかつてくらい  
見ていたから」

「そー！ そんなことしませんっーー！」

「はは、そうですね。神子姫様がそんなことをするはずはない。そ  
うですよね？」

ふ……と彼の表情に影が落ちる。

「いつもは」「んなことないのこ、ビウしたんだねーっ」

私が首を傾げると彼は元の笑顔に戻つて話を続けた。

「そんなもの貴女がいつも身に付けているものに比べたらおもちゃ  
も同然ですよ？ その程度なら俺の薄給でもこくらでもお贈り出来  
ます」

「そんなに沢山いらないです。これで十分……」

首から下がつたペンダントトップを手のひらに載せて、タロを反  
射させる。

透明度の高い黄色い半球体が光を反射してとても綺麗だ。

現実に持ち帰れないのがとても残念。

それに、彼も薄給だなんて謙遜も良いところだ。

私に個人的に会いに来るだけで、どのくらい掛かっているのか分からない。きっと普通の寄付金の額ではないはずだ。それなのに彼は私が顔を覚えるくらい頻繁に来ている。財力のない人間には絶対に出来ないことだと思う。

彼も騎士なんてしていなければ、傷の手當に私を必要とすることもないだろうに。気の毒な限りだ。ああ、でも、こういうのは経費で落ちるのかな？ そうだよね？ 彼が居ないとみんなが困るんだから彼への癒しは国の必要経費だ。

……そつか、だから、気負わずに通ってくれるんだな。納得した、つて、なんだかそれでは私が待つていてるみたいだ。そんなはずない、入れ替わり立ち代りいろんな人が来るんだ。私だって彼に拘る必要なんて何もない。

彼の気まぐれな行動に一喜一憂するなんて間違っている。  
ふ……と心に暗い影が差した。

私は、こうして神殿から連れ出してくれただけでも、彼に感謝すべきだ。どうして？ なんて考えるべきじゃない。

どこかしょんぼりと氣分が萎えるのと同時に手に乗っていた宝石の色も翳つた気がする。口の中の飴玉もその形をなくしてしまった。私も次に目を覚ましたら、これと同じで良いや……。

「好きです」

……え？

出そうになつた溜息を飲み込んだときに、不意に投げ掛けられた。

聞き間違い？

聞き間違いだよね？

顔を上げれば、彼が真っ直ぐに私を見ていた。

「え？」

「貴女が好きです」

今度は聞き間違つことどが出来ないほどハッキリと告げられた。  
その瞬間、どくんと胸が高鳴った。

そのあとは痛いくらいに、どんどんと強く脈を打つ。

嘘だ。嘘だ、嘘だ……そんなこと有り得ない。

「このまま、俺との町を出ませんか？」

ほり、ほりほり……この人もやつぱり……

「わ、わた、しの、力が必要ですか？」

分かつていてることなのに、なんで今さら声が震えるんだろう?  
そうだ、私個人が必要とされるわけじゃない。彼らにとつて必要な  
のは私の持つている力。

私が必要だなんて、そんなわけない……。

その証拠に、彼は曖昧な笑みを浮かべてバツが悪そつに頭を搔いた。

「俺は、生傷の絶えない騎士ですからね？」

そうだ。

傷を一時でも早く治すためには私が必要。私がいれば、どんな傷でも大抵は治つてしまう。こんな重宝する道具は他にないだろう。手元に置けば経費も掛からなくなるだろう。

……私である必要なんて、ない。

「貴女に会つたためには、条件があつて、金も必要ですが、それ以上に”傷”が必要なんですよ」

当たり前だ。

私は”癒しの神子”としてこの世界で重用されているだけだ。傷がない人間は私になんて興味を持たない。

持つ必要がない。

こんな詰まらない人間。

癒す力さえなれば不要だ。

「俺は貴女が好きで、それだけで満たされてしまうから心の傷は作れない。どんなに心に傷を負つても、貴女の顔を見てしまえば勝手に癒えてしまう。だから生傷を増やすしかなかつた……貴女に会いたかつた」

何をいつてるんだ、この人は。一体何を。

そんないい方をしたら、まるで……まるで、自分で傷をつけてしまつ。

「時折深すぎる傷は貴女を苦しめて、悪かつたと、そう、思つています。刀傷なんて本来女性に見せるよつたものじゃない」

私は信じない。

もし、もし、今この人がいつてていることが本当でも、そんなものは長くは続かない。

「ああ、でも、いつも表情も態度も崩さない貴女が、そのときだけは苦悶の色を浮かべるので、俺は少し嬉しかった……俺のことで貴女の心が揺れていると思ったら、心は満たされた……なんていつたら晒しますか？」

「そんな、こと」

分からぬ。

それは晒うところなのだろうか？ だつて、彼はいつも舐めたら治るような軽い傷ではなくて下手をしたら、一生物の傷になってしまつようなものばかり抱えていて……。

「癒しの神子の評判を聞いて、一度見てみたいという好奇心に駆られて足を運んだのが最後、俺は貴女から離れられなくなつた……傷さえあれば、貴女の瞳に俺を映し、俺だけのために発してくれる声を聞き、俺だけのために時間を取つてくれる。一分一秒も無駄にしたくありませんでした」

真摯に私だけを見詰めてくる瞳は、夕焼けにキラキラと輝いていてとても綺麗だ。

けれど、その瞳に映る私は、本当の私の姿ではないし、私に向けてくれるその気持ちだつて、今は、たまにしか会わなくて、そのときしか触れることができないからそんな風に恋に似た感覚を抱いているだけだ。

どうせ今はそんな風に熱情を見せてくれていたとしても直ぐに冷めてしまつ。

そして、それはまた、私を独りにする。  
私はもう、独りにはなりたくない。  
独りは嫌だ。

現実でも、夢の中でも……そんなの、そんなの哀しそう。  
嫌だ、信じたくない。

こんな中身のない私を好きになる人なんて居ない。好きになつても直ぐに飽きられてしまつ。

わかつてゐる。  
わかつてゐるのに！  
どうして……どうして……今、私は一瞬嬉しいと思つてしまつた  
んだろう。

愛情表現なんて毎夜毎夜様々な形で寄せられるのに……心なんて動かなかつたのに……この人は危険だ。この人は恐い。私の心を惹き付ける。

「……姫……」

何もいえない私の頬に彼の手が掛かる。私はずっと彼を見ていたはずなのに目の前の彼の姿をハッキリと捉えることが出来ない。ゆらりと揺らいで輪郭がぼやける。ぱちりと瞬きをするとほらほらはらつと頬の上を雲が伝う。

どうしよう、止まらない。

ほらほらほらほら、意味の分からぬ涙が溢れる。

嬉しいの？ 違うよね。

じゃあ、悲しいの？ 分からないよ……。

ただ、ただ、苦しい。苦しくて苦しくて、胸が痛い。ざつして痛いのか分からない、分かるのが、恐いよ……。

「すみません……えっと、その、泣かないで。姫を恋い慕うものは

沢山居るのに、姫に迷惑を掛けるつもりは、あ、ああ、いえ、全く  
なかつたといえば嘘ですが……けれど、泣かせるつもりはなかつた。  
本当に、「ごめん、そんなつもりでは」

不安げにそつと彼の指が頬に触れる。

反射的に身体をびくりとこわばらせてしまった。

その動きに彼は刹那指を引っ込めようとしたけれど、「泣かないで、  
ください……」ともう一度頬に触れた。

私は泣くときはいつも独りだ。

いつも独りで泣いて独りで身体を小さく抱え込む。弱りきった心  
も一緒に独りで抱えて……。

誰も、泣いている私に触れたりしない。

本当は触れて欲しい。泣き止むまで抱き締めて欲しいし、大丈夫  
だと嘘でも良いから慰めて欲しかった。それなのに、リアルで、あ  
の人はそうしてくれない。泣き虫な私に呆れて「何で泣いているの  
か分からぬ」冷たくそう告げるだけ。

私も分からぬのに、ただ、ただ、虚しくて余計に涙が溢れた。

「驚かせてしまいました、よね？　でも、真実なんです。貴女が表  
情を崩すたび、俺に新しい顔を見せるたび、俺はどうしようもなく  
貴女が愛しくなる。泣いても良いですから、俺を傍に置いてくださ  
い……貴女の心に寄り添わせて……」

頬に触れていた指先が気遣わしげに目元を拭い、頬を包む。開いていた手が、少しだけ戸惑つて、でも、決意したように、つと頬に掛けた。

そして、そのまま軽く上を向けられて唇が重なる。

「…………ん、…………うん」

驚きに見開いた瞳を落としかけて私は反射的に彼の胸を、ぐんっ！と押し突き放した。

「「、「めんなさいっ……」

そのまま私は逃げ出した。

入り組んだ街ではないから直ぐに入ってきた門を発見出来た。そして……

\* \* \*

「つ！　はあ、はあ、はあ……」

私は飛び起きた。

「う、ううっ」

まだ心臓はどきどきと高鳴っていた。

もう何もぶら下がつていない胸元を握り締めて私は咽び泣く。突っぱねた腕が震える。

彼を傷つけた。

物凄くショックを受けた顔をしていた。

自分が傷つくのが恐いばかりに彼を傷つけた。

最低だ。

私は最低……あんなに笑顔が似合つ人だつたのに。夢の世界で始めて”私”を見てくれた人だつたのに……。何度も何度も心の中で謝罪した。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめん、な、さい。

何度も何度も繰り返したけど、当然のように答えはない。

「おい、どうかしたのか？」

夢なのに、一瞬彼かと思つた。

けれど、やはり現実で、ほんの少しだけ開いた襖の隙間から主人が顔を覗かせていた。私は咄嗟に後ろめたい気持ちになつてしまふで答える。

「え……あ、その、『』、『』めんなさい。恐い夢を見て」

「つるさいからさつさと寝ろよ」

「……は、はい。」めんな、さい

最後まで聞くことなく、かつんと襖は閉められた。

これが、私の現実。そして、今度はこの現実を思つて涙が止まらなくなつた。

ほら、ね。

これが、現実。誰も私に触れてはくれない……夫でさえも触れないのに、他に誰が私なんかを愛してくれるといふんだらう。

だから、私はいつものように、震える身体を自分で抱き締めた。強く強く。何度も平氣だと慣れっこだから、辛くないと重ねて。

……泣いても良いですから、俺を傍に置いてください……

夢が、現実なら良かつたのに。

..... P P P ..... P P P .....

「.....ん」

ぱちんっと自分の傍に置いておいた田覚ましを止める。あれから私は纏めて睡眠を取らなくなつた。五分とか十分とかの短い睡眠を時折取る程度。必ず田覚ましは掛けるようにした。

「このくらこなら、私は夢を見ない。

また、あの夢の世界に落ちるのが恐い。傷付いた彼の顔を見るのが恐い。例え長くは続かないものであつたとしても、あのとき彼は真剣だつた。

今思い返せば、確かに彼の傷は自分でつけられるとこばかりだつた。背中はとても綺麗で「背に刀傷を受けるのは恥だから死んだほうが良い」と笑っていたのを思い出した。

自傷行為はとても辛かつただろう。

いつだつて私のところへ来たときの傷は浅いものではなかつた。でも、躊躇い傷一つなかつた。彼の真摯な思いをそのままあらわしているよつだ。

..... 心に傷を負つても、貴女の顔を見れば勝手に癒えてしまつ.....

はにかむよつてきうこつてくれた。

そんな彼に、私は何も出来なくて、それどころか傷つけて……いつでも、彼は優しかった。他の人みたいに建前だけの褒め言葉を並べるような人ではなくて、何の飾りもなく、ただ好きだと伝えてくれたのは彼だけだった。

## 第六話

好きだよ。  
愛してる。

可愛い、綺麗で、君以上の女性は居ないと思つていて。  
オレは君と居られるだけで幸せだよ。

そういう続けてくれたのは現実の主人だ。けれど、結局それも今  
の体たらくだ。  
きっと彼も同じようになる。

私に中身がないから。きっと無関心になつて、私なんて邪魔になつて、私はまた独りになつて……夢でまで、好きだと思った人に  
独りにさせられるなんて堪らない。

好きだと思つた……思わず自分の考えたことを繰り返して苦笑する。そう、好きだと思う。夢で恋をするなんて馬鹿げてる。分かつ  
ているのに、止まりそうにない気持ちも恐い。

だから、私は眠るのが恐い。眠りたくない。あの人に会うのが恐  
い。

それに、ほんの少しだけ本気の好きは、主人に申し訳ないような  
気がして、後ろめたい部分もあつた。

それなのに、人間は本能的に睡眠を欲する生き物で、私は十日と  
持たないくらいで倒れてしまつた。丁度、週末で主人が家に居て……  
私は、必死で起き上がるうと傍にあつたテーブルを掴んだのだけ  
ど、つるりと滑つて膝から落ちる。

そんな私に歩み寄つてくる足音が聞こえて「ごめんなさい、大丈  
夫だから」と口に仕掛けたところで

「普段から、調子が悪ければ医者に掛かれといつているのにっ！  
そんなになつてっ！ オレの立場も考えろよ」

そう罵られて、私は意識を手放した。子どもが遊びに出ていて、  
本当に良かつた。

後ろめたいなんて思つた私は、本当に、馬鹿だ……

＊＊＊

「つぐ……ひつぐ……」

気が付けば、私はやはりいつもの神殿に居て、私室の寝台に突つ  
伏して泣いていた。

私は主人のお荷物でしかなかつた。

私が居るばかりに彼に迷惑を掛けてしまつていたんだとやつと氣  
が付いた。

居るだけなら許されると思つていたのに。

私、は……。

涙があとからあとから湧いてきて全く止まらなかつた。

「……姫様？」

かたんつと扉が開く音がして、信者の一人が部屋の前に立つてい  
た。私が「ごじご」と顔を拭つて、そちらを見ると「神子姫様っ！」

と悲鳴のような声を上げて駆け寄ってきた。

「ビリ、ビリですかっ！」

話を聞けば、私は誘拐されてしまっていたことになつていたらしい。

普段ならそう大して時間は過ぎていなかつたのに 確かに十日もこの夢を見ないなんてことはなかつたけれど 最後に一緒に居たのが北の国の騎士だつたことから、彼が捉えられ尋問という名の拷問を受けていたらしい。

そして、そのことで各国の調和が崩れ始めている。

「誤解ですっ！ 私はちゃんとこゝに居ますっ。誰にも誘拐などされていませんっ！」

地下牢 懲罰房 なんものがこの神殿の中についたことすら吃驚だ。私は現実も夢の中のこととも全く何も知らないに等しかつた。

私は、ことを知らせてくれた信者に案内されて、駆けつけた場所でなりふり構わず叫んでいた。

「神子姫様、今までどちらにっ

「早くっ！ 早く鍵をつ！」

状況説明を促す牢番から、私は半ば無理矢理鍵を受け取つて、その奥へと駆け込んでいった。冷たい岩牢はその殆どが空室だつた。

「……今つ！ 今開けますからっ！」

一つ一つ確認して、最奥の部屋に彼は囚われていた。

両手を壁に固定されて酷い拷問を受けていたようだ。焦るどざの鍵か分からなくなるつ。取るのももどかしく、がちやがちやと派手に鍵を鳴らす。

ああっ！ もう、どれなのつ！

「……あ、れ……み、こ姫さま……」

「待つて、待つてね！ すぐ、直ぐに助けてますつ！」

「そん、なに、焦らないで。怪我はありませんか？ また、泣いていたんですか？ 大丈、夫、ですか？」

満身創痍の人にいわれたくない！ 私の心配なんてしている余裕ないでしょつ！ と、怒鳴りたいところだけど、まずは鍵、鍵つ。

あ、やつと入つたつ！

乱暴に扉を開けて雪崩れ込むように駆け込むと、手鎖の鍵は直ぐに見付かった。他のものより一周り二周り小さかつたから。

かちや、かちや……と、背伸びをしてようやく届く鍵穴に鍵を差込み、震える指先でなんとか回す。

「どうして、自分は関係ないつていわないのつ！ 私を誘拐なんてしていないでしょつ！」

「貴女が、居、なくなつたのは事実、です」

「でも、貴方のせいじやないつ」

「ふふ、怒つてます、ね」

「当然ですつ！」

かちやり……。

やつと一つ外れた！

重力に従つて落下した腕は、そのまま私の身体を抱き締めた。怒る私を無視して、彼は私の腰を抱いたまま肩に顔を埋める。

「俺のために怒ってくれるんだ……」

馬鹿みたいに当たり前のこと、感慨深く掠れる声で告げて、身を寄せてくれる彼からは血の臭いがする。彼の痛みを思つと、どうして逃げ出してしまつたのだろうといつも後悔で私はまた涙が溢れた。私が泣いている場合じやない。

「は、離して、まだ片方が……」

「嫌だ、離さない……貴女の、居ない、世界に用はない……どうでも、良いかと、思つたんですね」

「私が戻るとは、思わなかつたんですか？」

そんなの、薄情だ。

私はこの世界に居たり居なかつたりは常だつたのに、それなのに、その可能性を望まなかつた。

「俺、姫様に嫌われたから……戻つても会つてもられないと思いました……ふふ、それ、なのに、こんなに取り乱して、必死になつて、ふふ、お、かしい……おかし、過ぎて、涙が、出ます」

尚腕に込められる力は痛いくらいだったけど、彼から伝わる熱い吐息は本当に泣いているときのもののみで私は離せといえなくなつた。

その代わりに私は地面に踵を降ろし、そっと彼の背に腕を回す。

「ねえ、分かつてますか？ 私、癒す以外に特技ありませんよ？ 面白い話も得意ではないですし、正直、淑女っぽくお姫様らしくしているのも大変です……」

「構いませんよ……だって、俺は、剣以外でも剣と小器用にこなします。面白い話も姫が望むならなんでもします。貴女の前だけなら、紳士っぽくしていられますから、ね……」

そして、お互に笑いあつた。  
変なの。

「こんなところで笑いあえるような理由なんてないはずなのに、胸のどきどきがとても心地良くておかしくて仕方なかつた。  
おかしくて、おかしくて……とても、嬉しくて……ビうじょうもなかつた。

「手、解きますね」

本当はもう少しこうしていたかったけど、抱き締めでもううなりやはり両腕が良い。

私はそつと囁いて、腕の力を緩めてもらいつと、残りの拘束を取り外した。かくんっとその場に膝をついた彼に合わせて私もそのまま正面に膝をつく。

いつたた……と、顔をしかめつつ立ち上がるつとする彼の頬を両手で包み込んで、私は、すつと顔を寄せ何かいい掛けた彼の口を塞いだ。

口の中にも恐らく傷があるのだろう。

時折息を詰めるのを、我慢してもうつて私は深く濃く口付けた。

じきじきと胸が高鳴り身体が熱くなる。

もつと、もつと長く……そう思ったのに、私の肩に掛けた腕が私を静かに引き離す。名残惜しげに、つと引いた糸がぶつりと切れると、彼は、ふ……と笑みを浮かべた。

「これ以上、今ここで俺を癒したら我慢出来なくなります。地下の牢で、なんて、マニアックな真似お嫌でしょ?」

ぐすぐすと悪戯をするときのように笑う彼に、私は、ぱあっと頬を染めた。

「冗談はやめてください! と怒ったものの、今だけは私に”癒す”なんて力があつて良かつたと本気で思う。

その証拠に、彼は自分の一本の足でしっかりと立ち上がり、私の手を取ってくれた。

地下牢を出ると、待ち構えていた信者たちに私は掴り 　　とくうと失礼だけど 状況説明を促された。

これからのこととは分からぬけれど、これまでのことは何とか納得して貰えたところで、夜は更けてしまった。これまで無口で通じていたのに、いきなり沢山の話を強要され、ぐつたりと部屋に戻ると「お疲れ様です」と彼が迎えてくれた。

私は窓辺に立っていた彼に駆け寄るとそのままの勢いで抱き付いた。

「大丈夫ですか？」

問うて見上げれば、彼は微笑んで「元気ですね」と私の腰に両腕を掛ける。

そのとき、はたと我に返り自分がここにこんなキャラではなかつたと思い出したけど、きっと遅い。私はいつもどうやって表情を封じていたのか、良く分からなくなつた。

「俺は大丈夫ですよ。姫が取り成してくださったお陰でこれ以上の言及は間逃れました」

「…………そう、良かつた」

私はまた視界が緩む。ほっとしたら、浮かぶ涙を止められなかつた。

「なんだか俺、姫を泣かせてばかりですか？」

いつて優しく涙を拭い、目尻を軽く吸ってくれる。困ったような口ぶりなのに、その声はどこか嬉しそうだ。

そんな彼の様子が私も嬉しく、甘い熱が身体を包んで直ぐに涙は引っ込んでくれた。

「もつと、よく顔を見せてください」

大きな手が頬を包み込み、私を真つ直ぐに見詰めてくる。ゆるりと細められた瞳はとても幸せそうで、私が少しでも彼を幸せにしているのだったなら嬉しいと思うと私の顔も綻んだ。

「どこも、痛くしていませんか？ 傷をつけられていませんか？」

「……私は、平氣です」

今なら分かる。彼が私に会つただけで心の傷は癒されてしまつといつていた意味が。

私も、ここで目が覚めたときは心が痛くて苦しくて、身体中の筋肉が強張つて、このまま痛みで死んでしまうんじゃないかと思ったくらいだったのに、今はどこも痛まない。それどころか、身体中には心地良い熱が宿り、自分でも暖かく柔らかい空気を醸し出しているのが分かる。

「本当に、すみませんでした。私、あんなことになつているなんて、思わなくて……恐くなつて逃げ出してしまつていて……」

「何が、恐かつたんですか？」

いいつつ、彼はそつと両手で私の頬を包むとそのまま顔を寄せて唇を重ねた。

「ん……？」

彼のキスは本当に甘くて……いや、本当に味覚的に甘い……？  
湧いた疑問と同時に、口内に何か移されて私が驚いたのを感じ取ると彼は楽しげに離れた。

「ううう」と舌で転がせば、ほんの少し懐かしい味がする。

「これ、忘れ物です」

微笑んで、どこに隠し持つていたのか私の目の前で小瓶を振った。その笑顔に私はまた胸が熱くなる。鼓動が早くなる。

夢、夢、夢……」これは夢だ、分かっている。

分かっているけれど私の胸はどこまでも熱くなる。私の心はときめいてしまう。

私の住まう現実世界での痛みも、ここでなら忘れていられる。

もう、ここが夢であることも、現実ではないことも私にはあまり関係ない。

「……き、だから」

「ん?」

だから私は勇気を振り絞る。

「好き、だから、貴方から私への気持ちが薄れる日が来ることが恐かったんです。恐くて、恐くてたまらなかつた。私の心だけが貴方を好きなまで止まってしまって、私だけが残されて、私だけが……また、独りになる日が来ると思つたら怖かつた」

「そんなこと、しませんよ」

当然のように笑うけど、人は弱いし、たつた一人を思い続けるなんて無理だ。

だつて、現に夫は私を見なくなつて、私は夢に逃げてしまいその上その住人を好きだといつている。本当に馬鹿げている、馬鹿げた話なのに……私は今、この人が愛しい。

「でも、私はとても詰まらない人間で……」

「お人形をやめた今の貴女はより魅力的ですよ。詰まらないか詰まらないかなんて、貴女自身が決めてはいけません。俺が決めるんです」

そんなの、そんなの余計に心配だ。

それが顔に出でていたのだろう、彼はくすくすと笑つて私の頬に唇を寄せ、唇の上にも可愛らしいキスを落としていつふつと額をくつ付けた。

「大丈夫、俺が、いくらでも貴女の魅力を引き出してさしあげますから……貴女はまだ、ここでお人形であつたよひし、隠してこない引き出しが沢山ありますよ……」

いつふつと彼の人差し指が私の胸を突く。

その小さな所作から熱が身体中に広がるような感じがした。

「尽きたらどうするの？」

「心配性ですね？」

ネガティブ過ぎる私の問い掛けにも彼は動じることなく、はつきりと何の問題もないとこつよう答えてくれる。

「そのときは作れば良いんですよ。大丈夫、大丈夫です。俺がいくらでも貴女を変えてあげますから……そして、そんな俺が不要になつたら貴女はいつでも俺を切り捨ててください。貴女はいつでも自由に選択出来るんです」

愛しています、心から……こつて今度は深く濃く唇を奪われた。ゆつぐりと瞼を落としながら私は思つ。

ああ、そうだ。

彼はいつもこつやつて、私を味わうよつと抱いてくれていた。丁寧にじつぐりと、性急過ぎることなくお人形のように全く面白くもない私を時間を掛けて愛してくれていた。

私はそれに気がつかないフリをするのがいつも大変で……そろそろ  
かりに意識が回っていた。

「…………ん…………つふ、う…………ねえ、神子姫様」

「ん、う、はい」

「姫様は、毎日何百といつ自己紹介を聞く身でしうから、俺の名  
前なんて覚えていないと思うのですが……」

楽しげにそう告げる彼に私はとても申し訳ない気持ちになつたが、  
彼は気にする素振りなく、そして、何の予告もなく私を抱き上げる  
と、そのまま寝台へと運びふわりと降ろした。

少しひんやりとしたシーツが身体の熱を奪つていって、気持ち良  
い。思わず、瞳を細めた私に彼も優しい笑みを零す。

そして、自身もぎしりっと寝台に上がるとそつと私の前髪を梳い  
て額に可愛らしき口付けを落とし、にこりと口角を引き上げた。

「あのですね、俺の、俺の名前はレイアスというんです  
「れい、あす……レイアス……とも、綺麗な名前ね」

そう告げられて、自然と名を繰り返し微笑むと、レイアスはほん  
の少しだけ恥ずかしそうな、でもとても嬉しそうな顔をして「はい」  
と返事をしてくれた。

「あのね、レイアス……私の、私の名前は……」

\* \* \*

そして幸せに満たされて目を覚ますと、私は案の定病院のベッドの上で眠っていた。人ってなかなか死ないものだ。

当然のように傍には誰も居なくて、やつぱり一人ぼっち。お日様が高い位置にあるから、夫は会社で、子どもは学校だらう。

それでも私は以前ほど寂しいとは思わなかつた。  
物理的に一人だけ、また眠りにつけばレイアスに会えるだらうし、彼は私を愛してくれる。

思えば私のあれが想像上の世界であるなら、きっと彼は本当に愛し続けてくれるだろう。とても、馬鹿げているけれど、現実の世界で誰にも目を向けられることがなくなつてしまつた私には、それすら大きな救いになる。独りを思つて泣かなくて済む。

それにしても、私は現実の夫に拘りすぎていたのかも知れない。なんとか距離を詰めないとそのまま離れてしまいそうで、頑張つて頑張つて歩み寄ることだけを考えていた。そして、自ら家庭という籠の中に収まつて中から外を羨むだけ。  
でも、少し、離れてみるのも良いかも知れない。

私はもう少し籠の外に出よう。レイアスが私を神殿から連れ出してくれたのと同じように、現実の私も家から出て外を見てみたい。そう思えるくらいになつた。

そして、彼のためだけでなく私自身のために魅力的で居られるようになよ。

\* \* \*

暫らくして

「 なあ、布団上げ下げするの面倒じゃ ないか?」  
「 .....え?」

そんな話が舞い込んできたことだけが私にとって不思議な誤算だ  
つた。

## 第一話

声が届かない。

想いが伝わらない。

気持ちが分からない。

その全てが私の手の中をすり抜けていく。

それなのに私は全てに依存せざるにはいられない。何一つ捨てられない、変えられない私はただ無駄に時間を浪費していく。  
それ自体、もう惰性でしかない……

別に待っていたわけではないのだけれど、私はぼんやりとベッドの中で寝返りを打った。

遅く帰った主人はシャワーを済ませて、私が眠っていないのを分かっていながら特に声を掛けることもなく隣りに横になる。

「ねえ？」

「疲れてるから」

声を掛けただけなのに、背を向けられたままそう咳かれ私は黙つて目を閉じた。胸がきゅっと痛んで意味も分からぬ涙がつうと尻を伝つて枕に落ちた。

そんなに煩わしいなら、別々の方がまだ良かつた……良かつた？良かつたのかどうか、分からぬ。でも、一人で独りよりも、ベッドに他の気配があるのに独りのほうがやはりより孤独だ。

ダブルベッドの真ん中に誰が衝立を置いたのだろう。

触ることのない背中同士がとても切ない。

でも、そう、感じるのは、きっと私だけ。

\*\*\*

寂しい気持ちを抱えた夜は必ずといって良いほどこの世界の夢を見る。

場所は聖域、そして、神殿。私は『癒しの神子』だ。

私は夢の中では心のどこかで、馬鹿馬鹿しいと思いつつも、現実に戻れば恋しくて仕方ない人がこの世界には居る。

今夜 と、いつも気が付いた先は明るかつたけれど は、  
彼はここを訪れてくれるだろうか？ そんなことを考えつつ、私は礼拝堂の舞台に立ち参拝する人たちに『癒されますように』『心安らかに過ごせますように』『病みが去りますように』と声を掛けそつと上げられた頭に触れていく。

田を覚ませば誰にも相手にされない女を崇めているなんて、彼らに申し訳ない気がするけれど、彼らは至つて真剣に頭を下げ手を合わせ礼を尽くす。

私はそれに真摯に応えなくてはいけない。

礼拝の時間が終われば、私は大抵神殿内をぼんやりと散歩する。ここ全ては白で、ところどころに植えられている緑が眩しい。そこそここの数の信者も共に生活しているように思うけれど、みんな静かに生活し、最低限の会話しか交わさないから、とても静かだ。静寂が耳に痛いと思うことはないでいいだらう。

都合が良ければ、大抵このタイミングで彼は来てくれるけれど、今日は来ないみたいだ。私は少し気落ちして、溜息を吐く。

夢なのにはじめて細部まで私の自由にならないのだ。

「……神子姫」

静かに掛かつた声に私は足を止めた。

彼ではない他の人物だ。そのくらいは声で分かる。けれどそれ以上は分からぬ。特に彼以外、個人に興味を持つことはないから。いや、持つべきではないとそう思つてゐるから。

「はい」

涼やかな声で、冷静に返事をして私は振り返る。

出来るだけ表情は抑えて、何も感じない人形のようであればきっと大丈夫。

「日が落ちれば冷えますよ。南から来たワタシからすれば、ここはとても寒い気がします」

直射日光を避けるために着ていたのだろう、頭からすっぽりと被つていたローブを下ろすと、黒髪に褐色肌で彫りの深い造形の男性だ。兎のように赤い目は、黒に近く濁つて、彼が酷く疲弊している様子を表している気がする。

「大丈夫ですか？」

「つりと歩みを進めれば、彼もまた足を進め手の届くところまできたら「あまり、平氣ではありません」と口にして、ふわりと私を抱きこんでしまつた。

びくりと過剰反応しそうになる身体を何とか堪えて、ゆっくりと呼吸をする。

彼からはお日様の香りがする。

「部屋へ行きましょ、う」

静かに私が促して、そつと彼の身体に触れると彼の方がびくりと身体を強張らせた。その反応を彼は詫びたけど、私は別に気にとめることなく、そつと彼の脇腹を撫でる。

……なんとなく、だけどここに傷がある気がする。

「いー、ですか？」

「一応、応急処置は、して、きたのですが……」

応急処置、か。

私の大切な人の人なら、そんなものもしないで、血だらけのままここに来る。そう思うとおかしくて笑いそうになつたけれど、何とか頑張つてこらえてみた。

\* \* \*

私の部屋はとてもシンプルで、だだつ広い空間に扉より少し右側に大きな天蓋つきのベッドがあり、左側の壁には暖炉、その前にはプリンセス仕様みたいな、応接セット。奥の大きな窓辺にはティーテーブルがあるだけだ。

そしてその全てが白い。

本当に色彩に欠けている場所だからこそ、生身で置かれている自分たちが異物に感じる。

彼はベッドの柱に寄り添うように置かれているハンガーに、ロー

ブを掛け、幾重にも重ねられていた服を脱ぎ去つた。

最後の一枚は、ベッドの端っこに腰掛けて脱いでしまつ。その下にはまだ真新しい包帯がぐるぐると巻きつけられていた。

「私が取りましょう……」

あまり動いて傷に触ると氣の毒だと思い、やつ声を掛けたのだけど彼は曖昧な笑みを浮かべて首を振つた。

「姫にお手間を掛けけるわけには参りません」

「傷、痛むのでしょう?」

思わず、同情的な表情になつてしまつた。

多分、直ぐに引っ込められたと思うから、気付かれては居ないと思つ。少しだけ逡巡したあと彼は「お願ひします」と小さな声で告げた。

## 第一話

彼に深く腰掛けてもらひて、私は彼の間に膝をつき、静かに包帯に手を掛ける。するとすると解いている間、間が持たないとでも思ったのか、彼は話を続けた。

「今日は召喚術に失敗してしまって、少し持つていかれました……」

「召喚、ですか？」

悪魔とか魔物とかだらうか？ 淫くファンタジーな感じがする。ぽつりと重ねた私に、彼は「はい」と頷いた。

「ワタシは国に属する魔術師なのですが……」

最後のひと巻きを取り終えると、押さええてあつた油紙もそつと剥がす。化膿してしまっている傷口に触ったのか、言葉を切つて息を詰めた彼に短く謝った。

彼の脇腹は丁度私の両手を広げて押さえられるくらいの範囲で、変色していた。爛れた皮膚は黒くなり……壊死し始めている気がする。

「辛ければ、私に抱つておいでください」

そう、前置いてから私は傷口に手を触れて最初は軽く力を込める。ねつとりとした、皮膚が私の手のひらに纏わりつき、今この手を離したら彼の一部も付いてきそうだ。現実でこんなことがあれば、きっと卒倒しているだろう。

徐々に加える力を強くすれば、最初は躊躇していたかに思われた彼の腕は強く私を抱き締めて、痛いくらいに力が込められる。

私の肩口に額を押し付け、熱く苦しげな息を吐く。

軽いものだつたら、痛みを感じることもなく直ぐに癒えてしまつのに……私の力不足だつたらと思つと申し訳ない気持ちになつてしまつた。

もつと、早く確実に……治つたときの状態を強くイメージして手のひらの力を強めると、同じだけかそれ以上の力が込められる。

「…………」

あまりの苦しさに息を詰めてしまつと、その機微に気が付いたのか、ふと腕の力が弱まつた。優しい人なのだなと思う。

そして、彼の呼吸が穏やかになると同時に手のひらに感じていた違和感がなくなる。ゆっくりと手を解けば、外傷は嘘のように治つっていた。

「少しは楽になりましたか？」

抱き締められたまま顔を上げれば、彼は腕を解くこともしないで、こくんと頷いた。

「他に、何を奪われたのですか？」

静かにそう続けて問質せば、彼は暫らく沈黙してから……

「大切な人の、命を、持つていかれました」

ああ、彼の瞳の濁りはそのせいだろつと憶測出来た。

苦しげな彼は私の肩から頭を起こすと、その淀んだ瞳で私を見詰めて、つと距離を詰める。鼻先の触れ合う距離で、静かに瞼が落

とされ私も同じように瞳を閉じた。

柔らかく静かに重ねられる口付け。気遣わしげに、甘く食んでいた唇から割り入ってきた舌先を抵抗なく受け入れると回されていた腕に再び力が籠り、強く深く貪られた。

「……っん、」

吐息の合間に彼は誰かを呼んでいる。私の名など知るはずもないから、きっと大切な誰かだらう。こんなことで本当に癒されるのだろうか？ 疑問に感じつつも私はやはり抵抗しない。

くんつと腕を引かれて、寝台に押し倒される。

不思議な色をした髪が、真っ白なシーツの上にふわりと広がる。するすると着ている物を解かれていってもどこか他人事のように見えることが出来るのは、この世界が夢、だからなのか、もしくは私が神子だなんて呼ばれてしまつ存在なのだからなのかな分からぬ。ただ、無感情でいられた。いられるように努めた。

上気する肌の色まではどうしようもないけれど、極力声も押し留め、表情も変えぬように最中はずつと別のことを考えるようにしている。そう、しているのに、本当にさつきまで怪我人だったのかと思つくらい彼は回数を重ねることに、強く私を求める。

「ん、んん……っん、」

余りに長く抱かれていると、相手が良く分からなくなつてくる。思わず盛らしてしまつた声に顔を逸らし、枕に頬を押し付けて、きゅっと瞳を閉じる。

違う、この人は違う。

私を愛してくれているわけではなくて、私に心の拠り所を今求めているだけだ。私にヘンテコな力がなければ、私にこんなことをしようと思つてくれる人じやない。

頭では分かつてゐる。

理解してゐるつもりなのに、どんどんと押し寄せられる波に理性が悲鳴を上げる。

「……姫、神子姫、様」

「つ、ん……は、い」

いつの間に彼は私を抱いている気になつたのだろう? 掠れる音を唇から漏らすと、押し殺していた官能が一気に身体中に巡つてくる。

嫌だ、駄目。  
やめてつ。

そう思つてゐるのに、もう止められなかつた。

殆ど反射的に腕を伸ばし、彼の身体を強く握き抱いて彼の肩口で声を押し殺して身体を震わせた。生理的な涙が頬を伝い、荒い息でもつと空気が欲しいと喘ぐ。

どくどくと下腹部が脈打つてゐる。

前はこんなことなかつたのに、人形であるだけに徹することが出来ていたのに、時折、彼と被つてしまつて気持ちが抑えられなくなつた。

最低だと自己嫌悪。

最初からじつこの立場である」と理解してもらっているから、成り立つていると思つてゐるけど、とても脆いだらうなとも感じている。

「…………姫、また貴女の元を訪れたい…………」

「あまり、怪我をされるのは良くないと思います」

ほんやりと天蓋を見詰めて、無感情にそう答える。

刹那覗かせてしまった情念を夢幻の中の出来事であつたように蓋をしたくて、余計に強く感情に蓋をして告げる。それでも彼は「また来ます」と重ねて私を抱き締めたまま隣りで眠ってしまった。

ああ、もう…………考えるのが面倒だ……。

私もぐつたりとした気分で瞼を落とした。

\* \* \*

「ん、んーっ」

ぱちりと田が覚めた。

私は手を伸ばして鳴る前の田覚ましを、ぱちりと止める。

あんな長い夢を見ていたら、起きても疲労感が残つていそうなものだけ、私はどちらかといえば、清々しい気分だ。

時計を見ればまだ六時過ぎ。やわらか夫の田覚ましが鳴るにひだ  
るひ。

ベッドに入ったときのまま背を向けて眠っている夫に、にじり寄つてその顔を覗く。実質十年以上一緒に居るから、最近彼も年を取つたなと思う。いつもとなんとななく愛しくなつて、田尻にキスを落とせば

「んんーっ」

と眉間に深い皺が入つた。

邪魔をするなやめる、といつ無言の訴えだらひ。

私は、ぎゅっと痛んだ胸を押さえてベッドから抜け出す。おはようのキスもおやすみのキスもしなくなつたのはいつからだらひ。彼から、キスがもらえなくなつたのはいつからだつただらひ。

現実に戻るとこなことばかり、正直憂鬱になる。

はあとさつ今までの清々しい気分に影が落ちて溜息一つ。寝室の扉を閉めたら、背後で田覚ましが鳴る音がした。

彼が起き出してくるまであの田覚ましがどれだけ頑張るんだろう。

「おはよう

私は背こした扉に少しだけ体重を預け返してみるとのない挨拶をして、階下へと降りた。

……

「今日はね、初出勤なの。そうはいつも、どんなことすれば良いか簡単に説明してもらひだけなんだけど」

時間ギリギリに起きて慌しく用意をしている彼の後ろを追い掛け、とりあえず告げておく。聞いているかどうか分からぬけど……まあ、いわなにより良いだね。彼にとつてはどうちでも、私のことなんて関係ないだね。

「それでね

続ける合間に、主人と同じよつにばたばた準備を整えた子どもが「いってきまーす」と玄関から叫ぶ。今朝もみんな朝食抜き。このあと私が一人で頂く。

いってらっしゃいと、玄関に向ひざつ出て行く間に合つた。

「住宅街抜けた先にある、店だろ?」

「え、あ、ああ、うん! そう。アンティークショップだよ

「ふーん、まあ、暇そうな店だし、邪魔にならなによくな

いつて私の隣りを通り過ぎると靴を履いて子供の後を追つように出掛けといった。私は小さな声で、いつてらっしゃいと重ねた。返事はもちろんなない。

さゆうと胸が痛むけれど、気にしない。家の中にずっと居たらこの痛みがずっと纏わり付く。

……早く、出掛けよう。

お店までは歩いても「一十分くらい」のところだ。  
約束していた時間よりも一時間以上早く出でしまった私はのんびりとご近所さんの家が立ち並ぶ通りを歩き、途中の児童公園で足を止めた。

「ここにはあの子が小さこときによく立ち寄った。

初めてばかりで、毎日、何か一つでも間違つたら死んでしまうんじゃないかと恐くて必死だった。育児書に、毎日外に連れ出してあげたほうが良い的なものを見かけたら、雨でも出かけた。良く考えなくてもそれが天気の良い日という条件付なのくらい分かりそうなものなのに、あのときは暫らく気が付かなかつた。

子どもに必死になり過ぎたのかな？　ふと浮かんだ疑問に首を傾げる。

色んな意味で〇〇を出していたつもりだったけど、彼は殆ど家に居なかつたし……まあ、もう、そんな何年も前の話、今更だ。

「和泉さん？」

物思いに耽つていると、やつ声を掛けられて顔を上げる。

「あ、えつと」

「貴女の田舎している店の店長だと思いましたよ？」

刹那言葉を失った私に、彼はくすくすと人好きのする笑顔を見せて、そう告げる。私は直ぐに名前を出せなかつた恥ずかしさに、ぱあつと頬が熱を持つ。

「え、でも、『血宅とお店』で」

「ええ、直ぐですか？、僕は朝この辺を散歩しているんですよ？」

近所でしょ？

穏やかに重ねられて、なるほどと納得する。

「それより、とても時間が早いような気がしますが、何か用事でもあつて、の途中ですか？」

「え、あ、いえつ。その、遅れではいけないので、早めに家を出ました」

早めにといつても限度があるだらつ。

約束していたのは十時過ぎくらいにだつたのに、まだ九時になつたくらいだ。私は氣負い過ぎた恥ずかしに語尾が殆ど消えてしまつていた。

「では、このまま店に向かいましょうか？」

「え、あ、いえ、私は適当に時間を潰して、その、えつと、お約束の時間に向かいますから、気になさりずに……」

「によい」と呟元を見て告げる私に、店長さんは「やつして？」と心底不思議そうに口にした。

「だから、その。えつと、約束の時間までに店長さんも、しておか

ないといけないことがあると思うのです。私の勝手でそれを邪魔するのよ」

「って顔を上げれば、思い切り店長さんと田が合つた。慌てて逸らせば、くつくつと楽しげに笑われてしまつ。

嫌だな、恥ずかしい。

なんでこんなところで会ひやつたんだろ？

「それなら尚、一緒に行きましょ？」

「え？」

「僕はこれから、開店準備をするとこりだつたんですよ。人手が増えるのは助かります」

そういうひ、店長さんは迷子にならなによつに付いてきてくださいね？」と先に歩き始めてしまつた。私は慌ててその後姿を追いかける。

初日早々、迷惑を掛けで申し訳なかつたなと思つると同時に、あまり面識がなかつたから不安だつたけれど、優しそうな人で良かつたなと胸を撫で下ろす。

そして、そういう人は怒らせるときつと恐いから、気をつけようと改めて氣を引き締めた。

私が住んでいるところもそうなのだけれど、最近出来た住宅地などで新しい家が多くその種類はモノトーンでモダンなタイプとアンティークな感じのするものが主流となっている。

このお店はヨーロッパ風のアンティークな雰囲気が漂っている。落ち着いた感じのする建物だ。

私は店長さんが鍵を開けてくれるのを後ろで待ちながら、よく晴れた空に似合う建物全体を眺めていた。

からんからんっと可愛らしい音のウェルカムベルで、建物に見惚れてしまっていたのに気が付いて慌てて前を向いた。

扉を開け放つて私が入るのを待つてくれている。  
慌てて入れば、ゆっくりと私の後ろで扉はまた可愛らしい音を立てて閉まった。

暗くて視界が確保出来ない感じの中でも店長さんは迷いなく店内を進み、ぽちりと明かりを灯してくれた。柔らかいオレンジ色の照明が店の中を照らす。

「僕はこちから、貴女は反対から、この布を取つていってもらえますか?」

いわれて私は頷くと、店の中へと進んだ。

ショーケースや展示してあるものは殆ど白い布がふんわりと掛けられていた。私は足元に持つていたバッグを置いて、一枚一枚丁寧に外していく。

どの布の下からも宝物が姿を現すようで、とてもぞれぞれした。そんなに大型な家具は扱っていないようだけじ小さなテーブルとか、本棚、アクセサリーケース。ランプに、傘建て、可愛らしく織細なものが多い。

それに引き換え私はどちらかといえば、大雑把だ。壊してしまわないように気をつけないと。

沢山の布を抱えて最後の一枚。

取り除いた下からはアンティークジュエリーの入ったケースが出てきた。

細かい細工が美しい。

綺麗。

それに……と思つてつい、夢の中で貰つたものに似たものを田で探してしまつていた。

「ジュエリーがお好きですか？」

「え、あ、全然詳しくないので宝石たちに申し訳ないのですけど、綺麗だなと思います」

ちらりと視線をショーケースの中に走らせ、指先でその端っこをそっと撫でる。

うん。

綺麗だと思つ。

ここでも丁寧に扱つてもらつているのが分かるし、良い買い物手が見付かると良いなと素直に思える。

微かに口元が緩んでしまうと、ふと店長の視線に気が付いて、顔を上げた。田が呟うと、にこりと微笑まれてなんとなく視線を逸らしてしまつ。

外に出るのは久しぶりだから、視線をずっと合わせているのは抵抗があるというか、恥ずかしい。

気分、悪くさせちゃつたかな？

彦赤くなくてないと良いけれど

そう思つて、自分の頬にそつと触れる。

「それで十分だと思いますよ？ 第一印象なんて人も宝石も一緒にす。それ以上は時間をかけて付き合っていくうちに知れば良いだけですし、好きだなーと好感を持ったなら相性が良いのかもしませんね？」

「にこにこ」ということで、店長さんは私の腕の中から集めてきた布を抜き取った。気分悪くしていいようで良かった。ほつと胸を撫で下ろして、奥のカウンターへと進んでいく店長さんの後ろを付いて歩いた。

ぼすりとカウンターの上に布を置いて、置みながら、話し掛けてくれる。

「そんなに繁盛している店ではありますから、少しずつ覚えていく時間も取れると思いますよ。お客さんの居ない時間はそういうことに宛てれば良こと思います」

「でも、そういうのは家でやったほうが……」

私も同じように布を畳もうと、よいしょと抜き取つて、半分に折りつと思つたら……私の身長以上あつた……。床につけては大変！

とあわあわ巻き上げると、もつ何枚か畳み終わった店長さんが、楽しそうに笑いながら布の端っこを持ってくれ、「どうぞ」と半分にするのを手伝ってくれる。

布一枚とともに置めないなんて。

「慣れですよ。慣れ。直ぐに貴女も慣れますよ。それに単純作業は一人より一人でやったほうが楽しいですしね」

すぐにじょぼんとしてしまう私のフォローをせつとしてくれる。良い人だ。何か益々申し訳ない。

「それから、わたくしの話ですけどね？ 商品のこと勉強するのは立派な仕事のうちです。好きなものを知るのは楽しいでしょう？ それに、家では忙しいでしょう。ご家族の面倒も見ないといけないでしょうし。なるべく仕事を持ち込むよつないことではないほうが良いですよ」

「……あ、ありがとうございます」

こんな私にまで気を使ってくれる。

やっぱり良い人だ。

良かった……。

そのあと、仕事の流れを聞いて、結局折角だからと今日一日居させてもらつた。基本的に、在宅でしている仕事が忙しくなつたから代わりに店番ということなので、分からることはその都度裏の自宅に居る店長さんに聞くことになつた。

「家でのことも店も僕の趣味みたいなものだから、以前は妻に手伝つて貰つてたんだけど、都合が付かなくなつてしまつて」

少し恥ずかしそうにそりそりといった店長さんに釣られて微笑む。

「お忙しいなら仕方ないですよ。それに私はこんな素敵なお店で働けて嬉しいで……す……つて、すみません。そんな風にいつものじやないですよね。え、ええと、『めんなさい』

カウンターの傍に置かれている応接用のティー・テーブルで、纖細で美しいティー・カップに綺麗な紅い色をしたお茶を駆走になつてつい奪いてしまっていた。

仕事なのにつ。

つい口を滑らせた私に店長さんは、にこりと微笑んで軽く俯くと顔に宛がっている眼鏡を中指で、くつと持ち上げた。左手の人差し指と薬指に細かい彫りのある指輪が納まっている。店長さんの長い指には厚みのあるその指輪も良く似合つ。

こんな旦那さんなら、奥さんも心穏やかに過ごせることだらう……と、感じるけど、実際家庭に入ったときの本当なんて、他人には分からぬ。だから、私には関係ない。ふとそんなあせつてなことを考える。

穏やかな空氣の流れる店内はそこだけ外界から遮断されていくようだった。

……お密さんが私の居た時間帯になかったことせ、きっと偶然だよね？

「……て、感じで週三回だし、私でもなんとかなりそうだよ」

夕食のときに報告をすれば子どもからは「頑張って」とホールを貰つたけど、彼は「ふーん」で終了。

どこまでも私に無関心な人だ。

でも、私はこの家庭を壊す気は全くない。

こんな居場所でも、私が選んで私が望んだ場所だ。  
どのくらい前からその場所を居心地悪いと。独りぼっちだと思うようになったのかは分からぬ。実は最初から独りだったのかもしれない。

でも、だからといってそれを終わりにする体力も精神力もない気がする。

出来れば関係改善に努めたいと思っている。それも私独りの一方通行だから全く上手くいかない毎日。

がつがつと無言で箸を進める彼を眺めつつ、私もぱくりとご飯を頬張る。

自分で作つて自分で食べる。

当たり前なんだけど、誰も「美味しい」といつてくれない食事は作る気力が減退する。唯一子どもは、聞けば美味しいといつてくれるけれど、この子は 外食は別としても基本的に 私の作るものしか食べたことがない。あまり宛にはならない。

私つて実は味覚音痴で、洒落にならないくらい不味いものしか作つていないのだろうか？

……

お風呂からあがつて珈琲を飲みながら、ぼんやり。主人はもうとっくに寝室に入っている時間。子どもがついたままで起きていたから、寝るのを待つていたらこんな時間になってしまった。

ダイニングテーブルの上で開いていたノートパソコンを閉じて、一階へと上がる。

ほんの少しだけ空かしている子ビも部屋の中を覗けば、薄明かりの下ですやすやと寝息を立てているのが確認出来た。

そしてそのまま寝室へと入る。

つけっ放しのテレビが迎えてくれた。寝るなら済したら寝いの」と何度もいったことか。つけてないと眠れないのだそうだ。

ふうと私は溜息を落として、ベッドの端っこからそっとに入る。

起きてるのかなあ？ 寝てるのかなあ？ と顔を覗き込んだら、迷惑そうに顔を持ち上げた。

「じめん。起こした？ わやすみ

いつてキスを落とす。

もちろん返してもいいことはない。  
彼の眉間に皺が刻まれるだけだ。

きゅっと苦しくなる胸の痛みを堪えて、黙つてしまおうと思った

「え？」

物凄く珍しく、私のパジャマに手が掛かつた。

ふつぶつと胸元を肌蹴られ、何の予告もなく胸を食まれる。キスがあるわけでもなく、ただ、パジャマを剥ぎ取られ……愛撫なんて呼べるようなものじやなくて……。

だから、ちゃんとキスもして欲しくて、無理矢理距離を置いて、唇を重ねたけれど、一方通行。

軽く噛み合わさった歯列は開く」とはなくて、益々自分を惨めにする。

それでも少しば近づけるなら。

何かに戻ることが出来るならと、涙を堪えれば乱暴に秘部を撫でられ息を詰める。現実で他人にそんなところを触られるのは、年単位で昔のことになるから痛みを伴って息を殺せば、感じていると思つたのか徐に足を開かれた。

まだ何の準備も出来てないのに。

「ああっー、い……っ……」

上げた悲鳴は善がつていても聞こえたのだろうか、痛みは嵐のように襲ってきて、痛いという悲鳴を押し殺すのに必死であつといつ間に去つていった。

さつと済ませて部屋を出て行つた彼を見送つて、改めてパジャマに袖を通す。

立ち上がりばずきりと身体が痛むし、急に押し広げられてしまつた部分も痛い。ひりひりと悲鳴を上げていて。

やつと求めてもらえたかと思ったのに、私はなんなんだろ……。

少し出血もしていたし、トイレに……と階下に降りると、一度洗面所にいた彼を見かけた。

物凄く、物凄く、物凄く、私が降りてきたことにも気が付かないくらい、丁寧に手を洗っていた。

……私って、そんなに汚いのかな……。

じわりと浮かんでくる涙を拭つて「大丈夫」と心の中だけで自分に告げた。何が……なんて自分でも良く分からぬ。

寝室に戻れば面したベランダで彼は紫煙をあげていた。白い煙がふわりと流れて消えていく。

私はよろよろとベッドに戻つて身体を小さく丸めた。

ややして戻つて来た彼に「ねえ」と声を掛ければ「早く寝ろよ」と返つてきただけだ。明日も仕事だし睡眠は大事だよね。

「そう、だね。おやすみ」

返事はなかつた。  
いつも、通りだ……

セックステスが解消すれば、少しばかり前に歩み寄れるかもしれないと思ったのに、壁はより分厚く、高くなつたような気がした。家族としてはなんとかやつていると思うのに、いつから私たち夫婦として成り立たなくなつたんだろう。

心も身体もただ静かに泣いていた。  
誰も、そのことに気がつかない。

## 第六話

\*\*\*

「…………と、俺は、こつも泣いていたひ出てくわすんですね？」

「私、いつ眠ったんだろう。

そう掛けた声に顔を上げれば、私はいつも部屋に面して、寝台に突っ伏して泣いていた。

「何がありましたか？」

「こじりと歩み寄つてくれる彼は、北の国の騎士でレイアスといつて、私がこの世界で唯一名前を知り愛している人だ。『こじー』と乱暴に顔を拭えば、その手首を掴まえられる。

「傷がつきますよ？」

なんて真剣に心配してくれるのはこの人くらいだろう。胸の中が暖かくなつた私は自然と微笑んでいたと思う。心配そうな顔をしていた彼の表情も緩んだから。

「寂しくて泣いていた……というわけではないですよね？」  
いつも人で溢れているでしょう？

冗談交じりにそんなことをいながら立ち上がり、私のこともそつと掬い上げてくれる。ひとつと自分の足で床を踏みしめると、夢の

はずのことでも現実味がある。物の質感もしつかりしているし、

「レイアスが来なければ私はいつでも独りですよ」

いつて傍に寄れば抱き締めてもうえる。

それは、普通に暖かいし、その胸に頬を寄せれば鼓動も聞こえる。夢なのか現実なのかもうよく分からぬ。私にとつてはそんな細かなことどうでも良い、彼は私に甘くて優しいから漫かっていられる。

「では今は独りではありますね。今夜は他の誰でもなく俺が貴女の傍にいることが出来る」

幸せです。と続けて額に口付けを落とし、瞼と頬、鼻先にも与えてくれたところで刹那視線を絡ませて瞼を閉じた。柔らかく食む口付けは、私が無理をしなくともじわりと深くなり濃くなる。

そして、心地良い官能を与える身体が熱を孕んで熱くなる。どきどきと胸が高鳴って、もつと胸を掴んでいた手に力を込めて背伸びする。いっぱいに伸びて不安定になれば、しっかりと支えてもらい甘えを許してくれるよつに愛してくれる。

ぐいぐいと押してしまって、彼は私の腰を抱いたまま、ふう……と後ろに倒れた。ひあっ！ と声にならない悲鳴を上げれば、寝台に柔らかく受け止められ、私を抱き締める腕に力が籠る。

彼の肩が揺れている。

思い切り笑われてしまつた。

「いえ、驚いた顔があまりにも可愛らしいと思つて。ふふ……」

ふんわりと私の身体を隣りへと下ろして着ていたものを脱ぎながら

ら、そうこうした彼の隣りにちゅうんっと座りなおしてそれを眺める。

「それで、本当に平氣なんですか？ 僕の神子姫様」

重たそうな軍靴を脱いで膝を抱えると、その上にじめかみ辺りを押し付けて私の顔を覗き込んでくる。

「平氣です。もう何も悲しくないです」

「本当に？」

なるべくはつきりと告げたつもりだったけれど、彼は心配そうに瞳を細めて、片腕を伸ばしたその先で、そつと私の頬を撫でる。すぐつたくて心地良くて、きゅっと瞼を落とせばくすくすと笑いが重ねられた。

「貴女は時折少女のような顔をしますね？」

「そ、それは」

「褒めていますよ。褒めています」

頬を撫でていた手を背中に回すと、そのままずっと距離を詰めて、ふわりと丁寧に寝台に寝かされる。彼もその隣りに横になると、気分良さ気に時折口付けを降らせながら話を続けてくれる。

「「」機嫌ですね？」

「ええ、貴女にとつても朗報であれば良いのですが」

ゆるゆると彼の大きな手が私に触ってくれるのは心地良い。幼い子どもがハグを求めるのと同じように私も求める。そして彼は応えてくれる。応えてくれるのは彼だけだ。

「今日は明日には戻らないといけないんですけど、今度まとめて休みを取ります。そうしたら、暫らく一緒に過ごしましょう。参拝の儀だつて毎日ではないんですから、それに当たらない日はまた出かけたりするのも良いと思います」

「本当に？」

私が大抵一回で見ることの出来る夢の長さは一日と半分くらいだ。その次は続きたることもあるし、数日経つこともある。私の現実の時間軸と、こちらの時間軸は同じじゃない。

だから、彼がずっといてくれても私は傍にいられるか分からない。でも、にこやかに頷いてくれる彼を見ていると、ふわふわと歡喜に胸が沸く。他の誰でもなく彼がここに遊びってくれる。

「嬉しい」

素直に言葉が溢れて、抱きついてキスをする。

「喜んでもらえて良かつた。迷惑に思われたらどうしようかと思いました」

「まさかっ！」

私は本当に驚いたのに、彼は少しだけ不安な色を瞳に移して曖昧な笑みを零した。

「俺は身分違いなお姫様に夢中で、恐いんですよ……好きなときには切って良いといったけれど、道中貴女の顔を見るまで、いつも怯えています。拒絶されるのではないかと……そして、いつも、いつもやつて触れて、まだ大丈夫だと確認するんです」

するりと、私の肩を肌蹴てキスを落とす。痕が付かないくらいの

加減で甘く何度も吸い付いて好きを重ねてくれる。

私の役割的に傷をつけることはタブーなのだろう。私が直接聞いたことはないし、そうして欲しいといったことはないけど、基本的に誰も私を傷つけたりはしない。

緩やかに重ねられる愛撫は心地良く身体に響いて、胸の奥から全身を暖かくする。

## 第七話

「ん……う……」

口の端から熱の籠つた吐息を漏らせば、それを吸い取つてしまつて、口付けられる。喉の奥の奥まで届くよつに深く搔き雑ぜられ、息苦しく皿尻に涙が浮かぶ。

「つは、あ……つ、神子、姫、……」

掠れる声で呼ばれ、音のない返事を返す。

キスの合間に、柔らかく私の腰を撫でていた手のひらは、柔らかく胸を揉み解し指の平が敏感な突起を刺激する。じんつと下腹部が熱を持つのが分かることが余計に恥ずかしく、顔を逸らし堪えるのに、彼の鼻先がつと鼻に触れちらりと視線を上げれば、ほんのりと皿尻を上気させた彼に「逃げないで」と微笑まれた。

「俺だけに、見せる表情もつと、見せて……」

吐息混じりに重ねられる声にぐぐぐぐする。肌の触れ合つた部分が痺れて、甘く疼く。愛されていると感じることが出来れば、どんな細かな所作も心地良べ瀧けるような官能に変わる。

どんなに男性ことつて面倒でも、ゆつくつと愛されたい。そして、満たされたい。

それが夢でしか叶わない私はとてつもなく惨めだ。

分かつていい、それでも、もう、求めずにはいられない。

観念して彼の首に腕を絡めて引き寄せる。そして首筋に唇を寄せ

て、軽く食み味見をするように、つうつと舐めるとそれにあわせて、彼の吐息が熱く私の髪に掛かった。感じてくれていることが嬉しくて、つい強く吸い付きたくなると「んっ」と痛みを堪えるような音が漏れた。

はつと我に返り視線を走らせれば、くつきつと紅い花が落ちていた。

「つん、ン、めん……」

「いいえ、もっと俺に触れて……貴女から、触ってくれるのは俺だけ、ですよ、ね……」

当たり前だというより、顔をあげ私からキスをすれば嬉しげに私の身体にまとわりついてくる。その窮屈さがなんとも気持ち良くて、夢の中のはずなのに私は幸せだと思ってしまう。

そして、彼の手がすると私の身体を這い降りて、腰の紐を解き完全に私の肌を晒すと舐めるように太ももを撫でその中心に触れる。

「つひあ……！」

「…………サシャ」

「つ、い、いえ……な、なんでもありますん」

その瞬間電気のような痛みが身体の中心を突き抜け、びくつと身体が強張り、肩を跳ねさせてしまった。

レイアスが不安そうに私の瞳を覗き込む。当然のように即座に否定したけど、そんなことを「そうですか」と聞いてくれるほど彼は冷たくない。

「辛そうですね……誰かに酷くされたんですか？」

彼は良くその類のことを聞いてくる。

もちろん、答えは殆どノーだけだ。今日は……おかしい。心当たりといえば現実でのことだけだ。確かに眠る直前のことだったし、とても痛くて、辛かつた。

けれど、その痛みを夢にまで引きずつてくれるとは思わなかつた。

「えつ、ちょ、レイアスっ」

何の迷いもなく私の足元へと身体をずらしていく彼に気が付いて、慌てて声を上げたけど、無駄だ。あつさり掴つて、膝を割られるとその奥を見られる。余りに恥ずかしくて、傍にあつた枕を一つ抱え込んで顔を隠すが、彼の吐息と指先が敏感な部分に触れて、ひくりと反応してしまう。

彼は何もいわずにその中央に一度だけ唇を押し当てる、軽く吸うとペロリと舌を這わせてから腰を上げた。きゅっとお腹の奥が締め付けられるように収縮した。短い吐息を漏らした。

「レ、レイアス？」

ふわりと私の腰にシーツを掛けてから身体を起こすと、不安げに名を呼んだ私を振り返り、そつと髪を梳き、尻の涙を拭ってくれる。

「傷に良く効く薬を貰つてきますから、そのままでいてください」「えつ！ ちょ、いえ、だ、大丈夫ですっ」「大丈夫じゃない。大丈夫な、わけないでしょ。ビックの愚者か知りませんが……」の場にいれば叩き切つてやるもの……

強くそう重ねて、顔を逸らし苦々しげ締め括ると彼は素早く部屋を出て行ってしまった。

その後姿を不安な気持ちで見送りてしまった。

夢、なのだから全てが私の自由になれば良いのことも不自由だ。この世界でも私の自由になるものといえば気持けへういなもので……私はそれを彼に捧げていた。

ややして彼は言葉通り軟膏薬を持って戻ってきた。

もちろん、その後も自分でさせでもらえるわけではなく、恥ずかしく足を開かされ私では見ることの叶わないところへそつと薬を塗つてもいた。

「んっ……」

時折、ちりつと走る痛みに声を殺せば、痛みを宥めるように内腿に口付けが落とされる。

何度もそれを繰り返せば、納得したのか私の間から抜け出して隣りへと戻ってきた。ことりとサイドボードの上に薬を置くとその隣りにある瓶をちらと見る。

「使わなかつた者がいるんですか？」

「え、いえ、その」

「貴女が庇うなら、俺は何もいいませんけど……」

ぶすっと不機嫌そうにそりつて私を抱き締めると、不機嫌な様子とは裏腹に柔らかく私の頭を撫でてくれる。彼の肩越しに私もそれを見て小さな溜息。中身は潤滑油代わりのものだ。

「貴女が……」

「はい？」

ぎゅっと腕に力が込められて強く強く抱き締められる。

「貴女がただの遊女であったなら、直ぐにでも身請けして国へ連れて帰るのに……貴女が特別であることは、以前のこととで思い知られました」

きつと私が暫らく眠らなくてここに来なかつたときの話だ。

彼は在らぬ嫌疑を掛けられて拷問を受けた。苦い思いが蘇つて「『めんなさい』と額を彼の胸に押し付けて謝罪すれば、ふつと笑われたのが分かる。

「俺のことは良いんですよ。ただ、貴女一人の存在で戦況が左右されるとあつては、なかなか難しい。大きく長い争いは国だけではなく世界を蝕む。何を捨てても良いと思つているのに、思い切れない」

笑いが溜息に変わり、胸が切なく疼く。

「あの、えと、お願にしてそういうのは今後なことうつ運びにしてもらつてこると想つので……」

実際一夜を共にすることは少なくなったと思う。

私と彼のことを察している人たちもいてその計らいだと私は思つてゐる。だから、そのことをもぞりと彼の腕の中から、顔を上げて告げれば彼は曖昧に、そして困ったように微笑んだ。

「ゼロになると思いますか？」

「え、はい。そのう」

私がじぐじくと頷けば、彼の瞳は哀しげな色を移した。

「俺は難しいと思いますよ。貴女の味を知ってしまった者がそう簡単に手放すとは思えない」

大きな両手がふわりと頬を包んで、ぐいっと上向かせると「少なくとも俺はそうです」いつて口付けを落とす。深く、深く、蕩けるように濃く長く……。

この長く甘く愛しい夢が永遠に続けば良いのに、現実なんて捨ててしまえれば良いのに、彼の腕の中に居ると必ずそう思つ。

\*\*\*

私は目を覚ます。

そして、今朝も、目新しい変化は何一つなかつた。おはようと口付けても眉間に皺が入るだけ。いつてらつしゃいと声を掛けても振り返つてはもらえない。

ただ動くと下半身がずくずくと痛むだけだ。

傷も心も癒されていたのは夢の中だけだったのかもしれない。凄く気分が滅入るから、バイトが入つていて良かつた。

はあ、と嘆息すると夢の中でレイアスの切なげな瞳を思い出す。

「…………マメですね？」

「ひやつー！」

ぼんやりと持参していたメモ帳に一日の仕事の流れを書き込んでいたら、ひょっこりと店に戻ってきた店長さんが私の手元を覗き込んでいた。思わず上げた悲鳴に、楽しそうな笑いが零れてきた。

「う、恥ずかしい。

「お茶にしてませんか？ 休憩しましょっ」

（――する店長の手にはマグカップが握られていた。

「昨日はお客様仕様。今日は身内仕様です」

レジカウンターの椅子に きちんと座ると痛むため 浅く腰を預けていた私の前に、ことんと置いてくれる。マグカップには可愛らしいクマさんが描かれていた。

可愛い。

奥さんの趣味なのかな。

私はお礼をいってカップを両手で包むと、ふーっと息を吹きかかる。ふわりと鼻をつく香りは……フルーツ系……なんだろう？

「マスカットですよ。美味しいそうな香りですよね、お腹が鳴りそうですね」

小首を傾げた私に説明してくれる。

私は「ああ」と納得して一口。ふわりと爽やかな香りが口の中に広がつてスッキリする。「ひとつカップをカウンターに戻して私は手元のメモ帳をぱらぱらと捲る。

「流れのメモ、ですか？」

「はい、私外に働きに出るのは久しぶりなので、失敗して『迷惑を掛けないためにも……』

「によ」によと答えた私に店長さんは「なるほど」と相槌を打つてくれる。

「でもそんなに、肩肘張らなくても大丈夫ですよ。貴女の失敗くらいのことでは迷惑だとは思いません。それにね、上司が部下の失敗をフォローするのは当然なんですよ。責任なんて上に押し付けるつもりで、自由にしてもらつて構わない。そう思つからこそ人を雇うんです」

きょとんと店長さんを見れば、にこりと微笑んでくれる。

「ここまでが建前でどこからが本心なんだろう? 私はその境界線を測りかねて「失敗しないように気をつけます」と苦笑した。

「ありがとうございます、一生懸命なんですね。助かります、店長」と任せられそう勢いですね?」

くすくすと笑つた店長さんに釣られて笑つてしまつ。

確かにそんなに、張り詰めなくとも、実際私がやるのは、裏では店長さんが居てくれる店番で、それほど大きな失敗が起きるというのなら起こしてみるとでもいう感じだ。なんだか、ふと肩の力が抜けた私をちらと見て、店長さんは「それはそうと」と話を変えた。

「今日は昼食どうするつもりですか?」

「え、ああ、そう、ですね。近所に食べに出ても良いですか?」

考へてなかつた。突然振られた話にそう答へれば「もちろん良いですよ」と頷いてもらえる。しかし

「良かつたらうちで食べませんか? 一緒にと、いうわけには行かなくて残念ですけど、僕の分もあるので、序に」

そう続けられて恐縮する。

そこまで迷惑を掛けるわけには行かない。確かに作るのは一人分も三人分も変わらないだらうけれど、そんな手間を掛けては奥さんには申し訳ない。

私は慌ててその顔を告げると、店長さんは刹那不思議そうな顔をした。

私は変なこといった？  
いってないよねえ？

「作るのは僕ですよ？ 他には誰も居ないので気兼ねしなくて良いです」

「え、でも」

「あれ？ いってませんでしたか。別れたんですよ。だから人手が足りなくなってしまって……」

「え、でも」

反射的に店長さんの左手に視線を走らせてしまった。

それに気がついた店長さんは、そっと右手で左手を撫でて、ふふふと笑いを零す。

「いわゆるフヨイクですよ。密商売なので、あまり私生活の変化を持ち込めないでしょう？ だから……なんんですけど、あつと、これは新調したものですよ？」

「ええ、とても素敵です」

つて！ 私つてばなんて思慮の足りないことを。

素敵とか、今、全然関係ないしつ！

あわわつと慌てて謝罪しようとしたら、からんからんつとウェルカムベルが鳴った。

店長さんは顔見知りなのか「いらっしゃいませ」と朗らかに立ち上がって、手に持っていたマグカップをカウンターの裏に置くと、にこりと毒なく微笑んでお密さんへと歩み寄つていった。

私は、その後姿を見詰めつつ、ほふつと、椅子に腰を預ける。  
問題なんて全然なさそうな人なのに、結婚生活を維持出来ないほ

どの何かがあつたんだなあと思つと不思議と親近感が湧いてしまつた。

結局、お昼は店長の勧めで「駆走してもらつた。  
シーフードピリオにサラダ、コンソメスープつて、普通にランチ  
だ。男の人の料理つて意外と繊細だなーと思いつつ、いただきます。  
と手を合わせてから頂戴する。

「美味しいな」

少し、男性の一人暮らしの家にお邪魔するのは軽率な気がしたけれど、店舗と続きであるし、昼間だし、それに私なんかに“何か”を思う人なんていらないだろうと心配するのが馬鹿馬鹿しくなつた。

ふと昨夜の主人の姿を思い出して、どうせ汚いしね……と自嘲的な笑いを零す。

そして、肩口に鼻を寄せてすんつと鳴らす。

何か変なにおいとかしないよね、私……。

自分で気がつかないところで、汚いと嫌だな……。気分がしょんぼりしたけど、ふわりと立ち昇ってきたスープの香りに、ふと穏やかな気分になる。まあ、良いか。と食事を続けた。

「「駆走様でした」

ちょっと、量が多くつた。お腹が苦しい……。

じくんつと置いてもらつていたお水を飲んで、ふとキッチンに目を向けるとそのままになつっていた。几帳面に見えて、粗があると少しほつとする。

私が粗だらけの人間だから。

勝手に片付けるのは悪い気もしたけど、どうせこのあと店長さんが片付けるなら、今、私が片付けても一緒によね。と納得して、私は満腹すぎるお腹を納めるために自分の食べた食器も下げてきて台所に立つた。

……

「美味しかったです。手間掛けさせてすみません」

「あれ？ まだ休んでいて構いませんよ？」

カウンターの上でノートにペンを走らせていた店長さんにそう声を掛ければ、顔をあげて気遣つてもうう。

「良いんです。」駄走様でした

「そう？ エーっとお粗末さまでした、かな？」

くすくすと笑い合ひ。

本当に感じの良い人で良かつた。

それに家で一人なのを息苦しく感じて外に出たのだから、誰か居るなら出来れば一人になりたくないと思つたのは私だから、気に掛けでもらうようなことではないのだけど。

「」迷惑になると思つるので、次からはお弁当でも持つてきます

カウンターの裏に預けてあつたエプロンを取つて、身につけながらそのままにすれば「お弁当かー」と楽しげに繰り返した。

「貴女の料理は美味しいです」

重ねられれば、私は慌てて顔の前で両手を振る。

「とんでもないっ！ 店長の方がお上手ですよっ！ 私の料理は不味いんです」

だつて、誰も美味しいなんていわない。

だから思わず力が籠ってしまった。

そんな私を、驚いた顔で見詰めた後、ふっと吹き出した。

「だ、大丈夫ですよ、貴女の分をとつて食べたりしませんから」

くすくすと愉快そうに笑われて、ぱああっと顔が赤くなる。そういうではなくて、とは言ひそびれてしまった。

それから店長は、時間まで店のほうにいてくれて、そのあとはお留守番をさせてもらつた。

お客様の出入りもそこそこあって、人の流れを見ているのは楽しい。家に帰る頃には、憂鬱な気分も傷口もそんなに傷まなくなつていて胸を撫で下ろした。

今夜は夢を見る事もなく、休めそうな気がしたんだけど……

## 第九話

\*\*\*

もうお約束というか、私は逃れられないのだろうか？

私はいつもの部屋に居た。

しかも今は夜だ。窓の外が暗い。

嫌だな。

ほぼ確実に彼は今夜こないと思つ。だとすれば……誰も来なければ良いのに。

ふうと嘆息して、窓辺に立つ。

庭は窓から洩れている僅かな光源で保たれる程度、薄暗い。私は薄いカーテン越しに外を見る。以前ここから出たとき、ここはとても高い場所にあることを知つた。

だからか、星が降つてきそうだな、なんて乙女なことを思つてしまう。

まだ、誰も来ない。

このまま誰も来ないかもしれないし、散歩でもしよう。どうせ、まだ眠くない。

私はそう思いついて、ふわりとカーテンを下ろし扉へと向つた。途中ソファに引っ掛けであつたストールを手にとつて肩に羽織る。寒いとは感じないけれど、何も羽織らないといつのは、少し不安なのだ。

重たい扉を押し開けて、回廊へと出る。

内庭に居れば用があつてもすぐに誰か見つけてくれるだろう。私はそう思つて庭に出た。いつものようにただ静かに綺麗な水を湛える噴水に足を運び、傍に腰を降ろす。

夜はその水盆に星が移つて綺麗だ。

ただ単にこの空間が癒しを作つてゐるのではないかなどと思わせる。

そんな私の平穏は直ぐに破られた。

信者の一人に連れてこられた男は東の国を拠点とする豪商。商人らしい。若くして成り上がつたという豪勢な雰囲気を携えているわけではなく、落ち着いてどこか憂い顔の男性だ。

案内してきた信者は、私と彼が顔を合わせると、仰々しく腰を折つて退席してしまった。

私は諦めて立ち上がると、彼は青白い顔を何とか微笑まそつと努力してくれているようだ。その姿はほんの少し、痛々しく、見ているほうが切なくなる。

怪我……は、ないようだけど。

歩み寄った私は背の高い彼に手を伸ばした。それに誘われるようになししだけ腰を折つた彼の頬にそつと触れる。ひやりと冷たい。

「……あたたかい、ですね」

私と同じことを思ったのか、静かに瞑目してそう零す。

「何か、ありましたか……あの」

出来れば今夜はと思ったものの、彼の憂いを帯びた瞳を見ていた  
ら続きを告げることが出来なかつた。今夜受け入れたら、傷の治り  
が遅れそうな気がする。

私の言葉の続きを素直に待つてゐる彼に私は緩やかに笑み、首を  
振つた。

「何でもありません。顔色があまり宜しくないですよ？ 休みまし  
ょう……」「……」

いつて先を歩いた。

部屋に戻ると、時間稼ぎのようにお茶を勧めてしまつた。

そんな私に気が付くこともなく、彼は「いただきます」と頷いて  
くれる。でも、冷え切つてゐる身体には暖かいものはそんなに悪い  
判断でもないと思つ。

私はティーテーブルの傍に用意されていたワゴンのティーセット  
を使ってお茶を淹れる。ハーブティだ。ラベンダーの柔らかくどこ  
かすつきりとした香りが部屋に充満した。

無機質で冷たい感じのするこの空間にて、いつのまとでも珍しい。  
私の気分まで少し暖かくなつた。

「どうぞ」

ソファに座る彼の隣りに腰掛けて私はティーカップを置いた。  
短く礼を告げた彼は、そつとそのカップに手を伸ばし、節の目立  
つ長い指を静かに掛けて持ち上げ、もう片方の手でカップを包み込

んだ。静かに深呼吸する姿はとても疲れている。

そんな彼が「医者に……」とぼつと口火を切った。

「医者に余命を告げられました

つゝとカップの端を唇に寄せて一口と流し込み、何も答えない私に話を続ける。

「癒しの神子と名高い姫でも、余命までは伸ばせませんよね。まだ、私はやらなければならぬことが残っているのですが……せめてこの憂う心だけでも安らかになればと思い、この地に足を運びました」

「……」

きっと、治ると思う。

彼は商人であるらしいから、きっと現実主義なのだろう。田で見たものしか信じない。私のような人間はただの噂。有り得ないと思つてゐる。思つてゐるけど、それに縋るしかやり場のなくなった自分にもきっと傷付いているはずだ。

そう思つととても氣の毒な気持ちになつてしまつた。

「私にはまだやらないければ

と繰り返す彼のカップを握る手をそつと支える。微かに震えていふことに気がつくと胸が痛んだ。

「何をしなくてはいけないんですか？」

いいつつ彼が手を下ろすのにあわせて私も降ろし、彼の手を握る。カップの余熱のお陰で氷のように冷たかつた彼の手がほんの少し暖かくなっていた。

「やうなくてはならない、しなくてはならない」とを探しているんです

「……それは、時間が掛かりますね」

「ええ、とても」

思わず零した返答に彼は首肯して口角を僅かに引き上げた。

「姫は晒わないのですね」

私の手に空いた手を重ねてきゅっと握る。

「大抵のものはそんなことをいえば、戯言だと晒します。金も名譽も思つま、この手中にあるといふのに他に何を求めるといふのかと……だけれど、私は求めた。見ぬものを、寸暇を惜しんで何かを求めた」

その結果がこれです。いつて苦笑した彼の瞳は陰る。

「満たされない以上、貴方は求め続けるのですから、晒いません。貴方が心から満たされるものを見つけるまでの命の余暇が認められることを私も望みます」

自然と唇から紡ぎ出される言葉は不思議だ。

私が口を閉じれば、ぐいと腕を引かれ空いていた手で顎を取られ口付けられた。暖かい唇はラベンダーの香りがする。

その香りは私の心も癒していく。

ハーブはほんのり苦い。けれどどこか甘い気がする。

強く押され、私はぽつつとソファに身体を横たえた。

丁度頭が肘掛に来てそこへそつと載せてくれると、彼は私の頭の後ろから腕を抜いて柔らかく私の髪を梳いた。髪に触れられるのは心地良い。意図せず頬が上気してしまいそうで、私は彼から顔を逸らした。それにより、晒されてしまふ首筋に、そつと彼の唇が触れる。

軽く歯を立てられて食まれると、ふわふわと身体が熱を帯びてくれる。

昨夜レイアスは「俺も我慢しますから」と私を抱かなかつた。その余熱が燻つてゐるようだ。感じやすくなつてゐる直覚はある。

「……どこか、お辛いですか？」

「え」

ふと顔を離した彼に、覗き込まれ私は大きく瞬きをする。

「眉間に皺、寄つていますよ……つい、惹き込まれて押し倒してしまつたのは私ですが、私は病人なので、無理な姿勢は辛いですし、出来れば寝台に移りませんか？」

そこままで告げると彼はそつと身体を起こして私に手を伸ばす。

顔、赤くなるなつ。  
焦らないで……。

私は自分自身にそういう聞かせながら、彼の手を取り立ち上がる。平常心。平常心で、返事を

「…………はい」

声が掠れてしまった。  
恥ずかしい。

顔を伏せ、先に寝台へと歩み寄る私の後ろをついて歩きながら彼が、ふつと笑つたのが分かつた。

「神子姫様は、陶器で出来た人形のようだとお聞きしていました。  
激しく抱けば壊れそうな人形は、これほど暖かくはないですね」

寝台に横になつた私を抱き締めて、丁寧に髪を梳きながらそう告げる彼にとろんつとしてくる。髪を撫でられるのは好きだ。身体を撫でられるのも好き。優しく丁寧に触れられるのはとても心地良い。

「猫のような人ですね」

くすりと微笑まれ私は顔を上げた。

きよとんとしてしまつっていたのだろう、彼は益々口角を上げる。

疲れ切つて、色を失くしていた雰囲気が今はない。

それは彼に墮ちていた影がさつたのだろうと思いつ。

「貴女を抱き締めていると、屋敷のテラスで猫を膝に抱いていると  
きのようです」

「猫、飼つてらっしゃるんですか?」

「ええ、とても美人ですよ」

良いな、猫。

私も何か動物を飼いたかつた。

でも自分の世話も間々ならない私では到底無理だと思い口にしたこともない。

「薄灰色の短毛で耳の先と尻尾の先が黒いんです」  
「可愛いんでしょ、うね」

つて、しまつた。

また、素で答えてしまつた。

最近、私本当にどうしてしまつたんだろう。以前の私なら絶対に何も答えなかつた。相槌すら打たなかつたと思つ。それなのに……心がざわめく。

夢の中なのに、自分が作れない。

癒しの神子の仮面を被つていられない。

「可愛いですよ、機会があれば連れてきましょ」

についつとそう続けられふわふわっと頬が緩んでしまつた。

そんな私を愛しげに見詰められ、氣恥ずかしくなつて顔を伏せる。

「このところ、床に伏せりきりで、人と触れ合つことなど思いもしませんでしたが、気まぐれで『癒しの神子』の真相を確かめに、と、そして、そのような方のところで逝くのならそれも本望と思いまつたが……」

「貴方は、」

「……はい」

「貴方は助かりますよ」

やつとらしさを取り戻してそつ告げれば、彼は掠れた声で「はい」と頷いて苦しいくらい強い力で私を抱き締めた。

\*\*\*

なんだか昨夜は普通に、彼が助かつて良かつたなと思つてしまつた。

あのあと、彼は私にそれ以上のことをすることがなく、本当に愛猫を愛でてゐるときのように優しく柔らかく触れるだけだった。

それがとても心地良くて、私は夢の中まで静かに眠つてしまつた。

傷が恐かつたから、ほつとしたものもあるんだけど。

今日はバイトが入つていない。

これまでと同じように、掃除して、洗濯して……ふと外を見ると良い天氣。

普段ならそう思つても外に出ることはないのだけど、今日はなんとなく出ても良いかなと思い、買い物に出かけることにした。

お店などがある通りに出ること、仕事先の前を通ることになる。

挨拶くらいした方が良いのかなあ？ と思いつつ、足を止めた。ショーウィンドーから中を覗けば、カウンターの椅子に腰掛けて、店長さんが事務仕事をしている。いつこつと窓を叩けば、ふと顔をあげきょろきょろ、くすりと微笑んでもう一度いつこつと呴いたら目が合つた。

それだけで良かったのだけど、店長さんは店先まで出てくれて「こんにちば」 と声を掛けてくれた。

「今日は仕事入れていませんでしたよね？　お出掛けですか？」  
「買い物に出てきました。夕飯はどうしようかと思つていたところです」

のんびりと答えると、店長さんは「さつきお昼が過ぎたところなのに？」とくすく笑う。けれど、世の主婦なんて、基本的に常に家族の食事のことを考えているものだらう。

お昼が済めば夕飯。

その流れは普通だと思つし、とても重要なことだ。  
大抵家族に聞いても「なんでも良い」と返つてくるけれど、どうかで期待していた何かと違つていれば、その食事量は激減。  
馬鹿馬鹿しく思えてくるけれど、作った以上全部食べて欲しいし、そうなると、やはり何が望まれてしているのかと常に思案してしまつ。

「僕は和食が良いですね。時々無性に食べたくなります」  
「和食、ですか、かなり範囲が広いですけど」  
「煮物とか？　ああ、今なら南瓜が美味しいですよね。ああ、ですが、茄子くらいの方が良いかも」

南瓜より茄子の方が好きなのかなと首を傾げればさらりと続ける。

「買つて帰るには荷物になりますし、重いですよ。荷物持ちがいるときでないと」

なるほど。本当に気配り上手な人だなあと感心している間に、うーんつと唸つてから続けてくれる。別に評価アップを狙つたとかではなくて、素で気遣いが出来る人なのだと驚きつつ会話を戻る。

「あと焼き魚、秋刀魚とかが良いですか？」

「じゃあ、お味噌汁もあったほうが良いですね。具は何が好きですか？」

「豆腐とワカメが良いです」

そこまで話して、顔を見合せると噴出してしまった。  
別に私は店長さんの献立を考えているわけではない。それでも  
こうして明確なものを告げてもらえると助かる。

私は参考になりましたと締め括り、ペニリと頭を下げた。なぜなら店の電話が鳴っている。店長さんも店内を気にして「ええ、それじゃあ」と微笑んでくれた。

「あ、」

「ひとつと少し進んだところで呼び止められて振り返れば「大根おろしは手が荒れますから、手袋したほうが良いですよ」と手袋をするジエスチャー付きで付け加えられた。

「はい、ありがとうございます」

ペニリと頭を下げて、上げると

「いらっしゃい」

と微笑まれた。

「……いっしきます」

反射的に返したもの、少し恥ずかしい。

ふふ、変な人。

でも少しだけ暖かい気持ちになつて、今度こそお店の前を通り過ぎ、からんじらんと店の扉も閉まつた。

……

勢い付いて、店長さんと話題に上がつたもので夕食にしたもののがく考えたらうちで煮物は評判があまり良くない。

半分以上残つた。

お裾分けでも、と思つたけど、私の料理は多分不味い。

そんな嫌がらせみたいな真似するべきじゃないだろ？  
はあとシンクに両手を着いて、ちらりと沢山余つてしまつている  
鍋の中身を見詰めた。

「明日、お弁当に詰めていけば良いか」  
「えーお母さんお弁当なの？ 良いな！」

お風呂上りの子どもが私の独り言を聞きつけて駆け寄つてくる。  
激突していくのを受け止めながら「土曜日は一緒に作るね」と笑つた。

「一人で留守番なんてさせて大丈夫なのか？」  
「え、大丈夫だよ。もう小学生だし、それにそんなに遅くないから」

突然話しに入つてきた夫に告げれば子どもも「大丈夫だよ」とへろへろ返す。本当は心配でもあるんだけど、子どもの仲良しさのお世にも話をしてあるから大丈夫だと思つ。そう、話したと思うんだけど。

「ともちゅ んとー、かずくんが遊びに来るしねー」

おやつの準備もよろしくーと、本人は「機嫌だ。ぱたぱたと台所をあとにした。その様子を眺めて「大丈夫なら良いけど」と彼も踵を返す。

「ね、ねえ」

反射的に彼の手を掴んでいた。「何?」と振り返られても、え、えーっと……えと、

「あ、明日何食べたい?」

「オレは何でも良い」

「いや、でも何でもって……」

「じゃあ、なくとも良い」

……ひ。

言葉に詰まつた私に「ほら、手離して、オレ見たいテレビあるから」あっさりとう声が掛かる。私は反射的に「ごめん」と謝つて手を離した。

とても、遠いな。

彼の背中を見詰めて溜息。

私はまたシンクと向き合つた。

思いつかなきや食べなくても良いって? めあ、不味いもの食べれやられるより、適当に外で済ませたほうがそりや良いよね。いつんっぽんっと軽快にシンクが水を弾く。私は慌てて目元を拭

つて、残りものに蓋をした。

## 第十一話

\*\*\*

一色で統一された室内は無機質を隠せない。

その中の一角だけ、熱い吐息が漏れ生を感じさせる。

私はぼんやりと彼の腕の中で抱かれながら、物思いに耽っていた。じゅうりで田を覚ますどのくらい経っていたのか、レイアスから手紙が届いていた。手紙なんでものをじゅうで受け取ったのは初めてだ。

浮き足立つて、封を切つたら明日の夕刻にはじゅうに元へとじゅうことだった。

「この間の話からすれば、それから暫らくはいてくれるのだろうから、私の気持ちは凄く凄く上昇してそれだけで満たされた。

恋をしているときは、確かに毎日じゅんな感じだ。

相手の一拳手一投足で一喜一憂して、馬鹿みたいになる。

いや、実際馬鹿になるんだと思つ。

そうじやなことじゅんなに浮かれた気分は味わえない。現実で否定的な分、じゅうりでは最近素直でいられる。

「…………お金ですか？」

「はい、少しでも良いのですけど……あの、私に出来るお手伝いをしますから」

私は手紙を握り締めたまま、廊下を歩いていた信者の一人を掴まえてお願いした。彼女は少し不思議そうな顔をしたけれど、私と私の手の中のものを交互に見て、にこりと微笑んで「分かりました」と頷いてくれた。

明日は街に出て、彼に何かを用意してあげよう。

きつと遠いところから來るのだろうから疲れていると思うし……

そう思うと気持ちだけがふわふわと浮き立つような感じがした。

「つ、姫」

突然ぎゅっと抱き締められ、耳元で声がして私は我に返った。キスも優しくて女性の扱いにもそれなりに慣れているのだと思うけれど、彼は思いのほかしつこく私は長い間揺られていて、ぼうとしてしまっていた。

そんな彼は大抵ことが済めば夜中だろうと明け方だろうと、そのまま帰ってしまうから私の頭は明日のことについてぱいだつただけで、今夜は帰らないらしい。

ぽすつと私の隣に横になつて、私のこめかみ辺りから鼻先を摺り寄せそのまま髪に埋もれて眠ってしまった。

珍しいな。

とほんやり感じながらも私も船酔いみたいな感覚から抜け切れずに瞼を落とした。

.....

夢現の狭間で、小鳥の悪戯みたいにそこかしこに口付けられる感

ゆあうつ

覚に引き上げられる。くすぐったくて心地良くて、こんな可憐ひじいことをするのはレイアスだと思い口元が緩んだ。

やして、ゆっくりと瞼を起しすと

「あれ？」

「お田覚めですか？」

ふわりと飛び込んだ髪は紫暗色。  
薄つすりと落ちる明かりが当たる部分だけ薄紫色にキラキラしている。

そして、私の田尻を撫でて顔を覗き込んできたのは、どいかの宰相閣下だ。静かにぱちぱちと瞬きを繰り返し、その姿をまつさりと瞳に映す。

「何か良い夢でも見ていらしたのですか？」

持ち上げた手で田を擦りしついたら、絡め取られて瞼にまは口せきが降りてきた。

夢の中で見る夢はなんだらう？ 私は無言でほんやり。

そんな私を見てくすりと微笑むと「夢と幻の狭間でたゆたう貴女は美しい」とそして宰相閣下は「朝ですよ」と告げ肌を重ねる。

「…………んづ」

耳の後ろあたりに暖かい息を吹きかけられ唇が寄せられる。

起き抜けだからか、意図せず熱の籠つた吐息を零しそうになる。飲み込んだはずだけど、首筋を丁寧に舐められ、背に回った手のひらが柔らかく素肌を撫ると息を殺していくのも辛くなる。

「朝陽に映る貴女がこれほど濃艶であることを知りえていたのならば、時が許すその限界まで、貴女のお傍を離れはしなかつたのに…」

「…」

彼の眼に、夜の私と朝の私が違つて見えているのならば、それは、彼が変わったからだ。彼はここを訪れたときのように病んだ瞳はしていない。ということは、断つても私はきっと悪くない。

私の肌を味わうように撫で口付けられる行為に、時折びくりと身体が跳ね零れる吐息を慌てて押し留めるけれどそれにも限界がある。

「神子姫」

「あつ、んう、あ、あのっ！」

尚深くなりそうな愛撫に私は何とか腕を突つ張り、少しだけ引き離した。

婀娜っぽい瞳をした閣下は、すうっと冷たげな瞳を細めて「はい」と返事をしてくれる。

ああ、駄目だ。

赤くなる顔だけは抑えられない。

自分の身体が火照り、頬が熱を持っていることを私が自覚するくらいだ、閣下も気がついていることだろう。微妙な敗北感がある。

「お願いが、ある、のです」

そう告げれば、腕に込められた力がふと弱められた。

今度は愉快そうな瞳を向けられる。

あまりマジマジと見たことはなかつたけれど、この人はこんなに

表情豊かな人だったのだなと思いつながら私は続けた。

「本日は、お急ぎではないのですか？」

「神子姫のお望みとあればどちらでも構いませんよ」

それは大丈夫ということだろうか？

「街へ、その、街へ連れて降りてもられませんか？」

お金は貰つたけど、良く考えたら街へいくまでの足がなかつた。歩いて降りても良いけど道がさっぱり。

一本道だとは思つたけど、あの時は彼が馬を出してくれたから到着するまで全く周りを見ていなかつた。

「街、といいますと、巡礼の地、神殿の膝元ですか？」

「えつと、どこの何かは知らないのですが、ここを降りた先にあるところです。私、地理には明るくなくて、その、連れて降りていただければ帰りは何とかしますので」

「何とか、つて……神子姫が、ですか？」

「ぐぐぐと頷く私に彼は楽しげに口元を緩めて「分かりました」と頷いてくれた。

さういふのことはあさりキャラになつて、ふわわっと歓喜に胸が沸く。

なんとか街まではいけそうだ。

「他ならぬ神子姫様からの頼み」と、聞かぬわけにはいかないでしょう

仰々しくそういうて、彼はするりと寝台から抜け出して傍に置いてあつた着衣を整えていった。

「神殿のものには話を通しましょう。表でお待ちしていますので準備が整いましたらどうぞ」

紳士然とそう告げると恭しく頭を垂れて部屋を出て行つた。ここを訪れるような人々は、大抵身分の高い人が殆どだから礼儀は正しい。

まあ、それが国のトップとなると、それでもなかつたりするのだけど……。

「と、そんなことよりも」

折角長く夢を見ているのだから、早く用意して出掛けないと。私はばたばたとこちらでは滅多に使うことのない浴室へと向つ。身体を綺麗にして慌てて、以前降るしてもらつた服に袖を通す。そして、化粧台の引き出しに大切にしまつてあるペンドントを手にとつてそつと掛け、鏡を見て、ふふっと笑いを零す。

我ながら気持ち悪いことこの上ないけど、大好きなのだ。  
仕方ない。

私は一度だけ鏡の前で回つておかしなところがないか確認してから部屋を出た。

駆け出しそうな勢いなのを必死で堪えて、努めてゆっくりと足を進める。扉の前まで来れば、両脇に控えていた人たちが一礼して開いてくれた。

## 第十一話

「お待ちしておつました、神子姫」

神殿の前には馬車が付けてあって、歩み寄ってきた宰相閣下がそつと手を伸ばした。

私はその手を取りつつ、

「馬車、ですね」

「ええ、馬車ですが……」

こんなもの結婚式場でくらうしか見たことなかった。『じでじて』とした装飾があるわけでもないし、天気が安定しているからか、屋根もない。

思わず眺めてしまっていたら、くすりと笑われてしまった。

「早馬ではありますんから、時間も掛かります。そろそろ出発しませんか?」

「あ、はい」

彼は先に乗り込むと、不安定な揺れにバランスを崩しそうになる私の手をそのまま引いて座らせてくれた。その隣りに闇下が腰を降ろせば馬車はゆっくりと動き出す。

「お手間を取らせてすみません」

「いえ、こんな機会に恵まれるとは思いませんでした。それに、この馬車は私のものではなくて神殿所有のものですよ」

「え?」

そつか、神殿にだつて人が沢山住んでいるんだから、移動手段といふものは必要になつてくるよね。私が一人で納得していると閣下は話を続けた。

「私はどうにも信用していただきていないうつで、そのまま姫を連れ去ると思われているようですよ」

前例でもあるのでしううかね。と意味ありげにくつくつと口元を覆つて笑いを零す。

別に疚しいことはしていないけど、確かに、その点について神殿の人たちが警戒しても仕方ないと思つ。

それにしてもこの人、元気になると、腹黒いタイプだ。

落ち込んでいるときの方が余程大人しく人畜無害そうに見えるのに……私はこのときやつと人選をミスしたような気がした。

見覚えのある門前まで来たところで馬車は一度止まる。

「（）要望の場所はどちらですか？　その門前まで馬を進めますよ」「え、あ……ええと、私ここで降ります。特に場所は決めていませんし、その……」

（）によ（）によとそういうえば「私も供をしましよう」彼は静かに立ち上がり先に降りてしまう。

遠慮する隙もお断りする暇もない。

「あの、私は一人でも」

気ままに一人でショッピングというわけには行かなさそうだ。

続けて立ち上がった私の手を取つて、ゆっくりと地面に降ろして

くれる。まだ揺られているようで、かくんとひざが折れそうになるのを支えると彼は静かに続けた。

「一人でどうされるのですか？ どちらにしても私は一度神殿に戻らないといけない。私は神殿に馬車を預けたままですかね」

「…………ご迷惑お掛けします」

確実に人選をミスした。

押し負けた私に彼は微笑み「それに」と続ける。

「護衛が居ないというのも問題ですよ。私は傍に控えてありますから、そう邪険にしないでください」

「そのような、ことは……」

太陽の下で見ることはなかつたし、直接個人を個人として見ることがなかつたから気がつかなかつたけれど、涼しげな美人さんだ。こんな人と昨夜一緒だったのだと思うとくらくらする。

引いてくれそうにない宰相閣下にはこの際目を瞑るとして、私は気を取り直し街へと入る。

外門を潜ると、あの日来たときと変わらず街は生き生きとしていて輝いている。

その空気に触れるだけでも自然と心が軽くなる。

閣下は控えているという言葉通り、私より数歩離れたところをのんびりとついて来ていた。

広場まで出ると今日は市が立っていたのか、その跡始末をする姿も見えた。

朝市の後片付け？ といったところだろうか？ そんなものがあ

つたなら是非見てみたかった。私はそれを横目にじつは店を一つ眺めて回る。

彼は何が好きだらう? 私にとっては見るもの全て新鮮でどれも楽しいし大好きだけど、彼はそういうわけではないはずだ。

うーん、一口に贈り物といつても色々あるだらう。

私は彼の趣味を何も知らない。

そういうときのプレゼントの鉄則は『自分の好きなものを贈る』

うん。きっとこれだ。

私はそう思って、改めてショーウィンドウを眺める。

お菓子はこの間買つてもらつたし、ケーキ……美味しいしそうだけど、日持ちしないだらうしな。大体私が起きてしまつたら、時間軸が良く分からない。駄目になつている可能性だつてある。

うーん、でも、ああ、これなら。とふと思いついて、私はふと顔を上げると後ろを見た。控えていた、閣下に「あの」と声を掛けると、すっと歩み寄ってくれる。

「あれなんですか?」

「ケーキですか? 可愛らしいものを好むのですね」

女性らしいと加えられ、また笑われてしまった。

私はそんなに彼のツボを刺激するのだろうか……。というか、顔が近いのですが、頬が当たるほど近くに来なくとも同じものは見えると思うじ、何気に腰に掛けられた手がくすぐつたいのです。

むうっと眉を寄せたところで「買つてしましようか」と重ねられ

私は慌てて首を振った。

「い、いえ、そりではなくて、私が小遣いは貰つてきたので  
「小遣い、ですか？」

慌てて口にすれば、彼は涼しげな田元を驚きに変え、僅かな沈黙のあと、我慢ならないと笑い出してしまった。

「え、あ、え、ええと……あの、私、そんなに変なことをいいましたか？」

「いいえ、滅相もありません。間違つていません」

それならそんなに目に涙浮かべるほど笑うことないのに……。

「すみません、あまりに可愛らしかったので……それで、私は何の相談に乗れば宜しいでしょうか？」

私がしょほんとしたことに気がついたのか、彼は姿勢を正し丁寧に問いただした。

私は、ポケットから受け取っていた小さな袋を出して「これで足りますか？」と訪ねた。閣下はなるほどと微笑んで、そつと私の背を押し、店の扉を開いた。

そして確認して私の代わり買い物してくれた。

どうぞ、と渡してもらえたパウンドケーキはまだ暖かくて柔らかい。

今すぐ食べさせてあげたいのに、一緒に居るのが別の人で物凄く残念だ。

「あつがとうございました」

からこのと木で出来たベルに見送られ通りに出ると私は改めてお礼を告げた。

「お役に立てて良かつたです」

そういうて軽く礼をすると、閣下はまた私から一歩下がってくれた。

買い物を続けて良い、こうしようとだらう。その小さな心遣いが気恥ずかしきような嬉しきような、私は複雑な思いでふりと足を進めた。

あとはやはり身につけるものとか良いと思つ。

シャツと胸元のペンドントを掬い上げる。

可愛い。

どうして、現実世界には持ち帰れないのだろう。もし、持ち帰れるなら毎日いつもと身につけておくのに。

そして、ふと足を止めた。

この間私がショーウィンドウの硝子を割りそうだといわれたお店だ。商品は綺麗に入れ替わっている。新しいものもどれも私の好みだ。この店とは、多分、私相性が良いのだと思う。

指輪……とかは、邪魔だよね。

騎士つてくらいだから、剣を扱うのだらうし…… 神殿内には武器関係は持ち込み禁止なので彼が帯刀しているのはあまり覚えがない。 そういえば、ソニーに来たときはしていたはずだけど、顔と足元しか見てなかつた。

……私どんだけ恥ずかしいヤツなんだ。

同じように首飾り、いや、でもそれじゃあ如何にもお揃い意識してますつて感じで恥ずかしいよね。

うーん。

あ、腕輪だ。

丁度私の目に留まつた腕輪…… バングルつていいかたの方が良いのかな？ は、銀製なのかな？ 落ち着いた色味だし、彫りも丁寧で綺麗。

中央の石も丁寧に磨き上げられていました。  
サイズはきっと大丈夫だよね、かつちり留めるタイプではなさそ  
うだし微調整は利きそうだ。私は再び振り返り「あの」と声を掛け  
れば、同じように歩み寄ってくれ、同じように近い。

「少し、近いです」

「貴女の声を一音も聞き逃したくはないので」

そんなにひそひそ話はしていない。

でも、この人に何をいつても丸め込まれそうな雰囲気だったので、私は距離の譲歩は諦めて品物の相談に入る。

もちろん、金額面なのだけど…… 今度はこんなことがないようこそ、物価とか貨幣のこととかレイアスに教えてもらおうと心に決めつつ「あれなのですぐ」と硝子越しに指差す。

「男物ですよ？」

「あ、え……ええと、その……」

私が個人的に誰かに贈り物というのは拙いだらうか？ 拙い、よ  
ね。

「私が……身につけるのです……」

『』によじよど、消え入るよつた声で續ければ「分かりました」と素直に頷いてくれた。

それに、ほつと胸を撫で下ろしたのも束の間「他言はしませんよ」とこめかみに唇が寄せられる。くすぐったくてびくりと肩をこわばらせても、腰を取られてるので逃げ場がない。

ほんつとおに人選ミスだ。

顔から火が出そう、といふのはきっとこうこうときにはこうのだろ  
う。

「それで、貴女の『小遣い』で買つのですよね？」

すつと姿勢を正して私が渡した財布を受け取つてくれる。

中身を確認しつつ「貴女を射止める男には興味がありますね」と口にして、私が否定しようとすればするりと抜けて店に入ってしまった。

私は慌ててその後ろを追い掛ける。

結局荷物も両方彼に持つてもらひ形になつて申し訳なく思つけれ

ど、普通のことだといわれてはそれ以上は食いつけない。

「あの、やはり別のものに……」

「ことこのこと彼の隣りを歩きつつ袖を引けば彼は苦笑しつつ答えてくれる。

「大した額ではありませんし、気にされるなら次回またいたいときにも返済してくれば良いですよ」

「ですが」

そんないつになるか分からぬし、私は私のお金で彼に贈り物をしたかったのに。

そう……少しばかり足りなかつたらしくて、私に聞く前にあつさり彼が立て替えてしまつたのだ。この人にだけは借りを作りたくな！ とこゝうタイプなのは、この短時間で骨身に沁みたといつのこと、情けない。

はあと溜息を重ねても、どちらかといえば宰相閣下は「機嫌そつだつた。

その表情を盗み見て、私は神殿に戻つたら先に前借をせらひつて戻してしまおうと心に誓い、なんとか暗雲を払つた。

そして、レイアスが戻る前に神殿に戻るつと帰路を急いだら、神殿には既に宰相閣下の迎えが来ていて、彼はそのまま回れ右をして國へと戻ってしまった。

私への挨拶もそこそこに帰路に着くその素早さは田を見張るものがあつて、私は今日買つたものを胸に抱きぼんやりと見送つてしまつた。

……はっ！返しそびれた。

気がついても後の祭りだ。

## 第十四話

\*\*\*

次の夢が楽しみすぎて、目覚めと同時にほくそ笑んでしまった。

我ながら情けないといつか、格好悪いといつか……逃げすぎだと  
思う。思うけど……ちらりと隣を見ればまだお休み中。もつとまた  
不機嫌そうに眉を寄せられるだろうから、今朝はやめておひつと私  
は静かにベッドを抜け出した。

お弁当も良し。

朝ごはんも良し。

今朝もちゃんと準備完了。

問題ないと思つ。あとは子どもが起きてきて「いつてきます」を  
聞けば大丈夫。というか、子どもにこそ朝ごはんくらい食べてもら  
いたいのに、はあと吐いた溜息を聞く人も居ない。落ち込みそうにな  
つたら、子どもがばたばたと一階から降りてきて、そのままの勢  
いで外に出て行く。

いつてらっしゃいと手を振れば元気に「いつてきます」と答えて  
くれる。

子どもは良いよね。

これからがいっぱい詰まつてる。

出合つものの殆どが初めてで、全てがキラキラだ。

嫌なことや死にたくないこともあむと想つたが、それでも、やつぱりその全てが初めて。

初めてせびれじめで溢れていたと想つ。

私に残されているものといえば、その子どもの成長を見守り、年老いて生き終わるのを待つだけ。それも……

「どいて」

「あ、ごめん」

じんな夫と。

玄関先で立ち去ってしまった私に心底邪魔臭そうにそいつて、脇をすり抜けた。ぽんやりと靴を履く姿を眺めて、腕時計の時間を確認してくるのを見詰める。

目が合わないな。

「ねえ」

「んー」

「キスして」

嫌、はこくらなんでもないよね？ 雨氣を振り絞つて告げたら、

ここ暫らく振りにまともに目があつた。

じめじめと期待と緊張に胸が高鳴る。

さすと胸元で握り締めた手に力が籠る。

「すれば？」

「私は、貴方からして欲しいの」

「したいならすれば良いだろ。まひ」

つ、と顎を上げられてしょんぼりと気分が萎える。

「私からじやなくて  
「じゃあ、行くから」

あつさりと切り抜けられて、玄関のドアは外界との接触を完全に断ち切るように、すうっと音もなく閉じた。一人きりで残された場所は、例え玄関でも私には広すぎる。

夢が幸せであつただけにその反動は大きい。  
現実なんてこんなもんだ。

夢の中の人たちも、まさか私がこんなに誰にも相手にされないクズだなんて思わないだろ？。レイアスも氣の毒だな。

自嘲的な気分になつたけれど、今の私には仕事があるし、ここでぼんやりもしていられない。

私は気を取り直して、片付けと身支度を始めた。

……

「おはようござります」

私は出来る限り元気そうに挨拶して、お店のドアを開いた。

先に店に入つていた店長さんは「おはようございます」と返してくれたけど、少し元気がない？のかな。そう思つて、ふと「店長さん？」と声を掛ければ次に顔を上げたときにはいつも通りだった。荷物を裏において戻つてくると

「外の掃き掃除お願いしますね」

と簾と塵取りを渡される。

赤茶色とクリーム入りの可愛らしいレンガで敷地内は囲まれている。

街路樹から落ちてくる葉っぱ掃除とか、小さな花壇の手入れとかも仕事の一つ。細かいところは簾では取りきれないから塵取り片手にしゃがみ込んで、拾つていぐ。

やつぱりやるからこまきけんとやるべきだ。

「はあ」

それにしても現実ではキス一つまともに出来ないなんて、情けない。

やつぱり私は自分でも気がつけないところが汚れてるのかもしないな。教えてもらわないと分からぬけど、それを今教えてくれる人は居ないし……癖のように肩口に鼻を寄せる。

この季節愛用している香水の香りしかしない。

やつぱり自分では分からないな。

仕事も長く続けられないかも、親しくなつたらきっとそれに気がつくだろうし、そんな人雇つていたくはないだろう。

本当は私なんて家の中で生き終わるのを、ただ漠然と待つているだけがお似合いのかもしねい。

けど、でも……とりあえず、今日は頑張ろつ！

すつと立ち上がつたら背後に店長さんが居たらしく、「うわっ」と短い悲鳴が聞こえた。

「げ、元気ですね？」

「あ、え、ええと、すみません」

「そんなに几帳面にしなくても大丈夫ですよ。ほら、」

いつて指差される。

掃いたそばからはらはらりと枯葉がまた舞い降りてきていた。う、と息を詰めた私に店長さんは「キリがないんですよ、この時期」と笑う。確かにそうだ。

「それで、あの、何か？」

「ああ。水遣りもお願ひしようと思つたんです。これジョウロ。水道は建物をあつちに回つた隅にあるので宜しくお願ひします」

「はい、頑張ります」

「……えーっとほどほど……水浸しにしちゃ駄目ですよ」

アルミニ製のジョウロを受け取りつつやうにねば、くすくすと笑われてしまった。

私、なんか各所で笑われてばかりだな……恥ずかしくなつて俯けば「是非頑張つてくださいね」と声を掛けて店長さんは店に戻つていった。

……あ、パンジーになつてる。

さてと氣を取り直して花壇を見れば、小さなパンジーが整然と並んでいた。

パンジーは長持ちするし、見た目にも可愛いし、種類もあるし、良いよね。私もこの間家の裏に植えたところだ。

一通りの用事が終わつて店内へ戻ると、店長さんがお茶を淹れてくれていた。

「お疲れ様」

「あ、え……つと、すみません、あ、いえ、ありがとうございます、『じぞこま  
す』」

客商売なのに、あまり上手く話せない。

直ぐに赤くなってしまつ顔を隠すように伏せれば、店長さんはそ  
んなこと微塵も気にした風もなく、早くじぞこまと呼んでくれ  
る。

私がその手招きに招かれて歩み寄れば「これ見て」といついつカ  
ウンターを叩くのでふと視線を落とす。そこには、沢山のインデッ  
クスの付いたノートがあった。  
どうぞと渡してもらうと素直に受け取つてぱらぱらと捲る。

「片手間に作つたので、あまり綺麗には纏まつていなかもしれな  
いのですけど」

「はい」

「今店にあるもののリストです。商品タグに記号があるのでそれに  
合わせました。簡単な説明を書き込んでおいたので、その程度説明  
してあげれば大抵のお客さんは納得してくださると思います」

ここにことしあわれて、私は手の届く場所に在つたスタンダラ  
イトのタグをぴらと見る。

そしてノートを捲る。

該当箇所には、年代とか様式、商品の略歴、手入れ方法などが書  
いてある。

「それ以上聞きたいお客様は、貴女にはまだ荷が重いでしょ、  
僕に遠慮なく回してください」

「凄いっ！　凄いですね。わざわざ作ってくれたんですか」

思わず声が大きくなってしまった。慌てて閉じたノートで口元を隠した。

恥ずかしい。

「在庫管理はパソコンでもやつてるんですけど、基本手書きじぢゅうんです。これにも出番が出来て良かった」

「こいつとこいつって私の手からノートを抜き取ると最後のページを捲る。」

「店内図なんですけどね、このカウンターのあたりを中心にして……」

「この辺からこの辺と店長さんの指先が動くのを田で追いかける。」

「あまり金額的なことはこいたくないですけど、まあ、そこそこ値の張るものです。こいつはレプリカ、あとはこいつちが知り合いの工房で作られているハンドメイドです。少しスペースを貸しています」

私はこぐくと頷いた。

「暇なときにでも眺めていると良いと思います。もつと専門的なものは家にありますから声を掛けえてください。持つてきますね」

私は尚こぐくと頷いて、再び手元にノートを受け取つてこぐくと頷いた。

「首折れちゃいますよ？」

首肯を重ねる私に店長さんが面白そうにそういうて、冷めないうちにマグカップを二つんつと弾いた。

そして私はまたこくこくと頷く。  
重ねて笑われてしまふけど気にしない。

だつて、少し感動した。  
何か書き物をしているのせうじゆうじ見ていたけど、じれだと  
は思わなかつた。

私が役に立たないからだとは思うけど、一人で頑張れねばと思つていたから……凄く助けられた気分だ。

## 第十五話

「ああ、そうだ。それから、その椅子ちょっと貴女には高いですか？」

「え？」

「いえ、丁度貴女の腰辺りに来てしまつから、座り辛いのかと、以前は気にならなかつたのですが……立ちつ放しでは辛いですし、見たら固定で調節が出来なかつたので、新しくしたほうが良いかとふと思つたんです」

「どうですか？ と重ねられて、慌てて平氣ですと答える。

「この間は座り辛い理由があつたからで……大体、カウンターチェアは高めだ。これは普通だと思つ。

「そう?」

「はい、平氣です。つと、えーっと、奥様は背の高い方だつたんですね」

ひつ、私つてば話の逸らし先が最悪だ。

思わずぽろりと出でてしまつて内心慌てたけど、店長さんは「そうですね」とうなづいて考える。

「ヒールを履くと僕とそんなに変わらなかつたですよ。七十五くらいあつたんじやないでしょうか？」

「うわ、モデルさんみたいな方だつたんですね」

つて、だから、普通別れた奥さんの話しなんて振らないよ。私の馬鹿つ。

「やつですね。美人さんでした……ひと、でしたといつと怒られた  
と思つので、です。かな」

「ハーヒツと毒なくそういうこつてくれる店長たとその奥さんは、ビ  
ジが擦れ違つてしまつたんだろう。

「うやつて何の棘もなく今居ない人のことを話す」ことが出来る人  
なんて、そんなに悪い人ではないと思つんだけぢ……「うちなんて…  
…なんで別れていなかの方が不思議だ。

裏表があるかないかなんて私には分からぬけど、とりあえず私  
の前で店長さんはとても良い人だ。

きつと誰の前でもそうなのだと懇いつ。

「ビハビモ」

その証拠みたいに、今日はお客さんが多い。

それも女の子が中心。年齢層も広い。

学生さんも今日はテスト期間とかなのか帰りが早いらしく制服姿  
の子も目付く。

そんなお客様さんと話しこんでいたようだから、お茶をお出しする。  
紅茶が殆どだつたから上手に淹れられたか心配だけぢ、噴出する  
ぞ拙くはない、よね。

かちやかちやとソーサーを握る手が震えてしまつ。

「ありがとうございます」  
「はー」

にこり……出来たかな？ 急に店長さんにてお前で呼ばれるから吃驚した。

それが、フェイクの指輪と同じよう、お客様との間に作るほんの少しだけの壁だといつことは分かったから、出来る限り普通に応対したつもりなんだけど。

動搖ばれてないと良いな。

ちらりと運んだカッピを見て、カウンターの裏にあるマグを思い出す。

一客五千円以上するカッピだ。いつも店はそういうことに見栄を張らないといけないんだと店長さんは私の驚きに笑いながら答えた。

客商売っていうのは大変なんだなとつくづく思つ。

私が以前働いていたのは事務職だから、お客様も業者の人が多くつた。

だから、対応も質も全く違う。

どうしても外に出し切れない内向的な私には不向きなのかもしないなあ。と感じると悲しい。でも、このお店は好きだ。もう結構、といわれるまでは頑張つてみよつと思つ。

「すみません、これ、つけてみたいんですけど」

ぽんやり考え方をしていたら、ショーケースの前から声を掛けられた。

私はカウンターの裏側に掛けてある小さな鍵を握つて、ぱたぱたと歩み寄る。

制服姿だから学生さんだと思つ、高校生くらいの女の子が「これです、これ」と口を叩く。

開錠しながら確かこの辺は値の張るものだなーとか思いつつ硝子を開いた。

アクセサリー用のトレイに商品を取り上げるとさすがに、ちりと見えた値札は七万になつてた。私でも即決するのは無理です。

でも、女の子だもん。  
ちょっとつけてみたい気持ちも分かる。

私はそのあともいくつか、いわれた指輪を載せて彼女の前にどうぞと並べた。楽しげに次々と指に嵌めていく姿を見ていると、からんからんと扉が鳴る。

店長さんが相手していたお客さんが帰つたみたいだ。

「やつぱりこれが一番可愛い、でも大きい」

う。

値段とか気にしなくて良いのかな?

私は気に入つたところのを見てちりと併んだ。

「ねえ、おばさん」

「え、はい」

「ごめんなさい、えーっと、サイズとか直せない?」

別におばさんで間違いないし、わざわざ謝られると私が気にしているようだ。

変な気遣いをさせてしまつたなと思いつつ「失礼しますね」とそつと指に嵌めたままになつている手を取り指輪に触れる。

このくらいなら直さなくてもいけると思うし、それに、いわゆる

「 一匹もの直しせい」では出来ない。……「もう少しもとこつのはう外注するのだけど。

「 これはお直し出来ないんですよ。ところとは、貴女に出来づべき口ではなかつたところとですね」

すつと私の隣りに立つた店長さんが、すつと彼女の手を取りあつさり抜き取つてしまつ。

え、と彼女と同時に声を上げやつになつたけど、私はからうじて飲み込んだ。

「 うわなう貴女に良くお似合いですし、サイズも丁度良い」

物凄くスマートに彼女の指に新しい指輪を通してしまつ。  
接客に慣れているのか、女性に慣れているのか疑わしい感じで。

そのあとその子は機嫌良くなれをお買い上げして帰つていつた。  
出していたものに比べればおむちや同然だけど、あれだつて七千八  
百円したのに迷わないんだな。

今の学生はお金持つさんだ。

そんなことを考えながら出していた指輪を一つずつ十寧に並べな  
おす。店内も波が引いたよう静かになつた。

「 手伝いましょうか?」

「 いえ、大丈夫ですよ。でも、良くあの子のサイズが分かりました  
ね? 職業柄的に分かるようになるんですか?」

最後の一ひとつはあの子が気に入つっていたものだ。

確かに綺麗だよねと、光に翳して眺めつつ気軽にそう問い合わせ掛け  
ば店長さんはくすりと笑いを零した。

「あれね、簡単に直るんですよ。ええ、とコレです」

ひょいと傍にあつたアクセサリーシリーから取り上げて私に見せ  
てくれる。

「Jのトップの部分とリングの部分がこうずれるようになつていて、  
好きにサイズが変えられるんです。ですから、彼女の指に入れたら  
きに軽く力を入れてサイズを合わせました」

「これにこつと簡単に告げる。

でもそれをこともなくあつさつとこなすあたり、流石というか、  
私には無理な芸当だと感心しつつ思つた。

「それにそれは貴女の方が似合つと思ひますよ」

ひょいと私の手から残つたリングを取り上げて、私の指に入れて  
しまう。

サイズも確かにすこんつと抜けてしまうようなものではないし、  
こんなもんだらうなと思つ。思つけど  
……。

「そういえば、貴女は指輪されてませんね？ ピアスもネックレス  
もしているのだからアクセサリーが嫌いというわけではないでしょ  
う？」

私の手を取つたまま、指に嵌つた指輪を撫でつつやうじついた店長  
さんに「ああ」と頷く。

「水仕事をするのに邪魔になるのでいつの間にか指輪はしなくなりました。気が向いたときだけ私はつけます」

「じゃあ、ご主人はずつとつけてないんですか?」

「彼はサイズが変わつたらしくて、割と早くつけなくなつたから、私も気にしていません」

「じ」かぽんやつと店長さんの指先を眺めつつ淡々と答える。別にその通りだから嘘でも何でもない。

「なるほど、では幸せ太りしてしまつたんですね」

「え?」

思わず見上げた私に店長さんも「え?」と重ねる。  
私は一体どこに反応しているんだろう。

一瞬迷つたら、店長さんが、はつと気がついたように「すみません」と私の手を離した。

「い、いえ、大丈夫です。」めんなさい。えと、そうじゃなくて、  
そつだつたら良いなと思つただけです」

はわわつと、慌てて指に入ったままの指輪を抜き取りながらそつ  
いた私に「きつとそうですよ」と穏やかに返されると、ずきりと  
胸が痛む。

何も知らないくせに。

私の、私たちのことなんて何も、知らないくせに、そんな有体の  
言葉を掛けるなんて酷い。

酷い……けど、店長さんは普通の言動だ。

普通みんなそんな感じでいってくれて

「やつですよ、ね。ありがとうございます」

と私も有体に返す。

きりきりと胸が痛んで仕方ないけれど、表面上笑顔を作る」とこも私は慣れている。

その反応に少しだけ店長さんは不思議そうにしたけれど、直ぐにその色を消して

「それ、気に入つたら買ってあげてください。安くしますから」

と売込みして、裏に居ますから何かあつたら声を掛けてくださいね。と自宅へと戻つていった。

その後姿を見送つてから、私はやつぱり丁寧にショーケースに指輪を戻す。

本当は結婚してから付き合いが増えて外食が多くなつた。その不摂生で太つたんだと思う。

私はその逆で、一通りのダイエット成果もあつたと思うけれど、一人で食べるのが面倒臭くてあまり食べなくなつたから結婚前より痩せてしまつた。

でも、そんなことに彼は気がつかない。はあとやつぱり溜息が零れる。

溜息は癖になるからやめたいのに、もう既に癖になつてしまつた。

またも重ねた溜息のあと、ふと視線を上げるとさつきの指輪が目に入る。

中央の黄色っぽい石は可愛い。

黄色人種だからか肌の色に馴染む気がする。

でも……この金額は安くしてもらつても、ぽんつと買えるものではない。

暫らくはじりじりて眺めているのが関の山だらう。

それから、暫らくはお客さんも引いてほつりほつりだった。

のんびりと資料を捲つたりしていたのだけれど、もうそろそろ終わる時間だなーという頃に、どことなくセレブっぽい雰囲気をかもし出した女性が声を掛けてきた。

名前を聞けば、店長さんに頼まれていた取り寄せ商品を受け取りに来るという予定の女性だ。私は少し待つてくださいねと、裏をがたこととしていたら、声を掛けられて扉の隅から顔を覗かせる。

「あの明日見さんから直接説明して欲しいのですけど」

一応取り扱いの説明も一通り聞いているし、私でも説明くらいは出来るのだけど、その顔を伝えても納得はしてもらえなかつたから、私は仕方なく内線を鳴らした。でも、どういうわけか電話に出てくれないから、少しだけ待つてもらつて、慌てて店長さんの自宅のほうへと向つ。

「…………らね  
別に、…………から、いこと……」

誰かお客様さんが来ているようだ。私は許してもらつているから直接家に入つてダイニングへと続く扉軽く叩いたけど、零れてくる話し声で聞こえなかつたみたい。

「俺だつてね、あんまり…………つて、あれ？」

かちやりと扉を開いたところで店長さんと田が合つた。どうかしましたか？ とわたわた私のところへ歩み寄つて来てくれる。お客

さんは背の高い女人で、店長さんの動きに合わせて、ぱりくと振り返った。凄く華のある美人だ。

「もしかして、時間？ すみません、ちょっと話しこんでしまっていて、」

「あ、いえ、違います。あの、藤沢さんがいらっしゃって、店長さんからでないと受け取れないと……」

私が至らなくて申し訳なことじょんぱり告げれば、店長さんは「ああ」と苦笑した。

「気にしないでください。では、貴女はこのまま帰つて構いませんよ。お疲れ様でした」

ふわりと一瞬だけ俯いていた私の頭を撫でた。え、っと私が問う間もなく忙しくダイニングにいた女性にも話しかける。

「それから、小夜ちゃんはここを荷物置き場にしない」と、分かつたよね？」

びしりといつたつもりだったけれど、どこか優しげな声だ。「はいはい」と彼女が頷いたのを確認して、店のほうへと戻つていった。

……

なぜ私は今このよくな状態に置かれるよくなつてしまつたのだろう……。

物凄く不思議だ。

物凄く不思議で物凄く強引な流れによつて、私はどうこうわけか、店長さんの元奥さんといつ小夜子さんとカフュに座つてゐる。帰つ

て良いといつてもうらえたし、邪魔になつたら悪いからと思つて、そのまま踵を返そつとしたのに。なぜ。

「レジのワッフル美味しいのよ?」

と勧められるがまま注文までしてしまつた。この私の流れ体质なんとかしなければ、変な宗教とか勧誘とかそういうれば、良く引っかかっていたことを思い出した。商品返品に骨を折つたものも沢山あつた。

「あの、私夕飯の支度をしないといけないので」

「ああ、そうなの? この近くにねどつても美味しいお店があつてテイクアウトも出来るのよ」

頑張つたのに、即躊躇いた。ええと、そういうことではどうしようによると彼女は軽く眉を寄せて「何? その程度も許せないようだ! 那なの?」と凄む。綺麗に整つた表情は軽く不快感を表しだけでどきりとする。

私は「そんなことないです」と慌てて答え、今夜はそうしますと頷いてしまつた。

まあ、実際私の料理に興味なんてないし拘りもないだろうから、寧ろテイクアウトのほうが美味しいと喜ばれるかもしれないくらいだ。

子どもも家でテレビでも見ている時間だと思うから、そんなに心配はしない。

でも続く話題がないなーと思つていたところで、注文していたワッフルが届いた。ふんわりあつたかなワッフルに冷たいバニラアイスクリーム。ベリーソースが彩を添える。彼女は珈琲を頼んだだけだ。

「早く食べてみて、アイスなくなっちゃうわ」

「ここに」と嬉しそうにいわれて私は口に運ぶ。ほわつとした暖かさとアイスの冷たさがなんともいえない食感と味わいになって本当に美味しい。なんだか、甘いものをこうしてのんびり食べるなんて凄く久しぶりで、ちょっとした贅沢。幸せかもしれない。

「あの人紅茶派なのよね。貴女はどうちう？」

「え、私はどちらも美味しいです」

突然振られて手を止めると、食べて食べてと勧められる。

「仲良いですよね？」

他に共通の話題もないしなんとなく店長さんとの話を持ち出した。

「そうね。別に嫌いじゃないし、腐れ縁だし、幼馴染っていう奴で切っても切れなくて」

そういうて口先を尖らせるところがなんとも可愛らしい人だなと思う。凄く綺麗な人だから私なんかからすれば近寄りがたい人なのに、彼女はその壁を感じさせない。人を環に溶け込ませる天才みたいで、凄く自然に話しも出来る。

「幼馴染ですか、なんか良いですね」

自分を知ってくれてその上嫌われることがないなんて奇跡的だと思う。それなのに彼女は「ええ」とまた眉を寄せた。

「最悪よ、どのくらい前からのあたしを知っていると思うの？ 知  
られたくない」とのほうが多いし、理解しないで欲しいことのほう  
が多いのに、なんでも知つてますーって顔されるのよ。まあ、付き  
合いやすいといえばやすいけどね」

「…………どうして別れたんですか？」

あ、ついぽろりと出でてしまった。

だつて、店長さんに対しても彼女にしても、お互に険悪なところ  
なんて微塵もないし、今も普通に夫婦生活しているといつても問題  
ないと思う。

仲良しでSMにでもなりそうな一人だ。とはいって、それは私の個  
人的主観。

慌てて「すみません」と謝ったけど、彼女はにこりと微笑んでバ  
ッグから煙草を取り出して灰皿を寄せる。「良い？」と私に了承を  
取ってくれるから、どうぞと頷けば、慣れた仕草で火を点けた。

## 第十七話

「お子さんとか居ないんですか?」「居ないよ」

ふうと緩やかに紫煙が上がり天井でゆっくりと回っていたシリーズグファンに搔き消された。

「あれ? もしかして紗々も離婚したいの?」「え! いえ、まさかそんなつ」「そう? なんか今羨ましそうな顔に見えたから。子供も可愛いなれば私だつて……みたいに見えた」

あつさりはつきついここと叫ばれて、うつと詰まる。その通りと頷くことは出来ないし、そんなことないと思いたいけど、時々は感じてしまうことだ。子は鎌というけれど、私たちにとってただの楔でしかないのではないかと思つことがある。

「ああ、泣かないで」

つゝと彼女の綺麗に整えられた指先が私の耳元にそつと触れる。顔を上げれば、軽く身を乗り出して近づいていた彼女と耳が合つた。

ふわりと頬が熱を持つ。  
女人にまでドキドキする私おかしい。

慌ててまた俯いて泣いていません。と答えたけど泣きそつだつたのは本當だ。家で一人で居たなら確實に泣いていた。

「我慢するの、辛いわよね？　でも、可愛い顔も、美味しいものも台無しになっちゃうから、もう少しだけ飲み込もうか？」

幼い子を諭すようにそりつて、良い子良い子と前髪を撫でて小夜子さんは椅子に座りなおした。

「でもね、あたしたちはそれで別れたのよ？　おかしいと思ったのよね、いくらやつても出来ないし」

あわわっ、彼女はあつけらかんとしそぎだった。

……

その日私はふらふらと家路についた。

小夜子さん。強烈な人だつた。

でも嫌悪感を抱くことは出来ない可愛い感じの女性。

ケータイのメールアドと番号も交換してしまった。

最近は、子どもの学校のお母さんたちとくらいしかしなかつたら、凄く嬉しい新鮮。私を名前で呼んでくれる人との新しい関係。嬉しい。

……名前、か。

この家の中で私の名前を呼んでくれる人はもう居ない。  
門扉に手をかけて家を見上げる。

子どもが帰っているから門灯も玄関灯も点いていてリビングからの明かりも洩れ正在する。家全体を眺めて、溜息を重ね、きいと門扉を開いた。

「ただいまー」「おかえりなやーーー！」

ぱたぱたと子どもが迎えてくれる。

ぱすつともう私のお臍くらいまでは大きくなつたこの子を僅かな間でも、楔や鎖のように思つたなんて、私、母親としても最低だな。ちゃんとお留守番出来たことを褒めながら私は家に入り、テイクアウトしたご飯をお皿に盛りなおした。

＊＊＊

なんだかぱたぱたとした一日だつたし、最後に小夜子さんと絡んだのが印象的過ぎて今夜は夢なんて見ないんじやないかと思つたけれど、私は夢を見た。

もちろん例の夢。

そして、手の中にはまだパウンドケーキがある。運が良いことに続きだ。

私は思わず綻んでしまつた顔を慌てて隠し、なんとか無表情を装つた。

部屋に戻つて一人になるまでは我慢しなくては、私は『神子姫様』なのだから。形だけでも整えてあげないと信者の方と参拝してください方に失礼だ。

ペチペチと頬を叩いて気を取り直す。

姿勢良く、真っ白な回廊を進み自分の部屋を目指した。

「姫様」

いそいそと私室を目指してくると送り出してくれた信者に出会つた。

彼女は、私の姿に足を止め手元を見てこいつこいつ、「良い買い物が出来ましたか?」と微笑む。私は気恥ずかしく感じながらも、嬉しそうに声を掛けられては無視も出来ない、同じように足を止めてお礼を告げれば恐縮された。

「あ、あの」

そのまま挨拶だけで通り過ぎるべきかなと思つたのだけど、そう出来ないことを思い出した。少し彼女との距離を詰めて小さな声で話し掛ける。

彼女は微かに頬を染めて私へ耳を傾けてくれた。

「今日私が一緒だった方が、どちらの方がご存知ですか?」

「はい、存じております」

「あの、また、お手伝いをさせていただくので、その……今日、ちよつと足りなくて立て替えていたいた分があるのです。それをなんとか返金して置いてもらえませんか、必ずお返しするので……」

ふわふわとあまりの情けなさに頬が染まるのを隠すことも出来ずに、私がぼそぼそと告げる、彼女はいくらですか? と重ねる。続けて、そつと金額を耳打ちすれば眉を寄せた。

「その程度ですか? それを貸すと……」

私がじりじりと頷くと、彼女は私の手を両手で取つて「姫様」と

顔を覗き込んでくる。首を傾げればゆっくつと続けた。

「」けりに来られた方は、癒しを求め傷付き痛みを抱えたものです。しかし、帰路の際は違いますよ。」こ注意ください。紳士然としていましても、裏がないとは限りません。彼は癖のある方で国外で彼を好漢と呼ぶような人は居ないと聞きます

広い意味で酷い噂だ。

そこまでは悪い人ではないと思つけど、つと、これが駄目だといわれているのだから、ちゃんと聞かなくては。私は必死に「」へと頷いた。

「その金銭の」とは、わたくしどもが片をつけておきままで、どうかお気に病みませんよつて

「」面倒をお掛けしてすみません。次がないよつて気をつけます

「」めんなさいと続ければ、優しげな笑みを向けられた。

「わたくしどもは神子姫様の味方です。頼つていただければわたくしども、少なくともわたくしは嬉しいです」

……味方。

か、なんとなくその単語に胸が温かくなつた。

本当の私のことなんて知らないからだらうけれど、誰かに無条件でそういうてもらえるなんて幸せだ。私はもう一度丁寧にお礼を告げて今度こそその場をあとにした。

## 第十八話

そして、自分の部屋だけじ、なるべく音が鳴らないようひそひそと扉を開いて、室内へと身体を滑り込ませる。

「そんなにこそこそ戻らなくても良いんじゃないですか？」

そつと扉を閉じていたら背後から声が掛かって、私はびくんと肩を強張らせた。

でもそれは聞き馳染んでいる声で、私が待ち望んでいた声だ。

私はここにふわふわをなんとか押さえて、深呼吸。ゆっくりと振り返り、「いらっしゃい」と微笑んだ。

「予定より早く着いたんですね」

ここにことそういうながら歩み寄る。

レイアスは窓辺に立つたままワイングラスを傾けていた。

色からして葡萄酒かな？　ここでお酒を飲んでいる人は珍しい。実際彼が飲んでいるのも初めて見た。

待ちくたびれるくらい待たせてしまっていたのかもしれない。申し訳なかつたなと思いつつ。私は彼が瓶とグラスを置いているテーブルにパウンドケーキと綺麗にラッピングされた箱を置いた。

「すみません。少しでも早いほうが良いかと思ったんですが、そう思つたのは俺だけみたいですね」

「……？」

いつになく棘のある言葉に首を傾げる。

そんなことない口にしようと思つたけれど、あらと彼を見上げても視線が絡まない。その様子に不必要なことは口にするべきではないかな？と勝手に判断した。

その証拠のように、私が何かいたげにしていることは興味も持たず、彼は手に持つているグラスを睨みつけているだけだ。

空気が重たくて息苦しい。

どうしてそんなことになるのかせっぱり分からなければ、彼は疲労困憊しているように見える。無理を押してここまで急いでくれたのだろう。

もつと早く戻れば良かった。

「え、っと、その、お茶にしませんか？ ケーキを買って帰ったんです。冷めてしましましたけど、まだ柔らかいですよ」

なんとかいつも通りそう続けてにっこりしたつもりだけど、ちゃんと笑えたかな。緊張して、肌の表面がぴりぴりと逆立つ気がする。

「…………そうです、ね」

そういうて彼はグラスをテーブルに戻し溜息を落として頷いた。やはり疲れているようだから、淹れてくれるというのを断つて先にソファに座つもらひ。私は少しでも疲れが取れると良いなと思い丁寧に紅茶を淹れて、ローテーブルまで運んだ。柔らかなソファに腰を降ろしかけて、はたと気がつく。

「すみません。パンナイフがありませんね。貰つてきますよ」「必要ないですよ」

「ですが大きいですよ？」

いつて腰を上げかけるとぐつと彼に手首を掴めた。  
痛いくらいで、確実に拘束するだけの力が掛かっていてほんの少し心がざわつく。

「ちゃんとカットしてあります。直ぐに食べると思ったのでしょうか？」

ぼすんっと彼の隣りに腰を降ろして、指先で包みを開いていた彼の先を見る。

確かに小売されているサイズにカットされているみたいだ。これならナイフは必要ない。フォークが欲しいところだけど、まあ、なぐても良いか。

「本当ですね」

私は袋の一辺をペリペリと破つて中身を丁寧に取り出した。

沢山のフルーツが入つていて美味しそうだ。そつとお皿に載せて

どうぞと彼の前に置くと、微妙に眉間に皺が寄つたような気がする。  
「あの、もしかして、甘いものが嫌いですか？ 好みが分からなかつたので、とりあえず、自分の好きなものをと思ったのですが……すみません」

浮き足立つて、ふわふわしていた気持ちが一気に萎えた。  
きつと食べてもられないだろうケーキに心中で小さく詫びて、  
そつとテーブルの中央へ少し追いやつた。

「あ、えつと、私着替えますね」

なんとなく沈黙が重たくて、私は腰を上げようとしたら再び押し留められる。一体なんなんだろ？ 意味が分からない。意味が分からなくて彼を見詰めれば、彼はちらりとテーブルの上を見てから私を見て告げる。

「貴女は食べたほうが良いんじゃないですか？ バイカのお偉いさんからの贈り物なのでしょう？」

「え、違いますよ。これは、私が……あ、もしかして、街で見かけましたか？」

やつと思い至つて問い掛けた私に、彼は一瞬息を詰めてからゆっくつと静かに口を開いた。

「……ええ、見かけました。随分と親しげで楽しそうでしたね」

苦々しく睨みつけられて告げられると、心臓がきゅっと縮んだ気がする。

別に後ろめたいことは何もない、何もないけれど確かに見て面白い図ではなかつただろう。

「いえ、楽しいとかでは、その、私は困つていただけで」「拒絶はしていないようでしたけど。拒絶しないところとはそれなりにその状況を楽しんでいた。そういうことでしょ？」「ち、違います。楽しいなんて……」

楽しかったのは買い物だ。

彼が来てくれることがあらかじめわかつていて、そのための準備を整える。そのことが乐しかつただけだ。

楽しかった。

喜んでくれると思つたから。

笑つてくれると、そう、信じていたから。

でも、実際彼はにこりともしない。にこりともしないどころか、眉間から皺が一向に取れる気配もない。

「それに俺が今田っこに来るのは前もって知らせていたはずです」

それまで待つてもと苛立たしげに続けられて私は自分の膝を見つめる。

このままは嫌だと思い、意を決して顔を上げ口を開く。なんとか、分かつて欲しくて……

「あの、だから、その……分かつてていたので、貴方に何か用意して差し上げたかったんです……。それ、で、私は街に明るくないですし、貴方以外に頼める相手が居ませんでしたし。だから、その、「なるほど、それで前の晩寝た相手におねだりしたわけですね」

う。

おねだりなんてそんな甘つたるい感じではなかつたと思うのだけど、結果的には間違つていなかつたら否定は出来ない。

## 第十九話

こんなことになるくらいなら、一人でここを出れば良かった。

誰かを頼ろうとするからることにならない。

そうしていれば彼の機嫌を損ねることもなかつたし、折角会えたのに、こんなに近いところに居るのに、こんなに遠い思いをしなくても済んだ。

私は駄目だな。

本当。

現実でも夢の中でも、本当駄目駄目だ。

「泣いています？」

大きな手が頬を撫で俯いてしまった私の顔を上げる。私は視界が揺らいでいたけれど、ふるふると首を振つた。

「泣いて、ない、です。私が、貴方に嫌な思いをさせてしまったので、私が泣いたら駄目だと……そう、思います」

「神子姫なのだから、貴女は『えられるだけで良いんです』

自分から何かなんて考へるべきじゃない。そつぱつきりと告げられ自分の浅はかさに胸が痛んだ。

『えられれば同じだけ、いや、それ以上で返したいとそんなことを思つて良いのは人並みのことが人並みに出来る人だけだ。

私は人並みのことも満足に出来ない。

ゆらゆらと視界が揺らいで彼の輪郭がわからない。でも怒氣だけは伝わってくる。

どうしようもない、自分が悲しくて情けなくて。  
そして、何より、彼に申し訳なくて……。

「そう、ですね。籠の鳥は外に出ではいけませんね……」めんない

しょぼしょぼと答える私に彼は「そうではなくて」と苦笑しく続ける。

「……ここを出れば皆人に戻ります。本来の姿になるのです。ここ  
で見せている姿が全てじゃない、貴女はここを訪れる者たちの本当  
を知らなさ過ぎる」

「「めん、なさい」

彼は廊下で会った信者の彼女と同じことをいつている。  
謝つて欲しいわけではなくてと彼は小声で呟くけれど、それ以外  
に私に出来るようなことはない。

そんな私でも頬を撫でられ引き寄せてもらえる。

でも、彼のむき出しの棘は私では取れないらしい。彼にとつて私はもう癒しの神子ではないのかな。だから、彼の苛々を取り除いては上げられない。

私は本当に役に立たない。

そう思つたのと同時に抱き締められた腕に力が籠る。  
痛いくらいのその力に私は抗つこともなくされるままになる。

「…………」

息を詰めれば、僅かに腕の力が緩くなり私は空気を求めるように顔を上げた。

「んん、……んあつ！」

大きく呼吸をする前に、口付けられあつとこいつ間に口内を乱暴に犯される。

かちんつかつんつと歯が当たつてしまつ」とも全く気にすることなく、私に息をする暇すら与えない、キスだけで全て奪つてしまわうなほど深い。

「んつ、んつ……んう」

余りに苦しくて彼の背に回した腕に力を込める。  
酸素を求めて喘げば、強く腰を引き寄せられ尚激しく口付けられる。

「…………つまだ、駄目……ゅ、るさない……っせない……」  
「は、あ…………あ」

ぎゅうっと閉じた瞳の奥がじわりと熱くなり、頭の中がくらぐらする。

つ……うつと田尻から生理的な涙が流れる、急に腕の力が緩んで解放された。つと引いた糸がぷつりと途切れると、私はぼすりと彼の腕の中に落ちた。

肩で息をして、どきどきと胸が早鐘のように高鳴る。  
同じよひに彼の呼吸も鼓動も速い。

けれど、彼はそれを一呼吸するくらいの間に直ぐに収めて私を引き離し、きゅっと唇を引き結んだあと、私の口元を手で拭った。

「帰ります

「え」

「乱暴にして、すみませんでした。俺全然人間出来ていないので今日は貴女を傷つけない自信はない。いや、きっと傷をつけてしまつから」

いつて、すっと立ち上がる。

「え、行かないでください。嫌です。傷つけても良いから届ください。私、会いたかったんです、待っていたんです。だから、」

情けなくも反射的に引き止めてしまつ。

その懇願に彼はやつと少しだけ目元を緩めた。

「俺も会いたかったですよ。貴女が好きです。とても……。だから、簡単に傷をつけても構わないなんていわないでください。俺、本当に貴女に酷いことをしかねない……」

それでも良いといい掛けたのに、彼の瞳は私にそれ以上を語らせてはくれなくて、折り目正しく踵を返して出て行く彼をそれ以上引き止めることが出来なかつた。

静かに閉まり切る扉を見詰めて、私はやつぱり泣いてしまう。でももうその涙を拭ってくれる人はいない。

こんなの現実と一緒にだ。

ずきずきと痛んで悲鳴を上げる胸も、現実と変わりない。

どうして、この夢はこんなに現実的なのか、もつとずっと都合よく、甘く緩くだらだと続けば良いのに、どうして夢まで私を裏切つてしまつんだらう。

私はただ、心待ちな時間を持て余して、どうしても何かしたかっただけ。

……私は、悪くない。

悪い。

悪くない、悪い……わる、い、悪いに決まっている。

私が悪いんだ。私が……。

ソファの上で膝を抱え丸くなる。

結局私は夢でも現実でも、誰かを好きになれば突き放される運命にあるんだろう。

せめて夢の中でくらい、痛い思いをせずにいたかったのに……私が誰かなんて選んでしまったからいけないんだ。

ぬるま湯につかっているようにだらだらとした夢を楽しんでいれば、そうすれば、誰からも一時だけの愛を注がれ、悲しいなんて思うことなかつたはずなのに……。

やつぱり、私なんかが誰かの唯一になんてなれるはず、ない。

## 第一十話

\*\*\*

..... P P P ..... P P P .....

田覚ましは正確だ。

正確に鳴り響き私を現実へと引き戻す。

普段ならもつと清々しい気分で目が覚めるのに、今朝は憂鬱だつた。バイトない日で良かつたなと私は暫らくベッドに座つたまま膝を抱える。

「何やつてんの？」

余りにも不審だつたのだらう。彼に珍しく声を掛けられた。

「ぎゅつとして」

「は？ なんで」

ハグをするのにそんなに理由が必要なのかな？

「恐い夢を見たの。凄く、凄く恐くて、悲しくて……寂しいから。

私、一人ぼっちみたい

ぎゅうぎゅううと膝を抱えた腕に力を込める。

はあと盛大な溜息が聞こえた。

私はそんなにヘンテコなことをいつてるかな？

確かに夢におびえるのは子どもくらいかもしない。でも現実に目の前でおびえている人が居るのだ。それが生涯を共にしようと決めた相手なのだから、そんな風に冷たく溜息を吐かなくともと思うと顔も上げられなくなる。

もう、何年も彼にハグをしてもらつた記憶はない。

抱きついても抱き返してもらつた記憶はない。私の背中はいつもスースーしている。

彼の手はいつも自身の身体の横から離れない。

私は今、私の勝手だけど落ち込んでいる。それをただそれだけのことでも癒せるなら、してくれても良いと思うのはそんなに私の我が儘なのかな？

「したかつたらすれば良いだろ」

またそれだ。

「して欲しいっていつてるのに……」

「もう、お前のせいで寝れなくなつたから起きる」

結局私は自分を抱えたまま、ベッドのスプリングが軋むのを聞いた。

確かに、抱きついても拒絶はされない、キスをしても重ねてくれることも応えてくれることもないけど、引き離されることはない。

それは満足値？

私、それで本当に愛されてる？

私の立位置は、いつから何に変わったんだろう。

一人では抱きつくことは出来ても抱き合つことは出来ないのに。

……

いつも通り二人を送り出して、私はいつも通りの家事をこなし、いつも通りネガティブな感じでお茶の時間に一人に入る。

何もかも上手くいかないな……。

夢だけは上手くいってたのに……今、残されているのは仕事、だけ、か……。

それもいつ切られるか分からぬもんな。

店長さん温和な人だからあっさり切つたりしないだらうけど、それもなんだか申し訳ない。

……少しでも役に立つよし、勉強でもしようかな。

あと、小夜子さんに昨日のお礼のメールして……ってそれはしないほうが良いのかな？ まあ、良いか、するくらいは迷惑にならないよね。

彼女の性格から察してスルーすることに罪悪感とか感じないでありますから流してくれそうだし。うん、と一人頷いて、私はとりあえずケータイを手にした。

ふと、彼女のことと思い出すと昨日聞いてしまった衝撃の離婚理由に頬を赤らめる。

『最初はあたしに問題があるのかなーと思つたんだけど、調べたら明日見に種がなくてね。待つても出来ないわよね。だから、もう一

緒に居る意味ないかなーって』

たかがバイトで入っている程度の知り合い度の私が、そんな個人情報　しかも普通に考えて他人に知られたくないようなことを耳に入れて良かつたのだろうか。

私の記憶装置がデジタルだつたら消去してしまってあげるのだけど、がつづり食い込んだ。これは絶対外れない。

でも子どもが得られないというだけで、別れなくてはいけない理由になるのだろうか？　そんなのなくとも上手くやっている夫婦はどこにでもいるし、子どもがいても私たちみたいに空っぽの夫婦もいる。

他にもっと根深い理由があるのかもしけないなーと思うと、なんとなくあの二人が気になつた。

『もともとね、うちは何ていうかそういう契約みたいなのがあって、それで一緒に居ただけ。恋愛感情がお互いにあつたわけじゃないから』

恋愛感情抜きで結婚した二人、か。

確かに小夜子さんはそんな風にもいつていた。

うーんつと人様のことをとやかく悩んでも仕方ない。

私はちらりとカレンダーを見る。

明日は土曜日だ　　バイトは週三日、火、木、土　この間お弁当を持つていったときは、こつそり食べようと思つたのに、ひょっこり戻ってきた店長さんに見付かって摘まれてしまった。

本当に前日の残り物を詰めただけだったから、凄く恥ずかしかつ

た。

「美味しそうですね」

有体のことをいうので、そんなにいつなら食べてみれば良いじやないかと私は可愛くない考えに至り、「どうぞ」と店長さんに箸を向けた。

一瞬「え」と店長さんが固まるから、やつぱり建前だけだったのだろうと思ったのだけど、ふと自分の行動のほうを振り返る。私はつこつかり家族にするのと同じように、自分の使っていた箸を彼に向けていた。

「す、すみません。えっと、お箸取りますね」

「ああ、いえ、貴女が良いのなら良いんですね、すみません」

と二人揃つて微妙に頬を染めて、私の箸　男性が使うには短いを使って煮物を口に運ぶ店長さんを眺めた。

店長さんはお上品に頬張つて、丁寧に食べてくれる。

彼はいつもがつがつ食べてしまうので、そんな風に味わわれると恥ずかしい。

恐る恐る「どう、ですか?」と聞けばこいつと「美味しいですよ」と返つて来た。まあ、不味いとはいえないよね。「うそり溜息。

「個人的にはもう少し甘いほうが好みです」

「え?」

「僕甘いものが好きなんですよ

いわれてみれば家の煮物はやはりよりも辛さが強いと思ひ。彼がそういう好みだから合わせていたら、毎回やつなつてしまつよくなつた。本来私は薄味が好きなのだけど……こつの間にか変わつていた気がする。

「じゃあ、卵焼をほお口に呑つかもしれません。手でもお皿わせるので甘いです」

しまつた。

「駆走様の意思表示だつたかもしけないのに、つこ申し訳ないことを口にしてしまつた。

そんな私の心配を他所に「え」と少し嬉しそうとも取れる驚き方をしてくれた。

「貰つても良いんですか?」

「……はい、味の保証はしませんけど……」

「あまり取つてしまつと、貴女の食べるものがなくなりますよ?」

「ああ、でも食べたいから半分だけ」

聞きながらも、結局自分で纏めた店帳を手は出汁巻き卵を箸で上手に半分にして、ぱくっと食べてしまつた。

気のせいでもすすんで口にじてくれてこのよつで嬉しい。  
なんかドキドキする。

テストの採点を待つてゐるときみたいな緊張感。

「本当にですね。美味しい。僕この味の方が好みです。つていうと、お手さんと同じなんですね?」

自分でいつて少し恥ずかしそうにくすくすと笑う。

でも、甘い卵焼きが好きなんてちょっと可愛いなと私は思うけどな。それに……美味しいなんて、いわれたのは物凄く久しぶりだ。お世辞でも嬉しいと思つてしまつくらいに、私はいわれ慣れていなさい。

「うど、ううで長居をしていてはいけないんでした」

「駄走様と、私に丁寧に箸を返して、当初の用事だったのだろう、リビングのローテーブルにおいてあつたパソコンを少し弄つてから店長さんはお店に戻つた。

「美味しい、か……」

そのあと続けた食事は、店長さんが味見してくれる前よりも美味しいような気がした。

明日は子どものお昼の準備もあるし、お弁当、もつちよつと可愛いものにしよう。私は一人頷いて、買い物リストを作つた。

……

買い物をして、のんびりと歩いていると突然車のクラクションの音がした。

邪魔になつたかなと慌てて避けるけれど、ここは歩道だし……。ん？と頭に疑問符を浮かべたところで、私の傍に止まつた車の助手席の窓が下がる。

運転席から、身体を乗り出して手を振るのは小夜子さんだ。

大きなRV車で、その姿があまり見えないけどあの指先には覚えがある。丁寧に塗られたネイルがとても綺麗だった。

「荷物重そうね？ 乗つていいく？」

「でも」

「歩いていける範囲つてことは近所でしょう？ 気にしなくて良いわ

ここにひとつつて、運転席から身体を伸ばすと彼女は助手席を開けた。ここまでされて断るのは逆に申し訳ない。私は、お邪魔しますとお断りして車に乗せてもらつた。

綺麗に整えられた車内には、彼女がつけている香水の臭いが染み付いている。すつきりしているのにどこか甘く優しい香り。彼女本人の私が持つイメージそのものだ。

「綺麗にしているんですね」

「やつ? 普通よ」

「そんなことないですよ。つかなんて直ぐにどうぞ」。やのうか  
々片付けるのが嫌になります」

思わず普段零さないような愚痴を零してしまったことに気がついて、慌てて謝れば、彼女はにこにこと笑って「嫌ならしなきゃ良いのよ」とあつやつ断言する。

「え?」

「だから、嫌ならしなきゃ良いの。中途半端にするくらいならそれを繰り返すだけでしょう? 面倒臭いからギリギリまで我慢して、気が向いたときに、ぱーっと片付ければ良いじゃない」

片手をハンドルから離して、楽しげにやつてしまつ彼女を、私は驚きと尊敬交じりの瞳で見詰めた。

私は自分に自信がないから、そんな風に生きるJとは出来ない。きつと回じようにその意見に賛同したとしても、きつとちまちまと片付けているだらう。だから余計に彼女に憧れに似た気持ちを抱いてしまう。

ほんやつと流れしていく車窓に田を向けて、バれない程度の小さな溜息。

そういうえば、私、家の場所も告げていないのに車は走り出してしまっていた。

「時間大丈夫?」

慌てて住所を告げようとしたら先回りしたよつと、やう問い合わせられた。

今日買い物した中に、即冷蔵庫行きとこつよつ生ものはなかつ

たと思う。大丈夫かと聞かれたらもううん大丈夫、ではあるのだけど。

「少しどライブしましょ」

答えあぐねている私の返事を待つことなく彼女はそう決定してしまった。

勝手に……確かにそういうのだけど、なんだか嫌な気持ちはしない。寧ろ潔い感じで素直に、それは良いと思つてしまつよつた雰囲気だ。

車内に流れているのは、少しだけ早いボサノバ調のクリスマスソングだつた。流れ行く景色と心地良い音楽で、ふと氣を抜くと考えるのはレイアスのことだ。

夢の中のことでの、今頭を悩ませるのは間違つてゐると思つ。そこまで引きずつては駄目だと、そう思つてゐるのに、思つてゐるだけだ。

私は彼を怒らせてしまつた。

もうこのまま夢を見ないということとは可能だらうか? 見る見ないを選択出来た試はないから多分無理だらう。やう思つと余計に次は大丈夫かと冷や冷やする。

誰かを怒らせてしまつことはとても恐い。

直接誰かに悪意を向けられるのはとても恐い。

……それが信頼している人からなら尚更だ。

「なんかさ、」

不意に声を掛けられて、私はどことなく眺めていた視線を彼女へと向けた。彼女はちらとだけ私を見て、口角を軽く引き上げる。

「すん」「ーく、悩んでますオーラを出していたと思つんだけど、あたしにいつとく?」

「え」

「あたしは、紗々じやないから、答えを出してあげることは出来ないけど、一人でそつやつて悶々としているよつは、答えに近くなつたりしない?」

……答えは出せない。

そう断言する人に相談しろというのも、ちょっと無謀な気がするけれど、何でも相談に乗るわっ! と息巻いてくる人より気軽だし、私みたいな人間には気負いがなくて楽な気がした。

「私のことじや、ないんです」

「友達、とか?」

重ねてくれた質問に私は曖昧に頷いた。

夢の中の私は私であつて私じやない。少なくとも意識が私というだけで容姿など他のものは全て借り物といったところだ。だから間違えてはいない。

私は、ありがちな『友人の話』という体で割愛して話をした。

彼女は時折相槌を打ち、黙つて聞いていたけれど、私の話が終わつたかな? というタイミングで、笑いを零した。

「…………ふ」

「え?」

「ふ、ふふ……」「ごめん。ようするに嫉妬されているだけでしょ

う？ 放つておけば勝手に熱が冷めて、勝手に元に戻ると思つたが

……嫉妬？

まさかと声を上げたくなるような単語だった。

それに相手が怒つていると分かつていて放つておけだなんて……。

「で、でも、それで本当にもう会えなくなつたりどうするんですか？」

「終わりよ。終わり。そんな小さなことで駄目になるくじらなら、早いうちに終わつておいたほうが良いと思つわ

赤信号で止まつたタイミングで、彼女はあっけらかんとやうにいつて煙草を一本抜き出すと、火を点けて銜えた。ほんの少し開けた窓の隙間から白い紫煙が外へを逃げていく。

「でも」

「無理に繋いでおいても駄目だと思つけど。そのお友達も辛いだけじゃない？ それにつられて紗々も辛いなら尚のこと終われば良いわ

「わ

私はそれ以上是も非も答えることは出来なかつた。そんな私に彼女は「そういうえば」と話を続けてくれる。

「あたしと明日見は、そういう意味であつさりしてたと思うわ。元々、利害の一一致があつたから、一緒になつただけだからなんだと思いますけど」

「利害、ですか？」

思わず重ねると、彼女は「そうよ」と微笑んでから、深く煙草の

煙を吸い込んでゆつくつと吐き出した。

「前、この話までしたかしら？　あたしは、子どもが欲しかったし、明日見はお祖母ちゃんに自分は大丈夫だと、心配要らないと見せたかった。その相手がお祖母ちゃんも知っているなら尚安心だらうってことで、契約成立。概要はそんな感じよ？　だから、その一箇所が綻びればあつさりお仕舞い」

まあ、紙切れ一枚の話だけどね。と苦笑した彼女の横顔に戸惑いの色も後悔を感じさせる何かもなかつた。

「あたしもそうだけど、あつちだつて好きな人が居るんだと思ひ。だからお互に嫉妬なんてものも無縁だつたけど」

「え？」

「だから、あたしたちに恋愛感情的なものはやつぱりなくて……まあ、良いんだけど。あいつは今もそなのかどうなのかといつとここまで興味ないし、あたしもオトナなのでそこまであいつの事情に首は突つ込まないけど、なんとなーくね……」

そのあともなんとなく色々話してくれて、私は話しの内容はあまり聞けていなかつたような気がするけど、彼女の声が心地良くて少しだけ落ち着いた。

## 第一十一話

\*\*\*

今日の大半の私の思考を支配していたんだから、一晩に寝つくることは覚悟していた。

この、変に現実的な夢は私を離してはくれない。  
そして、現実と同じように逃げることも出来ないのだろう。

夢で田覚めたら、また仲睦まじく過ぐしている。  
なんて「都合主義な展開にはなっていいない。

その証拠に、私はソファの上で田を覚まし、机上には冷め切った紅茶と硬くなってしまったパウンドケーキが載っている。

「……謝らなきや」

小夜子さんは放つて置けば良いといったけど、私はそんなことをして許されるような人間じゃない。嫉妬だといい切っていたけれど、もしさうだとしても、そうさせてしまったのは私だ。私が一人で居さえすればこんな喧嘩しなくて済んだ。

悪いことをしたのはきっと私。  
私が謝らなくちゃ。

それに、この時間にこちらで田を覚ましたのが良い証拠だ。この世界もきっとおちんとした謝罪をと望んでいるんだと思つ。

彼はどこに居るんだろう？

暫らく居るつてこの神殿に？

それとも街まで降りているのだろうか？

でもきっとここは隔離された世界だから、外部のものをおいそれと泊めたりはしないだろ？ 恐らくレイアスは街だ。

私も行こう。

そう思い立つて立ち上がつたら、扉がノックされた。ビキツと心臓が跳ねる。いつも通り私の返事を待つことなく静かに開く。顔を覗かせたのは信者の人だった。

「そろそろ、参拝の時間です」

「……え」

そうか、今日は『お仕事』のある日なのか。

私は一分一秒でも早くここを出たかったけれど、ここに居る以上、私にしか出来ないことを疎かにすることは出来ない。

「神子様」

「はい、大丈夫です。用意して行きます」

考え込んでいた私に、不安そうな声が届く。大丈夫だと重ねて、そう伝えれば「お手伝いします」と入ってきた。

この間まで当然のように全て手伝つてもらうことになんの疑問も感じなかつたし、なんとも思わなかつたけれど、少し抵抗が出来てしまつた。でもだからといって、断ることも出来ないだろ？から私は素直にお願いする。

身体を清めて、着たままになつていていたジプシー風の可愛らしい服から、ドレープのきいた、流れの美しい長衣へと着替える。

さらりとした肌触りが心地良くて私はとても気に入っている。いつもならこの内側から清らかになつていくような気がするこの襖に心が落ち着くのだけど、今の私の胸のうちは彼のことでいっぱいだつた。

駄目だ。

私は今、癒しの神子として、ここまでの遠い道のりを歩んできてくれた人たちに会つのだから、上の空では失礼すぎる。

心落ち着けなくては……そう思い、蟠りを解くためにも気になつてていることを聞いてみた。

「あの、ここには神殿の関係者の方しかいらっしゃらないんですね？」

「はい、神子様の間に訪れるもの以外は誰もおりません」

機械的に答えられて、やつぱりと得心する。

ということは、やはり私は街に降りないといけない。

そして私は、ぴったりとくつ付いていた信者の人に先に行つてもらい下準備をしてから礼拝堂へと入った。

いつもと同じように厳かな空氣の中参拝の儀は執り行われる。

このときは常にみんなの期待に応えなければと思って熱心に祈る。今日も例外なくそうするつもりで、気持ちも整えたはずだけど、やはり遠く離れた大きな扉を開いて彼が顔を出さないかと気もそぞろになつてしまつた。

「…………本日はこれで……」

良かった。

それでもなんとか無事に役目を終えられて、胸を撫で下ろす。

……キイ……

私は自室に戻ることなく、礼拝堂に行く前に誰も居なさうな一室に置いておいた服にさくつと着替えて部屋の一番大きな窓を少しだけ開け、とんと外に出た。

もちろん街に降りるため。

正面から出れば、みんなが心配するだらうじ色々な手配に気を使つてくれるだらう。そんなの私の私用では申し訳ない。

適当な場所が一階で良かった。

一階とかだと流石の私でも飛び降りる勇気はない。

そつと窓を閉めてひそかに外に出た。人の波はあつといつ間に引いてしまうのか、誰かに見付かるということはなかつた。舗装されていない道を歩くという経験はあまりしたことがないから、こんなに歩きづらうと思わなかつた。

踵が擦れて早々に靴擦れが出来てしまつ。

今は下り坂だからまだ良いけれど、帰りはこれを登るんだなと思うとちよつと落ち込む。でも、そのくらいの苦労で許してもらえるなら頑張ろう。

……街にいれば良いけど。ふと恐いことを考えてしまつた。

勢いで出てきたは良いけど、良く考えたら怒つてそのまま国に帰

つてしまつたかもしれない。だから今日もまだ姿を見せていくなくて。

私は降りてきた道を振り返る。

もう既に神殿の先っぽも見えない。前を見ても街もまだ全然見えない。

「……まあ、良いか

とりあえず、行つてみよう。

こうなつては進むしかないと、私は落ち込む気分を奮い立たせた。

……

な、なんとか辿り着いた。

街の外門までくると、既に空は茜色になつていた。

急がないと……いふとすれば宿だと思うから、私は通りすがりの人近くの宿を聞いて回つた。数がそんなに多いわけではなかつたから、定宿は直ぐに見付かつたけど……

「もう、居ないから。待つても無駄だよ」

がつくりした。

ひざが笑つてしまつくらいがつかりだ。そんな私に、小母さんはにこにこと人の良い笑顔を向けて「泊まつていくかい?」と告げてくれる。

「あのお方はここを定宿にして、熱心に神子姫様の下に通わされてい

るみたいだし、あんた少しばかり神子姫様に似ている気がするから、  
邪険にはされないよ」

「……」ことをいつこわてなんと返して良いか戸惑つ。

「私は、その」

「アタシもお目にかかったのは一度きりだけね、お綺麗な方だよ。  
なんというか人間離れしているというか、ああ、もう、アタシたち  
とは住む世界の違う姫君だね」

そんな大層なものではない。

「だからね、到底手の届かないお人だと何度もいっているのに、  
聞きやしない。男つてのは馬鹿だね」

どこか呆れたように告げた小母さんに、曖昧に微笑む。男の人気が  
どれだけ馬鹿なのか私には分からぬ。でも少なくとも彼は馬鹿じ  
やない。

その証拠に、その神子姫様とやらは「んな」とここまで足を伸ばし  
た。

私は胸元で震える指先を包み込む手に力を込めて、改めて問い合わせ  
ける。

「あの、それでは、彼は神殿に向つたんでしょうか?」

「さあ、どうだろ?。昨日から偉く不機嫌でね。聞くことも出来な  
かつたよ」

その原因は私が作つてしまつた。私はしょんぼりとして「そうで  
すか」と答えるしか出来ない。

そんな私の様子をどう捉えたのかは分からぬけれど、小母さん

はカウンターから、ずいと身を乗り出して、にこにこと続けた。

「泊まつて行きなよ。隣りの部屋を空けてあげるよ。あんた可愛らしいから、きっと気に入つてもらえるよ」

何をどう勧められているのか良く分からなければ、それを考へている余裕はない、私は丁重にお断りして宿を出た。

大体、泊まるといつてもお金を持つていない。  
これから帰りももちろん徒步だ。

はあ、と広場の噴水で腰掛けた嘆息する。噴水は今日も楽しげに踊っている。それを見る私の心は踊らない。噴水も綺麗に見えない。

……はあ

早く戻らないと私は何も持つて出でていない。明かりがなくなるとあの道は恐い気がする。そう思つのに、余りにもがっかりしきて直ぐには動けなかつた。

いつもやつてずっと擦れ違つていくのかな

よいしょと、立ち上がり本格的に日が暮れるまでに街を出た。  
門番の人には「もう無理だよ」といわれたけれど、私にはあの神殿しか帰る場所はない。だから「慣れてるから大丈夫です」と笑つて街を後にした。

慣れてない。

全然、全く持つて慣れてない。  
慣れているはずがない。

どうしよう。

歩いているうちに空が群青色になつて、煌くはずの星が姿を消し始めた。雨、とか、降らないよね。ここは基本的に晴れで、私、この夢を見始めて天候の変化があつたことはないのに。初の悪天候をこんな山道で味わうなんて……。

さつきから、靴擦れも益々痛むし、足は棒のようになつてしまつたし。

来るときと同じように後ろと前を交互に見る。

もう街の明かりも遠い。  
どっちもどっちだ。

仕方ない、歩くか……私はすきすきと痛む足を堪えて歩く。あまり長い時間止まつては、足が笑つて進めなくなつてしまつ。この道の先には神殿しかないので、参拝時間以外は殆ど人が居ないのだろう。恐いくらい誰とも擦れ違わない。

## 第一二三話（前書き）

レイアス視点になります。ご注意ください

## 第一二三話

\*\*\*

「今夜は雨だな……」

誰にいってもなくぽつりと零す。

今は晴れているがこのあたりの天気は急に変るのが特徴的だ。

姫の部屋で昨日と同じように、窓辺でぼんやりと空を仰ぐ。  
昨夜は宿に戻つて猛省した。狭量にもほどがある。姫は世界にと  
つて唯一無二の存在で、特別。それをその辺の娘と同じように、我  
が物顔で扱うなど持つての他だ。

許されて良い愚行ではない。

何より、姫はとても傷付いた顔をしていた。  
させてしまつた。

扉を開けたときあんなに嬉しそうな顔をしてくれたのに。

本当なら朝一にでもと思ったが今日は参拝の日だ。

その証拠にここに来るまでにかなりの人間と擦れ違つた。礼拝堂  
の扉の前には列が出来ていた。あれだけの人間の心の平穏を願うな  
ど普通の人間に出来るはずがない。

だが姫はそれを毎回真摯に行つ。

一人一人に手を差し伸べ微笑みかけ、人々が癒されることを願う。

自分だつてその一人であつたはずだ。多少金銭的に裕福で身分があるというだけの違い。それだけで……どう考へても己が調子に乗つていたといふことに他ならない。

行かないで欲しいという姫の願いをどうして聞き届けることが出来なかつたのか……あんなにほつときりと思いを告げてくださつたといつのに……。

姫は己の思いを外へ出すことをとても恐れている節があるのに、それなのに、その思いを口にしてくださいた。俺はそれに耳を塞いでしまつた。……最低だ。

自嘲的な笑いが零れ、そのあと深い溜息を吐く。  
早く顔を見てきちんと謝罪したい。姫のことだ、怒りよりも悲しみが深く、塞ぎこんでしまつていいことだろう。それなのに、自分の事情とは関係なく、人々を思わなくてはならない。  
神子姫はとても尊いお方だ。

兎に角、もう参拝の時間は終わりを告げる。  
そうすれば謝罪する機会も得られるだらう。

……コンコン

そう思つたとき一度扉を叩く音が聞こえた。

自室に戻るのにノックをするのか？ 存外姫は意外性が強いから予想の斜め上くらいの行動を……などと思いつつ、開くのを待つ。

「神子姫様、今宜しいでしょうか？」

キィっと微かな蝶番の音がして扉が開く。  
入ってきたのは信者の一人だつた。

「ここに寄るときにはほぼ必ず見る顔だから、姫様つきの信者なのだろう。中にいた自分に気がついて不思議そうな表情をして入室しその距離を縮める。

「姫はまだ戻っていない」

質問される前に答えれば「そんなはずは……」と声を零す。  
そうはいつも自分はずつとここに居た。参拝の時間が終わるのを待っていたのだから間違いない。

「今日はお疲れのようでしたので、人数に制限を掛けておきました。少しは早く上がったと思ったのですが……散歩でもされているのでしょうか」

ぶつぶつと言葉を重ねる信者に眉を寄せる。その程度の認知度でどうする。そんな苛立ちを覚えると、ふと彼女は隣りにあったテーブルの上に置きっぱなしになっていた箱に気がついたらしく、ふわりと頬を上気させて「何をいただいたんですか?」とここで止まる。

何、といわれても……何だ?

「昨日、姫様が街で買つていらしたものだつたと記憶しております。とても嬉しそうにしていらっしゃったので」

「俺のものじゃない」

ちりと見て眉をひそめぶつきらぼうとした所答えば「まさかっ!」と必要以上の驚き方をする。

「そんなはずありません」

「俺は何も貰つてはいないし……それに、誰から貢がれたものを

貰つても嬉しくない」

「……」で愚痴るようなことでもないのに、つい零してしまった。姫のひととなると情けないことこの上ない。そんな俺に、彼女は必要以上に驚いて声を裏返した。

「ち、違いますー！」

予想外の勢いに思わず押されてしまつた。

「何が、だ」

「それは、姫様があ持ちになつたお金でお買い上げになつてこられたものだと思います」「…………」

少し乱暴に歩み寄つてきた彼女は「失礼します」とつておきながら、了承を得ることもなく箱に手を掛けた。流石にそれはよろしくないと思つたが止める隙もない。

「ほら、男性物ではありませんか。こんなものを姫様にお持ちになる方はいらっしゃいませんー！」

「…………」

「姫様はそれは楽しみにそれでいてのですよ。何かしたくて資金が欲しいからと、血の手を汚されてまで私どもの手元をされて、そうして得たものでお買い上げになつたんですね

「姫に何をさせたんだ」

思わずその台詞に声を凄ませてしまった。怖がらせるつもりはなかつたが姫に今以上のことをさせるところのは腑に落ちない。

「もちろん、金銭くらい直ぐに用立てさせてるので必要ないとお断り

したのですが、それでは駄目だと申されて……その……少し庭弄りを手伝つていただきました」

「庭弄り、だと……癒しの神子姫に、土いじりをさせたのか。

思わず怒氣がこもつたのが分かつたのか、信者は自分から一步身を引いた。怯えさせるつもりはなかつたが、姫に、そのようなこと。

「姫様は一生懸命お手伝いしてくださりました。慣れなくて申し訳ないといいながら……それも、貴方様を思つてだと思ひます」

真摯にさう告げられて、ぐっと言葉に詰まる。そんな自分に気が付くこともなく彼女は続ける。

「その夜も、とてもお疲れになつたことと思いましたから、ゆっくりとした安息を取つていただきこうと思いましたのに……わたくしにお断りするような権限ございませんし、何より酷く狼狽されている様子でしたから」

あの男を通したのだな、と苦い思いが蘇る。

「姫様が眉を寄せられたら、命に代えてもお断りしようと思いまし  
た。しかし、姫様は、分かりましたと穏やかに承諾され、私に、気  
を使わせて申し訳ないと、ありがとうといつてくださいたのです」

胸に詰まつていたものを吐き出すよつに今まで話しきった彼女は、俯いてぐいっと顔を腕で拭つた。そして、ぽつりぽつりと零す。

「姫様はお変わりになられました。以前はとても気高くて尊い方で  
傍に歩み寄ることすらおこがましいと感じてしまうほどでした。け  
れど、今は、とてもお優しい方です。春に芽吹いた花のように明る

く美しい。お声を掛けただけで、笑いかけていただけるだけで身も心も癒されていくような気がします」

ああ、確かに姫の笑顔は癒される。身の内から満たされしていくような気がする。

「わたくしは姫様を尊崇そんすうしておりました、今ももむりひんそうですが、今いまの姫様は大好きです」「

きつぱり、そしてはっきりと胸を張ってそう告げる」との出来る彼女は、今の自分には眩しくすら感じた。

「ああ、俺も好きだ……」

とても感慨深い気持ちで、息をするほど自然にその言葉は紡がれる。

……バタンッ！

息つく間もなく激しく扉が開かれた。

思わず今は持つても居ない剣に触れるように反射的に手が動いて心の中だけで苦笑する。

「シユリ様っ。神子姫様は何處ですか！」

「……まだ、戻つておりませんが」

「傍の物置に使っております部屋の隅にこれがぁつて

いいながら、膝から崩れ落ちた信者にシユリと呼ばれた彼女は駆け寄り手の内のものを取り上げる。

手の中のものが無くなると「ああ！姫様っ」と悲観的に泣き崩

れる信者を横田に自分もその傍に歩み寄った。

「姫様の着衣ですね……」これは、メモ、でしょうか

丁寧に畳まれた着衣の上に、四つに折り畳まれて紙片が乗っかっていた。

シユリがそれを開いてしまつ前に、すつと取り上げてぱらりと開く。

「……もし、これを見つけてしまつた方へ。直ぐに戻ります。心配しないでください。と、あるが……一体どこへ」

メモを読み上げてシユリと顔を見合させた。僅かな沈黙のあと…

…

「街かつ！」

「街です！」

声が被つてしまつた。

慌てて窓の外へと視線を投げる。

もう日が沈んでしまつ。

… 雨 が 降 る。

## 第一十四話

\*\*\*

……サアアアア

最初はぽっぽつ、あとは小雨のような雨が降り続ける。

一休みしようと、道を少しだけ逸れて、小さな泉を見つけ、ほつとしたのも束の間の出来事だった。曇天に視界の確保も難しい。

ついてないな。

もう、雨を避けることも面倒臭くなつて、泉の傍に蹲り時折指先でぴしゃりと水面を弾く。きっと、まだ明るい時間だつたらこの水面も煌いて美しいことだらう。

けれど今は、どんよりとして暗い空を移しどろりとした表面は私もろとも飲み込んでしまいそうで、ほんの少し不気味だ。

雨……止みそうにないな。

日も完全に暮れてしまつたし。

神殿まであとどのくらいにあるんだろう。

棒のよじになつてしまつた足は、もう一步も動きたくないと悲鳴を上げている。普段の運動不足がたたついているのかもしれない。目が覚めたら頑張つてウォーキングでも始めよう。

「……で、眠つたら現実、かな」

そんなことをぽつりと呟いて膝を抱える。

そうだと良いのか悪いのか私でも分からぬ。

今日も一日レイアスに会えなかつた。

あとどのくらいこのあたりに居てくれるんだひつ。國に戻つたらまた暫らく会えないのに夢を見るのかな。

そういうえ、宿屋の小母さん気になることいつてたな……あの様子じや、あそこを訪ねてくる女の子は私だけじゃないことだよね。

そうだよね。

彼は綺麗だし、偉丈夫だし、普通なら放つて置かれないハズだ。大体、私、彼のこと殆ど知らないし。好きなものを贈つてあげることすら出来ない。國に帰つたら本当に妻子ある身だつたりして……はは、笑えない。

もう、私は彼の前で”神子”なんて演じるのは無理だから、そつなつたら、きっと不倫とか？ そういうのだよね。  
だつたら、やっぱりもうこのままで良いのかな。  
まあ、どうせ私は籠の鳥だし……そして、今はその籠にすら戻ることが出来ない情けない迷子だ。

そろそろ雨の当たらないくらいのところまでは、移動したほうが良いかな。

流石に身体が冷えてきた。

冷え切つてしまつたら本当にもう一步も歩けなくなつてしまつ。信者の方たちがもう私が居ないことに気がついてしまつているだろう。

よのよろと立ち上がり、もつ痛くて履けなくなつた靴を手に大木の幹に背を預けると、再びずるすると座り込む。

駄目だやつぱり立てない。  
もう、歩けないよ……。

髪の毛から云つて降りてくる零は、水なのか涙なのか分からぬ。また私は丸くなつて膝に額を擦り付ける。

身体中が痛いし、寒いし。

苦しい。

キリキリ、キシキシと変な音を立てそつだ。

……がさがわつ

茂みが揺れた。

びくりと肩を強張らせて、揺れたまゝへと田を凝らす。

暗くてよく見えない。

どつしうつ狼とか熊とかだつたら。美味しく頂かれぢやうのかな？

いや、街道沿いなんだから熊はない？

いや、現実でもどじいで出現してくるか分からなくなつてゐるくらいだし、こんな世界じやどじいで何が出てきてもおかしくないよね。

びくびくしてこるともう一度、茂みはガサガサつと揺れて

「ウォンッ！ ウォンウォンッ！…！」

と聞こえた。

ワン……つて犬、だよね？ 犬、なの？

低い声だけど、そう思つた途端、視界に黒い塊が飛び込んできた。どんつと大木に背中をぶつけたけど逃げようはない。

身構えて、きゅつと瞳を閉じると、肩にずんつと重さが係り、頬に生暖かい感触が襲つた。

「え？」

じわじわと目を開ければ、大きな犬だ。千切れんばかりに尻尾を振り、鼻面を擦り付けてくる。

座っている私と殆ど同じ高さだ。大きくて重過ぎてその勢いのまま「ひあっ」押し倒されそうになつた。

「見つけたかっ！？」

それに続いてワンコの飼い主も出てきたようだ。

背が高く、黒い外套を羽織つているせいとでも大きく感じた。

反射的に恐怖を感じて、じりつと後ろに下がつたけれど逃げ場もなければ逃げる力もない。立てないのでから仕方ない。

しつしという手の合図で犬は私から離れ、来た道へと戻つてしまつた。居てくれれば良かつたのにと後ろ髪を引かれてしまう。ぴしゃりと水を弾き地面を踏みしめる音に、きゅつと身体を縮めて顔を伏せる。

「……姫」

ぱしゃんつと水が飛沫をあげる音と同時に大きな手が私の頬に触れた。

この手は、知っている。

私は驚きに瞬いて顔を上げると、地面に膝をついた彼は空いでいる方の手で外套のフードを後ろへ下ろした。

「レイア、ス……」

「やつと見つけました」

ほうと深い溜息とともに紡ぎ出される声。

私がずっと聞きたいと思っていた声だ。  
今日ずっと会いたいと思つていた人だ。

その彼が今日の前に居る。

田の前に居るのだから、早くいいたかつたことを、伝えたかつたことを口にするべきだ。そんなことわかっているはずなのに、私の唇はふるふると小刻みに震えて音を出さない。

早く止まれば良いのにと思って、唇を手で押さえればその指先もかじかんで震えていた。

……ふわっ

彼が着ていた外套を私に掛けてくれる。

ズぶ濡れになってしまっている私が着てしまうのは申し訳ないのに、その心地良い重さと暖かさに私は必要ないとはいえなかつた。

「あまり良くなはありませんが、これ以上濡れる」とはないでしょ。「少しだけ着っていてください。直ぐにさつきの犬が街道に馬車を呼ぶと思うので……」

そこまで出まじょう。と手を伸ばされ私は手を取つたけれど、膝

を伸ばす彼に呑わせて立ち上がるとは出来ない。くんと手を引  
つ張られる形になつて、彼は「姫?」と不思議そうな声を落とした  
あと、理由が分かつたのか再び私の前に膝を落として私を抱きかか  
えると改めて立ち上がつた。

「あ、あの」

「ああ、靴を忘れていましたね。俺が姫を抱きますから、持つてい  
られますか」

…。

「いらっしゃんと被つていてください。濡れてしましますから」  
「いやでもそうではなくて…」

話を続けようとした私の声を遮るよつて、彼はそつ続けてフード  
をぐいっと引っ張つて目深にしてしまつ。自分だつてあつさり外套  
脱いでしまつては濡れてしまうのに、問題はないのだろうか?

私、こんなに道逸れたかな？　といつもくらこ逸れていた。  
暗くて足元が良く分からなかつたし、途中から水の音を頼りに歩  
いたから……。これでは、例え足が健勝でも自力で街道に出てくる  
ことは難しかつたかもしね。

そう思ふと、恐くなつて身体が震えた。

「寒いですか？」

「い、いえ……平氣です」

それが伝わつたのかそつと声を掛けられて、私は小さく縮こまり  
首を振つた。

あの、と声を上げかけたところ、「神子姫様っ！」と悲鳴に近い  
声が耳に飛び込んできた。私は慌てて身じろいだけれど、彼にがつ  
ちつと抱き締められていて身動き出来ない。

「ああ、見付かって良かつたです。ご無理をさせて申し訳ありません  
ん」

深々と頭を下してくれたのは、いつも近くに居る信者の女性だ。  
勝手をしたのは私なのに、どうして彼女がこんなにも謝罪をしな  
くてはいけないのか分からぬ。また私の想像を超える騒動を起こ  
してしまつていたようだ。

私は申し訳なさに胸がきりきりと痛む。

「姫の御身は雨に濡れてしまつて冷え切つてゐる。謝罪は神殿でも  
出来るだろう？　早く馬車を」

と彼に促され、それは大変っ！ とばかりに彼女は傍に停車させてあつた馬車の扉を開く。雨の中だ、もちろん屋根のついたものだ。

「そちらの布と毛布をお使いください。私は直ぐに湯を用意させますので……」

彼が刹那片腕で私を抱き、そのまま馬車に乗り込めばそう口にして、ぱたんっと扉を閉めてしまう。ちょっ！ とお礼をいうタイミングも逃し、上げ掛けた声も喉から出る前に飲み込んでしまった。

「戻る場所は同じです。また、彼女は貴女の傍仕えをしている一人のようですから直ぐに会えますよ」

「戻るなら一緒に」

「馬車より馬のほうが速いですからね。大丈夫、彼女は慣れていますよ」

そういうながら、そつと私を座らせたあと、ぼすっと私の頭からフードを下ろして外套を降ろすとひやりとした外気に晒され身体を強張らせる。そして、冷えて湿った肌に柔らかな布がふんわりと触れる。

気持ち良い。

軽く瞼を落とせば、やわやわと濡れた髪を拭い水滴が滴り落ちて更に濡れてしまつのを留めた。

そして、腰を落ち着けるのを待つていたように、かたんつ、ことんつと微かな音を立てて馬車は静かに動き始めた。

「どうも彼女たち他数人は貴女の護衛のようです。身のこなしがとても軽い……兎に角、まずは『自分の心配をして下さ』

お願いですから、と重ねられて私はしょんぼりと俯いた。

私が大人しくなれば「良い子です」と僅かな間、頭を撫でられる。子どもを疾うに卒業してしまった私からすれば、それは褒め言葉だ。慈しまれて、大切に思われているのが分かる。

「あ……」

続けて服に手を掛けられて反射的に声を零せば、微かな笑いを空気が伝える。

「濡れたままは良くありません。毛布もありますから、少しでも早く濡れたものは外したほうが良い」

では自分で、といい掛けたら「やらせてください」と宣言され頷かないわけにはいかなかつた。

べつたりと重く身体に張り付いていた衣服が、一枚ずつ降ろされると体温は下がるのかと思つたら、恥ずかしさにじわじわと上がつていくような気がする。

「…………っ」

最後の一枚を降ろされると、彼の手のひらが直接肌に触れ、どきりと心臓が高鳴つた。

きゅっと瞳を閉じて身体を小さくすれば、肩から布を掛けられ髪から滴り落ちて、濡れてしまった肌を丁寧に拭われる。

「反省しています

「え？」

顔を上げたのと、ほぼ同時に、優しく毛布を掛けられてやんわり

と包まれた。続けて、こちらへ来てください、と腕を引かれ不安定な馬車の中、私は促されるまま彼の膝に腰を降ろし、ぎゅうっと抱き締められた。

とくとくとく……と鼓動が早くなり、彼の胸に頬を寄せれば彼の心音も早く響く。

「反省、しています。すみません、俺が悪かった、俺が一時の感情で動いたりしなければ、貴女にあれほど傷付いた顔をさせなかつたのに、貴女にこんな無茶をさせなかつたのに……」

許してください、と重ねられ更に腕に力が込められる。力が強すぎて、声が出せない。

私はなんとか彼に回した腕に力を込めて、何度も首肯した。

私は怒っていない、許して欲しかったのは私で、謝らなければいけないのは私。

彼じやないのに……そう思うと胸が苦しい。

彼の痛みがそのまま流れ込んでくるようで、心が悲鳴を上げる。

「……姫」

腕の力が緩み、身体が軽くなると寂しく感じた。

そんな私の頬を大きな手のひらが包み、促されるように顔を上げると、もう夜の闇に翳つて暗い色の瞳が私を真っ直ぐに覗き込んでくる。

「まだ、俺は貴女の特別でいられますか？ 貴女から触れてもられる唯一人の男でいられますか？」

「……っ」

縋るよつて許しを請う彼の瞳が堪らなかつた。  
堪りなくて、堪りなく苦じへて、私は息を呑み

「んうっ…」

毛布が落ちてしまつのも気にせず、伸び上がつて彼の首に両腕を絡めると頭を奪つた。

軽く歯を立て、乱暴に吸い付く。

意表を突かれて、驚いた彼の瞳が愉快に感じた。

だから、もつとと思つたのに、それなのに、一度同時に馬車が石を踏み、がたんっと大きく揺れてしまった。

がちりつと当たると歯列が彼の唇を傷つけ、甘こはずの口付けは血液特有の苦味を帯びる。

それに気がついて慌てて離れよつとすれば、背に回された腕に力を込められ、角度を変えられてより深く口付けられる。

強引ではあつても荒々しいものではなく、深く強く貪られる。

「つ、は……つあ……  
ん、んう、も……つ……」

詫びよつな吐息はどうやらのものが分からぬ。

引き寄せる手に絡みつく彼の少しばかり長い髪が指の間をすり抜ける感覚までもが心地良い。先ほどまで寒氣すらしていたのが嘘のよう、身体が熱を帯びもつと強く深く相手を求める。

「レ、イアス……」

「…………はこ…………」

「も、つと……貴方が欲しいの…………」

欲しいと重ねて刹那離れただけの唇を再び重ねる。彼は口元に微かに笑みを湛えて脣の端から微かな音を発する。

「淑女の、言葉とは思えませんね」

「淑女ではないといつたはずですか？」

視線が絡む距離まで離れて、そう叫ばれば「そうでした」と愉快そうに微笑まれた。

その笑みにビキビキする。

触れる手のひらに、胸に、伝わる熱にビキビキする。

つゝと彼の頬を撫でると、その手のひらに擦り寄られて笑みが零れた。

「俺も、今堪らなく貴女が欲しいんですけど…………」

かたんっと馬車が揺れ、静かに止まった。

「到着してしまったみたいですね」

いつて膝に落ちていた毛布を引き上げられる。

また抱きかかえようとする彼に「もう歩けます」と口にしたのに「意地悪いわいでください」と抱き上げられてしまった。

そして、扉に手を掛けようとしたが、先に外から開いて、先に戻つた彼女が驚いて私たちに道を空け、迎えてくれる。

## 第一十六話

「神子姫様、おみ足をびつかされたのですか」

「あ、えっと、」

「疲労困憊していて動かないんです。マッサージでもしてあげてくれださい」

いいどもった私の変わりに彼があつさうと答える。

「それは大変です。湯殿の準備は整つております。お早くびつや」

仰々しくそう告げて彼女は私たちの先を歩いた。その後ろを少し送れて歩きながら彼がそつと耳元に唇を寄せて囁く。

「知っていますか？ この聖域では貴女の部屋以外で貴女に深く触れることは禁じられているんです」

「え？」

驚いて反射的に顔を上げれば、ふつと笑みを深められる。

「本当は俺も一緒に湯殿を借りたいところですが、」

ちらりと前を歩く彼女に視線を送つて肩を竦める。

「彼女は敬虔過ぎる信者のようですから、下手を打つたら貴女に会うことも叶わなくなります。大人しく部屋で待っていますから

すりつっこめかみに唇を寄せて「続きをしまじょう」「そりゃあちゅう」と軽く口付けをする。

続きを読むといふ單語にふわふわつと体温が上昇する。

大胆極まりないことをいい始めたのは自分だけど、改めれば恥ずかしすぎる。

隠すことが出来ないほど赤くなつた顔を彼の鎖骨辺りに摺り寄せて顔を伏せれば「駄目ですか?」と悪戯に問い合わせられる。

そんなわけないのに、そう問い合わせてくるのは唯の意地悪だ。

きゅうと毛布の合せ目を握り締めた手に力を込めて益々俯けば

「耳まで真っ赤ですよ」

と告げて、つうと頭を支えてくれていた腕の先で外殻を撫でる。びくりと声を殺せばくすくすと笑いを重ねられてしまった。

湯殿 部屋に隣接したものは普通サイズだけど、こちらは泳ぐほど広い では、もう本当大丈夫ですからと悲鳴を上げたくなるほど、丁重に温められマッサージをされた。

揉み返しが来そうだ。

よろりと、立ち上がり靴を履くことを戸惑つていると、踵のないものと取り替えてもらつた。え、と顔を見れば彼女だ。

「手当ではしましたけれど、痛みますよね」

と微笑んでくれる。

恥ずかしさと気遣つてもらえる嬉しさで頬が染まる。ありがとう、と小声で告げ、彼女の手を借りて足元も整えた。

「あの……」

私の手を無理のないように引いてくれる彼女に声を掛ければ猫の

よつな瞳が「はい」とこの返事と共に締められた。

「名前を聞いても良いですか？」

そう聞いただけだ。

それなのに、彼女は悲鳴のよつな短い声をあげ肩を跳ね上げた。  
「めめ、滅相もいません。わたくしのよつなものの名などあつてないようなもの、そのようなもので神子姫様のお耳を汚すわけには参りません」

……彼女の中で私の位置はどうなんだろ？ それとも名前に特別な意味もあるのだろうか？

その盛大な慌てっぷりに、私はふふっと笑いを零してしまった。それをどう取ったのかふわわっと顔を真っ赤にしてしまう。

冷静で感情の薄い雰囲気のあつた人だったんだけど、そんなことはないんだだと再確認。

「迷惑でなければ、教えて欲しいのです  
「迷惑だなどとつー」

沈着なイメージは吹っ飛んだ。一々反応が過剰だ。

「わ、わたくしの名前は……その……シユ、シユリと申します  
「シユリさんですか？」  
「ひつ！ け、敬称など必要ありません。シユリと呼び捨ててください」  
「……では、シユリ」

これで良いですか？ と問いかねば「はい」と声を裏返した。名

前を聞くだけで一苦労だ。私は、苦笑してから改めて気持ちを整え、彼女の名を呼ぶ。

「迷惑を掛けすみませんでした。私、自分のことしか考えていてなくて、貴女や他の方に沢山の迷惑と心配を掛けしまって……本当に、『めんなさい……それから……』

ありがとう、そう重ねれば、大きく見開かれたシユリの瞳からはらりと涙が零れた。

え、えええつ？！

私は彼女を泣かせてしまつほど酷いことをしてしまったのだろうか。

い、いや、そうだよね。  
うん。

いきなり主　なのかな？　が居なくなつたら彼女だつて責任を問われるかもしれないし、何か咎めを受けるのかもしれない。はつ！　あのときのような拷問とか受けるようなことが合つたらどうしよう。また私のせいであんな風に人がぼろぼろになるのは勘弁して欲しい。

「も、」  
「え？」  
「勿体無いお言葉です」

いつて深々と頭を下げる。なぜつ？！　びくびくと肩を強張らせれば彼女は再び私の手を取

つてゆづくりと歩き始めた。

「神子姫様には苦しいお役目が課せられてしまつていると、そのせいで、神子姫様は心を失くしお役目に忠実で己の平穏を省みない尊いお方だと思っておりました。本来、わたくしどものようなものであれば、逸れは敬い愛さなければならぬことだと思つております。しかしながら……時折こうしてわたくしどもを驚かせて貰だる、今の神子姫様も私は好きです」

「あ、ありがと……」

「当然です。ですが、その……出来れば」相談ください。わたくしのような下位の者では姫様の願いの全てを叶えて差し上げることは出来ないかもしれません……出来る限りの協力はさせていただきます。それを迷惑だなどとは思わないでください。神子姫様にお使えするのがわたくしの役目であり幸せです」

どうかよろしくお願ひいたしますと、再び折り目正しく頭を下げられてしまつたところで、私の部屋の前に到着した。

そんな風にいつでも私は夢から覚めれば、唯の人だ。  
唯一般市民がそんな風に傅かれても対応に困る。

私はどうと答えることも出来ず、「ゼ、善処します」と答えるのがやつとだつた。

……カチャ……

彼女に扉を開いてもらい、お礼をいいながら入室すれば、丁寧に扉を閉められる。

閉まつてしまつた扉を見詰めて、ほふつと一呼吸。

あんなに濃い人だとは思わなかつた。

私みたいな人間が他人から尊愛を受けるなんて思わなかつた。

あまりのことに驚いてほんやりと眺めていると背後から、にゅうと一本の腕が伸びてきて、ぎゅううと抱き締められた。

「扉の向こうに名残惜しむものがありますか？」

「つ、ん……ない、です。ただ……ちょっと……」

「」によりと続ければ首筋にすり寄つていた顔が離れて、拘束していた腕の力が緩む。私はその手をそつと撫でて振り返ると、不思議そうに私の話の続きを待つている彼の髪に手を差し入れて軽い口付けを交わす。

「ちょっとだけ、私は本当に何も知らなかつたんだなと思つていたところです」

「それは深窓の神子姫のですから当然ですよ」

特に問題ないといつよに、そう答えた彼は「足はもう平氣ですか？」と問いかながらまた私を抱き上げてしまつ。

急にバランスを崩されて慌ててしがみ付けば、実に愉快そうに笑う。

そういうえば、彼は最初から良く笑う人だつたなと思つ。

表情一つ変えない私に、色々と話して聞かせてくれるのは彼だつた。

他の人も沢山の話をしてくれるけれど、その殆どは愚痴だ。もちろんそれでぐつたりして来ているのだから当然の内容だといえるし、この世界のことを殆ど知らない私はそれを嫌だとも思わなかつた。

ふつわつとベッドに下ろされて、ちょこんと座つていると彼は隣りに座つてサイドボードの上に一つの間にか置いてあつた例の箱を手に取つた。

「それは？」

そんなものがあつてはまた彼の機嫌を損ねてしまつのではないかと思つて、慌てて手を伸ばしたけれど、何の妨害にもならずそのまま、ぽすりと彼の膝の上に落ちてしまつた。

「俺に、でしょう？」「

「そ、そり、ですけど、でも……」

「貴女の心以外に貴女から賜るものがあるとは思いませんでした」

座りなおそとすればそのまま押し留められ、私は彼に膝枕されてしまつ。

「本当にすみません。俺、自分のことでいっぴいっぴになつてしまつていて、貴女の気持ちを考える余裕がなかつた。貴女のことが堪らなく好きで傷つけてしまつた」

すみませんと重ねて、箱から中身を取り出すると、既に中身を知つていたのか、すつと瞳を細めた。

「姫がつけください」

そういわれて再度起き上がろうとすれば、やはり遮られてその手に腕輪を握られた。そして、差し出された腕を前に少し考える。

「あの……利き手とは反対のほうが良くはないですか？」

「いいえ、利き手が良いです。利き手なら、いつも必ず気にしていらっしゃるでしょう？」

きつぱりはつきりとそう告げられて、ふわりと頬が熱を持つ。  
貴方が良いのならと、私は手にした腕輪の繋ぎ目に力を入れる。  
トップの部分に止め具が仕込んであって、そこで微調整出来るもの  
のようだ。

力チ

手首に收まると室内の淡い光源に反射してキラリと煌いた。

綺麗だ。

気に入ってくれると良いのだけど。

ちらりと彼の顔を仰ぎ見れば、満足げに微笑んでくれていた。良かつたとほつと胸をなでおろすのと同時に少しだけ申し訳ないような気もする。

## 第一一十七話

「価値的なものは分からないから、その……」「貴女から賜るものならどんなものでも、至宝ですよ」

「いい過ぎです……今度はもつと頑張ります……」

「い、いえ、貴女の頑張りは俺の予想を超えるのでモビモビで、お願いします」

困ったように笑ってそういうわれると、確かに、結果が伴わないことばかりをしてしまっている。何もしないほうが良いのかも知れない。

「なつ、何で表情が翳ってしまつんですか？」

「役に立たないと思つて」

口に出せば益々しょんぼりした気持ちになる。私の本質はどうもないくらい根暗だ。顔を逸らせば、急に彼は膝を上げた。

「ふわっ」

必然的に私の身体は持ち上げられ、彼の顔が近くなる。

そしてまた彼はとても愉快そうに「貴女の驚いた顔は本当に愛らしいですね」と笑ってぎゅうっと抱き締める。あうっと息を詰めれば腕の力は緩んだけれど、離す気はないらしい。

「俺は何の役に立つてこますか？ 正直俺の方が役に立つてないと思いますけど？」「え

彼の役に立つていいことに。

役に立つてこなすこととは違うかもしれないけれど、私は彼が居るから救われている。現実でも心の平穏を保つていられるし、辛くても逃げ出すことを望まずに済んでいい。

踏みとどまることが出来ている。

癒されている。

それ以上に何かなんていうなんて贅沢も良いくらいだ。

「私を愛してこるといつてもらえるだけで十分です」

嘘は吐いていない。

私にとって最重要事項でもある。

それなのに、彼はくつくつと肩を揺らし「欲がないですね」と続ける。

「俺は貴女の全てが欲しいです。けれどそうすることが叶わないことを十分に知っているから、今は貴女の心が俺から離れてしまわなければそれで良い、貴女の名を知り敬称もなく呼ぶことが出来る。俺だけが特別だと思つていいから、いつてこと、多分、一緒です」

いいきつて「ねえ、そんなことよつ」と額に頭を落とす。

「俺、本気で続きがしたいんですけど……まだ、お喋りのまづが良いですか？」

「いつてことよつ」とは黙だと想ひの上擦り寄つてくる姿は愛らしくもあり感じた。

顔を上げれば、可愛らしい口付けが、ちゅっと落とされた。じんわりと身体が熱を持つのはこのあとのことと思つてだと分かっている。分かっているけれど

「あ、あと、一つだけ」

赤くなる顔をそのままにそのまま口にすれば、瞳が続きを促した。

「私、勝手に宿までいつたんですね……」

「ええ、知つてますよ。おかみが神子様に似た可愛らしい女の子が来ていたのに、残念だったねえと、しみじみ零していましたから」

う。

「そ、それで、貴方はどこにいたんですか？」

「ここに居ました」

「は？」

「ここで参拝の儀が終わるのを待つていていたんですよ。ずっと……よもや姫君が窓から逃亡するようなことがあるとは思わなかつたのでもう空回り過ぎて溜息が零れる。

逃亡つて……。

ていうか、居たのか、ここ……それなのに私は一度くらい部屋に戻つていればこんなことにならなかつたといつてとか。なんか

「溜息は幸せを逃がすのだと聞いたことがありますよ？ 僕、信じませんけど。それに」

俺なら何度でも幸せになります。いつにこり。

今、言葉おかしかったよね？ 僕ならって、私ならどうなるんだ

ろう？ その是非を問う前に、優しく頬を取られてもつ一度唇を重ねられた。

その唇を堪能するよつこ、甘く柔らかく食み、するりと腰で結ばれた紐を解かれる。着物を着るときのよつて下着の類はしていないから、直ぐに肌が彼の熱を感じてその暖かさに震えた。

頬に添えられていた手がするすると首筋を這い、襟足から入り込んで片肌を晒した。そのまま撫で降りてくる手のひらが、やんわりと胸に触れゆづくり丁寧に撫でる。

「ん、んうん……あ」

少しづつ全身が暖かくなり肌が上気してきた。

硬くなつた節が胸の頂に触るとぞくりと総毛立ち、つけたばかりの新しい腕輪が肌に触れるとそのひやりとした感触にも身体を震わせる。

「ねえ、姫……」

深い口付けの合間、熱い吐息と共に呼び掛けられその声の響きすら、官能を呼ぶ材料になる。

「姫が嫌だといつてもやめないかも、知れないんですけど……良いですか？」

そんなことを問い合わせられては、ノーとは答えられない。

「……っん、あ。痛い、のは、嫌、です」

硬くなつてしまつた先端を指先で軽く抓られて、びくつと身体を強張らせるのと同時になつて、出来れば、と付け加える声は掠れて

消えてしまった。

頬を食み、目尻に舌を這わせていた彼は、ふ、と口角を引き上げて、背を支えていた腕の先で、耳を殻をなぞり生理的に浮かんだ涙を吸い上げながら答える。

「では、どういうのが、お好みですか？」

「ふ、う、んんっ」

重ねて問い合わせられても、するすると腰の辺りへと這い降りてきた手のひらが、身体中をくまなく撫で付けるようにねつとりと這い、身体が痺れ、息が上がつて言葉にならない。

「ん、う、なんですか？ 答えが聞こえないです」

「つ、は、あ。あんっ」

焦りすようにお尻のあたりから太ももを、ゆっくりと撫でていた手がするつと足の付け根に触ると反射的に私は彼の首にしがみ付いて身体を強張らせた。

「痛くなれば、何、しても良いですか？」

ゆるゆると彼の中指が亀裂を撫で時折深く入つてくる度に息を詰め強く彼にしがみ付きながら、掛けられる問い合わせにいくつと必死で頷いた。

ちゃんと考へているかと問われれば何も考へていない。  
でも、彼が私を傷つけたりしない自信はあった。

「足、もつと開いてください」

耳元に息を吹きかけるように語り掛けられ、無茶をいわれてふる

ふると私が首を振れば、仕方ないですね、と愉悦な笑いを零して、  
背中を撫でていた腕が私の身体を持ち上げ

「あ」

簡単に彼の身体を跨がせてしまつ。

「これで逃げられませんね」

くちゅっと足の間から漏れてくる水音は厭らしく響き彼に掛けた  
腕に力が籠る。

人差し指と薬指で割り広げられて、中指が敏感な部分をねつとり  
と撫でそれがあわせるように首筋に舌が這う。全身が性感帯になつ  
てしまつたように、ぴりぴりと粟立ちそれすら心地良く感じる。

苦しいくらいの胸の高鳴り。

じわりと汗ばむ肌。

熱を含んだ吐息。

その全てが愛を紡ぐ旋律の一部のようだ。

滴つてしまつていいのではないかと思つほど濡れているのが分か  
る場所へ、ずつ！ と長い指が押し込められる。

「つは、あ、ああん」

反射的に口なりに添つた背を宥めるよつて、空いた腕が私の背を  
優しく撫で、その甘い愛撫とは対照的に、中に入り込んだ指先は、  
ゆっくり早く擦り上げてくる。

何かを探すように、蠢く指先に目の前がチカチカする。

大きくなる声が恥ずかしくて、なんとか飲み込もうとするの」、それが余計に熱を内に込めて高ぶらせる。

「、、、ん、んんん…」

「ああ、ひひひと彼の首にしがみ付き、震える身体をこらえる。下腹部から電流が走るような感覚に、軽く達してしまったことを実感する。

「…………サシャ…………気持ち、良い?..」

「つん、んんう、いい、です」

「いは、ぢづ~..」

緩くなってきた波にとひたつとじてへねと、彼の指先がある一点をこいつと撫でる。

「ひあ~」

その新たな刺激に短い悲鳴のような声を上げると、彼は私の首筋に唇を当てたまま声を出す。

「ああ……いは、気持ち良いんで、ね……見つけた……もつと、良くなりますよ」

「え……つあ、あつーだ、駄目ですっ、駄目っ、嫌つ」

同じ部分を執拗に刺激され、耳や首筋に受けた愛撫が激しくなり何をされても敏感に反応してしまう身体は、急に尿意に似た激しい感覚に襲われて慌てて逃げ出そう腰を引く。それなのに、私の意志ではぴくとも動かせないくらい、きつく腰を抱かれた。

「出そう、ですか？ 大丈夫、そのままイってください」「嫌つ！ 、いや、いやあ……っ」

最初に明言したとおり彼は嫌だと何度も口にしても、腕に込める力を強くするばかりで、絶対に解放してはくれなかつた。声を抑えることも忘れて喘ぎ、意識はそこにしか向わなくて、自分がどこを見ているのかも分からなくなる。分からなくなつて……

「…………ひつ、んう、ああああつー！」

もう、我慢出来なかつた。

指で触られただけなのに、物凄く感じて漏らしてしまつたのかと思つたけれどそんな匂いもしないし別のものらしい。

ぐつたりと彼の肩にもたれ掛かり上がつた呼吸を整える。

「どうして、そんなに驚いているんですか？ こんな風にイつたのは初めて？」

彼が声を発するたびに首筋に熱い吐息が掛かる。力なくこくんつと首肯するのが精一杯だつた。

## 第一十八話

\*\*\*

「……ん、んー……」

翌朝、目が覚めたときもなんだか妙な浮遊感が残っていた。嫌なものではなく、もつといつ色のあるものだ。

結局、私の体力と意識の限界まで求められ、愛された。

というか、私欲求不満にもほどがある。

心地良い身体の名残とは別に気持ち的にがっかりする。でも、私はそんなに恋愛経験が豊富というわけではなく、自ずとそういう経験が豊富というわけでもない。

隣りをちらと見て、彼はもともと淡白だから、結婚してからは強く求められるようなことはもちろんないし、子どもが出来てからは年単位でセックレスだった。

だから、なんというか、あそこまでの経験はない。

自分が経験したことないことをあんなにリアルに体感することが出来るのは、凄く奇妙だ。なんとなく恐いくらいの濡れ方だったから恐る恐る、布団の中に手を突っ込んでみるけど、眠ると同じで別に濡れていたりはしない。

……当たり前、だよ、ね。

そう思つて自嘲的な笑みを零すけれど、そのくらいのリアルさが

あの夢にはある。

……まあ、良いか。

根本的な部分は私では解決出来ない。でも、それで少しでも自分の気持ちが救われて安定するなら、逃げ場所としては実害ないわけだし。うん。と頷いて、私はベッドを抜け出した。

子どもはまだ起きて来ないし、夫は仕事に出掛けた。いつもと変わらない土曜日だ。少しだけ違うといえば、私が普通どおりに起きてきてお弁当を作り、このあと外に出るということだ。

「ウインナーはターキーさんと、カーラーさんにして、つと……おにぎりはクマの肩抜きをしてつと……」

ぶつぶつ口にしながらお弁当箱を飾り付けていく。もちろん、自分の分は普通に詰める。

「おはよー、お母さん。わあ！ 激いつ  
「今食べたら駄目だよ。朝はパンを食べて、これはお昼ご飯  
「分かつてる分かつてる」

味のほつは良く分からなければ、見た目だけは普通に見えると思う。よし。

私は一人で頷くと自分の分は袋に入れて子どもの分はダイニングテーブルの上に置いた。

出かける準備を整えて玄関口で「行ってくるねー」と呟べば、リビングに続く扉の向こうから元気な返事が返つて来た。

「うそー、いつからしゃーー」

土曜日といつもあり、人通りはまだ少ない。私はいつもより少し良い気分でお店に向つた。

……カラシカラシ

と今日も可愛らしいウールカムベルに迎えられお店に入る。開店前の時間でも店長さんが私が来る日は開けておいてくれるから私は正面から入るのだけど……

「ああ、やつと来たー！」

入るなり店長さんに掴まえられた。

文字通り、手首を取られて奥へと引っ張られる。おはようござれこますと挨拶する隙もなくて何事かと混乱しつつ着いて入つた。

「何かありましたか？ 私何か、失敗して？」

「え、あ、ああ、すみません。そうではなくて、えーっと珈琲飲みます？」

「いえ、用事があればそれを先に」

あの様子からのんびり珈琲を飲んでいる暇があるのだろうか？  
とこちらが心配になる。店長さんは、じつと私を見たあと「そう、  
ですよね」と笑つた。

「あーっと、その、この間小夜ちゃんと一緒だつたみたいですから、  
何かあつたんじゃないかなって、気になつていたんです」

「何か？」

いわれて、小首を傾げると私は小夜子さんとの会話を思い出す。そして、直ぐに離婚理由が思い当たつて、ふわわっと顔を熱くなると慌てて顔を反らした。

「い、いいえ、な、何も」

「……和泉さん。いくら僕でも、その反応で何も聞いていないとは思えないんですけど……えーっとさりと口にし辛いようなことを聞いたんですね」

口にし辛いといふか本人曰の前にそんなこと口に出来ません。といふか、なんで私本当にそんなこと聞いてしまったんだろ？。益々赤くなつて小さくなる私に、店長さんは、うーんと唸る。

「僕のこと、ですよね？ 小夜ちゃんが『口止め』みたいなことは絶対いわないだろ？……貴女が口にするのを迷うのだから、普通ならいわないようなこと、小夜ちゃんがこいつちやつたんですね。全く、こいつは良いことと悪いことをあまり考へないですからね、彼女」

店長さんはひりひりと酷いことこいつてます。それなのに懸口には聞こえないのが不思議だけど。

「えーっと、その、り、離婚理由をその……す、すみませんっ！ 何気なく聞いたんです。だって、普通に仲良さそうに見えましたし、そのえーっとえと、本当にすみません。他所のお宅のこと口を挟むなんて、やつちやいけなことだと」

焦つてぺこぺこ頭を下げる私に、店長さんは、ふうと嘆息した。

その様子に恐る恐る顔を上げると壁に背中を預けて、額に手を置

き前髪を掻き上げて長く息を吐ききっている。眼鏡のせいで、その表情ははつきり分からなければ、怒っているといつ風ではなさそうだから良かつた。

「そつ、そつちですか。そつちなら、別に良いです」

謝らないで、と重ねて、ふふっと苦笑する。

そつちつてどつちなら駄目だつたんだろ？　あんな個人情報余程親しい人でないと知つてはいけないことのよつた気がするんだけど……。

そつか、そつかと口の中で重ねている店長さんをマジマジと見詰める。その視線に気がついた店長さんが、にこりと微笑んだ。

「くだらない話を聞かせてしまつてすみませんでした。どつせまた来るでしょ？ から小夜ちゃんには、ちゃんとといっておきますね」

「あ、いえ、そんな……あ、あのう」

赤くなつた顔はちつとも治まる様子はないけれど、そんなに氣にしていないならどうづづづしくも重ねてしまつ。小夜子さんにも、店長さんにしても聞くことを容認してくれているような優しい雰囲気がある。

今だつて、重ねた私の続きを静かに待つてくれている。私はそれについて甘えてしまう。

「お二人とも、とてもそれだけの理由で別れたり……といつ風に見えないんんですけど、その……」

確かに恋愛感情はなかつたと、彼女は断言していただけれど……お互いに嫌つてゐるようにはとても見えない。『』によくによくと口にす

れば、店長さんは「ああ」と笑った。

「それもそうですよ。小夜ちゃんは僕なんかより女子の方が好きですか？」  
「は？」

驚きすぎて、思わず鞄を、ぽとっと落とした。店長さんはその鞄を拾い上げてくれつつ、くすぐすと楽しそうに笑う。

「鳩が豆鉄砲食いついた顔どこののは今の貴女のよつな顔ですかね？」  
「へ？ あ、はい？」

はい、どうぞ。と鞄を手渡されて、反射的に受け取り曖昧な音を発した私に、店長さんは笑いを深める。

「いーえ、なんでもないですよ。だからそっちも心配していたんです。今、恋人が居るから大丈夫だらうとは思っていますけど、多分貴女は小夜ちゃんの好みだと思うので」

じつと私の顔を眺めつつそんなことをにわれても、えーっと、どう答えて良いのか分からせん。

「もう、でしょうか？」

「うふ。そうですね。小さくて可愛い子が好きなので、きっと」「え、えーっと……その、光栄です」

なんとこかで良いか分からなくて、「」「」というふうに答えると、ぶつと噴出された。私今日は店長さんのツボを押しまくっているようだ。わわわわっと益々顔を上げられなくなる。

「嬉しいですか？両刀の人に好かれて……とかそういう人のことをどう思います？」

「え、あ、その、愛情深い方なのだなと」

「なるほど」

まだ笑われている。

何がそんなにツボなんだろう？不思議には思うけど、嫌悪する気持ちが湧かないところが妙な気分だ。ま、まあ良いか。

「私の周りには居ないタイプですけど、その、私なんかでもそう思つてくださる方が居るのは嬉しいです。それに小夜子さんは女性の私が見ても素敵な人だと思います」

何より、私だって夢の中では両刀だといわれても仕方ないので、そんなに抵抗はない。

それに小夜子さんは、本当に嫌な感じのしないさっぱりした美人だ。恋人が男性だろうと、女性だろうと、きっと相手を幸せにしてくれるタイプの女性だろうと思つ。

私は少なからずそういう人に憧れに似た淡い気持ちを抱く。  
私にはとても遠い存在だ。

一人で勝手に、うんつと頷いた私に店長さんは、ふ……と嬉しそうな笑みを湛えて「貴女みたいな人は稀ですよ」と口にして、でも……と続けた。

「貴女は受け入れるのがとても上手そうなので、大丈夫だとは思つていましたけど」

続けられた言葉に首を傾げる。褒められているのか貶されている

のか微妙だけど……。

「優しい人だといったつもりなんですけど……」

「えっ！」

褒められていたらしい。

私は慌てて「ありがとうございます」と頭を下げると、その頭をぼすぼすと叩かれた。

「そういうのはなんか苦労しそうです。平氣ですか？」

「え……っと」

顔を上げると店長さんと田舎合ひたものの、にこりと微笑んだだけでそれ以上その話が掘り下げられることはなかつた。

私、気苦労的な何かが滲み出ているのだろうか？ 恥ずかしいなあ、もう。

外には出れないようにしているつもりなのに……。

……再度反省。

## 第二十九話

……

外で流れる穏やかな時間には幸福を感じることが出来た。お店の中の時間はゆっくりと流れ、私は私で居られる。お母さんと呼びつけられることも、主人の顔色を窺うこともない。

ただの私だ。

一日の中でもうあれる日がここ暫らく、 そつ、 結婚してからはなかつたような気がする。  
ずっと色々なことに縛られていた。

最初は結婚するかどうかで縛られて、 したらしたで、 今度は子どもが出来ないことに縛られた。

出来てしまえば極端に自由は制限されて、 そこからなんとか、 穏やかに過ごせる時間を見つけようとしたけれど、 大抵は誰とも会わない日が続き、 赤ちゃんの泣き声とテレビの音くらいが、 私の耳に入ってくる全てで、 帰つて来る主人の世話をして、 夜泣きの面倒を見て部屋の隅で蹲っていることも多々あった。

赤ちゃんの面倒は私が見なくては、 助けて欲しい、 気付いて欲しい、 なんて思うことがとても情けないことに思えて自分で自分が許せなかった。 私は子どもの面倒すら満足に見ることの出来ない駄目な親だとこゝそり泣いた。

い。  
……もしそのときから私は独りで、 その状況を誰も知らな

ぼんやりとカウンターの奥に腰掛けて、黙々と資料を眺めたあと、表の通り眺めて人間観察とかしてみる。近所の人だらうけれど、知らない人ばかりだ。

私は本当に何も知らなかつたんだな。

「ありがとうございました」

からんからんと出て行くお密さんに声を掛けたところで後ろから声が掛かる。

「そろそろ上がつて大丈夫ですよー」

「あ、はい」

穏やかな時間はあつさりと終わりを告げる。

私は不器用で、毎日なんて仕事を入れてしまつては家のことが回らなくなる。だから、無理なのは分かっているけれど、もう少しここに居られたらと思わずには居られない。

小さな溜息を落として、私は飲みかけていた紅茶を流し込んだ。

「お先に失礼します」

帰り支度を整えて　店内にお密さんが居たため　いそりと店長さんに挨拶。

少しだけこちらに向いた店長さんはカウンターの下で小さく手を振つて「お疲れ様でした」と微笑んだ。

裏から外に出れば、まだ明るい。

でも、今の季節直ぐに口が沈んでしまうだろう。

私は一度だけ深呼吸してから、帰り道を急いだ。

帰つてからはいつも通り。

子どもの相手して、ご飯の準備をして、お風呂の準備、洗濯物を片付けて、食事、そしてその片付け、終われば、お風呂。

何も変わらない。

その全てが終われば十時半とか十一時だ。

それほど遅いとは思わないけれど、彼は寝室。朝が早いから夜も早い。

大変健康的のこと。

嫌味のひとつくらい考へても撥は当たらないだろう。口にはしないんだから。

その割りに、彼は常にどこかが痛い疲れたと愚痴ている。それがまるで私との壁を作るためのようで、あまり心配する気にならない。

薬飲む？

病院行く？

マッサージしてあげようか？

といつても全部拒否だ。

私にはどうすることも出来ない。私の心配も最初から受け付けるつもりもないのに口にするといふことは、私を拒絶するためだと感じても仕方ないと思つ。

「そつか、大変だね。大丈夫？ お疲れ様」

口にするけれど彼が聞いているか分からぬ。

今夜は帰つてからなんていっていただなかつへ、思い出せない。それくらい当たり前のことになつていた。

私はダイニングテーブルに載せたノートパソコンにそつと触れて、少し考える。

少し考えて、電源を入れるのをやめて一階へと上がつた。いつも通り子どもが寝ているのを確認してから寝室へと入る。

今日もテレビがついている。

彼は顔の半分以上掛け布団で覆つてしまつてゐるけど、まだ起きているかな？

そつと掛け布団を下ろしたら、まどろんでいただけらしく険しく眉間に皺を寄せ、片方の瞼だけ少し上がつた。

何？と問われるより先に、唇を重ねる。

ちゅつと軽く吸つて柔らかく食む。相変わらず無抵抗だ。それだけで、泣きそうな気分になる。

それでも、私は身体を滑り込ませ彼の身体をそつと撫で、やつと視線の絡んだ彼に「しよう?」と強請つた。丁寧に愛されることはないとかつっていたから、自分がより惨めでより切なくなるだけだということは分かつていただけれど、またこのまま離れた関係が続くのは嫌だった。

それに、また氣まぐれでも起つたときにあの激痛が伴うのは嫌だ。

前戯が足りなくて、挿入でのみえられる快楽は私にとって痛みしか生まない。性交痛がこうこうものだとあのとき痛感した。

少しでも和らげるためには、少しでも定期的に回数をこなさないと……。

その日もやはり彼が触れるのは、胸と下腹部だけ。寝転がつたまま身体を持ち上げてくれないから、私が乗っかるしかない。そして、僅かに与えられるだけの愛撫でも、なんとか痛みが和らぐようひと、感じるように努めた。

私は彼との関係の改善を求めている。  
愛されたい。

夢の中では彼が居てくれるけれど、現実に私が触れて良いのは主人だけで、私に触れて良いのも主人だけだ。

そう、定められている。

彼がサボっているのは愛情表現だけだ。そんなものきっと離婚の理由になんてならないだろう。それに……

「…………」

もう、大丈夫かと思つて、出来る限りゆっくりそつとしたけれど、軽く裂くような痛みは走る。きゅっと彼の首にしがみ付き、暫らく痛みを堪えてから続けた。

その動きにまどろっこしさを感じたのか、やつと身体を起こした彼は、後ろから私を抱えてせつと済ませて終わらせる。

夢の中なら、昔なら……そのあとも一緒に居てくれるけれど、あさりとベッドをあとにして、階下に降りていった。

また、手を洗いにいったんだろう。  
私は汚いから。

今日は確認するのが恐いから私は動けなかつた。じんじんと疼く身体を丸めて、その痛みが遠のくのを身体を小さくして待ち、やっぱり駄目だと落ち込み、胸がぎりぎりとつめで引っかかるようこ痛んで苦しくて静かに涙を零した。

やめれば良いのに。

そう、思うのに、私の居場所はここしかなくて、私は一つ切り離すことは出来ない。やっぱり私は依存することしか出来ない。

私は……

## 第一話

現実世界の詰まらない私。

夢の世界の唯一無二の役目を負つた私。

同じ私であるはずなのに私の価値は雲泥の差だ。

私は私……貴方は、貴方……

貴方は一体私のなんですか？

誰が殺した駒鳥を……それは私と雀がいました……

そう、自覚してもらえばもつと楽に気持ちが伝わったかもしない。

二つの世界の境界線はとても曖昧で、私は今どちらが拠点なのか良くなくなつてきた。

現実ではそんなに時間が経つてはいないのだけど、二ちらでは少し時間が過ぎてしまつてているようだ。あれから私は穏やかにこの神殿で過ごしている。

本当に、穏やかに。

レイアスとは毎日会えるわけじゃない。

いつも通り参拝の方の癒しも祈るし、夜訪れる人が居れば拒まない。だから、目に見えて何かが変わったわけではないけれど、なんとなくこの世界は色鮮やかになったような気がする。

「姫様」

今日は特に用がなかつたから、のんびりと外庭の巨木の根元に腰

掛け、四方にぐんつと伸びた枝で轟る小鳥を眺めていた。掛かつた声に驚いて数羽逃げてしまふのを田で追いかけてから、顔を声の先へと向けた。

「お寛ぎのところ申し訳ありません、姫様」

恐縮した感じで歩み寄ってくるのは、私の身の回りの世話をしてくれているシユリという信者の女性だ。凛々しく折り目正しい彼女が私を心から信頼し尊崇していることが伝わるから、私も信頼を置いているし、そういうふうに努めている。

「気にしなくて良いですよ。寛いでいたといつか、ぼーっとしてただけで暇ですから」

「ひとつとさう告げれば、彼女はほんのり頬を染めて「ありがとうございます」となぜか礼をいう。

「お客様がいらしているのでお通しました」

いって立ち位置をずらせば、彼女から少し離れたところにビニカ見覚えのある姿があった。

ここはそんなに多くの色で構成されているわけじゃない。

建造物の白。

庭を彩る緑　花は白いものが多い  
そして、見上げると真っ青な空。

そんな色が中心だから他のものが混じると直ぐに分かる。アジアンティエストを感じさせる細かの模様の施された服飾品はここでは異

色を放つ。

彼は他の国の人だ。

彼女が通すということは、不審人物ではないのは確かなので、私は腰を擧げる。彼女が一步下がったのを私の了承と得たのか、訪問してきた彼はそっと歩み寄つて来てその顔がはつきりと見える位置で、仰々しく腰を折つた。

それと同時にシユリが席を外してしまつ。

同席しても問題ないのに、彼女は決して来客時に同席はしない。

彼の顔に見覚えはあるような気がするけれど、どこの誰とまでは分からぬ。日元の涼しげな優しい雰囲気の人だ。

「お久しぶりです、神子姫様」

知り合いだ。

知り合いらしいという確信は得たけれど……誰かは分からない。

ここにちはと軽く挨拶を交わした私に彼は微笑む。

「部屋に戻つたほうが良いですか？」

私が問えば、彼は首を振つて私にさつきと同じように座ることを勧めてくれる。私が促されるままそこに戻ると、彼はその前に膝を着いて、ずっと持つっていた細長い籠を前に置いた。

「以前お約束をしていましたので、連れてまいりました」

いうと同時に何かが飛び出してきた。

私は思わず巨木に預けた背に力を込めたけれど、中から出てきた

のは

「……猫」

だ。薄灰色の短毛で、耳と尻尾の先が黒い美人さんだ。人懐っこいのか私の手に擦り寄つてきてくれて、思わず抱き上げた。短く「にゃう」と鳴いて暴れる事はない。ほわほわと顔が綻んでしまうのは小動物マジックだと思つ。

「可愛い」

「喜んでいただけたようで良かつたです」

「」ひちの世界で猫なんて初めて見た。

ふわふわでぬぐぬぐ、思わず抱き締めたくなる存在は世界共通だ。

「神子姫様のお陰で私の病魔は去りました。もつと何かをすべきだと思つのですが、まずは貴女の顔が見たくて直ぐに戻りました」

「元気になつて良かつたです」

凄く申し訳ないが話半分になつてゐる。

だつて、膝に乗つけた猫ちゃんがぐりぐり私の鳩尾に額を擦り付けてきてくすぐつた。たまりかねて抱き上げると、また愛らしく鳴いて、だらーんつと降りた尻尾の先がゆらゆらと揺れる。

猫にはつんとしたイメージがあつたのだけれど、このなんともいえない人懐っこい遊んでーといつ体勢。どきどきふわふわしてしまふ。

しかも、とても愛されているのだろう。

毛艶も本当に良くて、艶やかで皇か。その柔らかな肢体を撫で付けただけで蕩けそうだ。

「名前はなんとこいつですか？」

「ミリ・ルシャナです」

「それは、立派な名前を貰つてこいるんですね」

ぎゅっと抱き締めて「ミリちゃん」と呼べば意外なことにから「はい」と返事が聞こえた。

あれ？ 首を傾げると、ミリちゃんもその動きに合わせて首を傾げる。私は聞き間違いかと思つてもう一度重ねる。

「ミリ」

「は」

あれれ？ やっぱり返事をしたのは、彼だ。

私が恐る恐る顔を上げ彼を見ると、彼はこいつと微笑んだ。

「ミリ・ルシャナは私の名前です。立派な名前を貰いました」

「うーん」と楽しげに告げる彼に私は、ひつーーと息を呑んだ。

「すすす、すみませーん。私てつきつ、この猫ちゃんのお名前だと思つて、その、ええと、」

ぱあああつと身体中が熱くなり顔が真っ赤になつたのが分かる。

……恥ずかしいつ。

私の慌てつぱりに驚いて、猫ちゃんは私から逃げ出さとい主人の下に戻つてしまつた。ミリちゃんは猫ちゃんを抱き上げながら微笑み、そして続ける。

「ええ、 そうだからなと思いました」

「お、 思つたのよ、 ビックリして自分の名を名乗るんですか」

余りに楽しそうにされたので、思わず不服を口にしてしまったら  
尚樂しげにされてしまった。私は何一つ楽しくない。

「貴女に知つて欲しかつたので」

「え」

真意を聞いたかったのに、彼はむりつと交わしながら

「因みにこの猫の名前はカルラです」

優しく丁寧に猫を撫でる姿に私は落ち着きを取り戻し「忘れられ  
なくなりました」と苦笑した。

「という」とが先日ありました。猫、可愛いですね」

あの日と変わらず私は木の根元に腰掛けて、今度は幹ではなく彼に体重を預けて上から落ちてくる木漏れ日を見詰めながら話をしていた。

彼はのんびりと私の髪を梳き、時折相槌を打ち話しが聞いてくれている。

「猫がお好きなんですか？」

丁度頭上の木の枝から、ぱさぱさと飛び去った色鮮やかな美しい鳥を見送つてそう告げる。

「三さんはあの日、本当に猫を見せてくれるためだけに、遠路遙々きてくれたらしくて、私はとても恐縮した。

「鳥……鳥ですか？」

「動物は言葉で向き合わなくとも懐いてくれるので好きです。見た

田も變りし」と思ひ出す」

カルラちゃんの柔らかな撫で心地を思い出しつづけ。ほんわりとする。

大人しい良い子だつた。

ああ、やがてだ。ちゅうじゅうこぢんちんでも可愛こと感ひだ

けど。

「どうかしましたか？」

暫らく考える素振りをしていたレイアスに不安を感じて、問い合わせ見上げると「いえ……」と言葉を濁し、邪魔だからと外していたグローブをつけ始める。

その様子に私は慌てて身体を起こした。

「あ、あのっ。もうお帰りになるんですか？？」

「え？ あ、ああ。違いますよ」

思わず大きな声で聞いてしまった私に、彼は、目を丸くしたあと首肯して苦笑し「姫が追い返さない限り俺は帰りませんよ」といながらも、よつと身軽に立ち上がってしまう。

私も続けて立ち上がろうとしたが、どうかそのまままでと留められた。

「小鳥は逃げてしまうかもしれません、今だけ許してくださいね？」

私が少し距離を取り、そういうふた彼に私は意味も分からずに頷いた。

そして、左腕を曲げ肩の高さに構えると、口笛を吹いた。

とても、とても高く清んだ音はどうまでも遠く、どうまでもはつきり画面へ鋭く風を切っていく。

私が「何を？」と問うより早く、結果はやってきた。

ひょい……っと、鋭い風が傍を切ったと思ったたら、次の瞬間には、

レイアスの腕に一羽の大きな鳥が止まっていた。

「……ワシですか？」

立ち上がり恐る恐る問い合わせれば、彼は腕に止まつた大きな鳥に何かをあげて柔らかくその背を撫でた。

「ハヤブサです。俺の愛鳥ですよ。鳥です。鳥。真正面を避けてもらえれば、触つて大丈夫ですよ？」

じわじわ歩み寄つていた私に、歩を進めて彼は少しだけそのハヤブサが止まる腕を下げた。

すっと姿勢良く凛とした姿は彼に良く似ている。

勧められるまま、その子の背を撫ると、ダークグレーの羽に陽光が泳ぎとても綺麗だ。何度も繰り返せば、じわりじわりと頭を垂れて瞳を細める。

「とても綺麗な子ですね……ですが、レイアス……」

「はい？」

「……もしかして、張り合つてます？」

猫と鳥とでは全く別物だと思つけど、思わず緩む口元を押さえてそう問い合わせれば、彼は「まさか！」といいつつ私から視線を反らした。

存外子どもっぽいところのある人だ。

「一応仲の良い友人を紹介したまでです」

「ふふ、光栄です」

「本当ですよ？ 笑わないでくださいよ」

それでも笑いのこらえ切れない私に諦めたのか、ふうと嘆息して

「アルダ。休んでいたところ悪かつたな」

と纏めて、腕を上げるとハヤブサ　アルダとこうのかな?  
は音もなくぐんっと飛び上がり空を切つていった。  
ほんの少し名残惜しい。

恒温動物の体温というのは実に心地良いと思つ。それに動物はふわふわもこもこである確率が高い。

「もう少し撫でたかったです」「  
じゃあ、俺を撫でてください」

「ひとつ迷いなくそういうつて私の腰をぐこと引くと額をひとつと  
ぶつけて、鼻先にちゅうと口付けを落とした。

ふわりと暖かくなる胸のうちがくすぐつた!

好きつていう気持ちがいつまでもこの温度の中にいるべきだと思つ。

夢、覚めなければ良いのに、思つて彼に回した腕に力を込める。

私はこの幸せで甘い夢をここまで見続けていられるのだろう。夢の中でも辛いものは辛いのだから、ここにはまだ救いがある。

そう、思つていた。

そう、思えるだけのものがここにはあった。

\*\*\*

けれど、無情にも朝は来る。

ぼんやりと目を開ければ見慣れた天井だ。

「けふつ」

あれ？ なんだか喉がいがらっぽい。風邪かな？  
私は喉を擦りつつベッドから起きだした。

当然、彼は目を覚まさない。

私にはきつちり背を向けてくれている。腕が痺れるだらうから、  
腕枕をしろとも、抱き締めたまま寝ろともいわないけれど、こちら  
くらい向いても良いと思う。

偶然？ というか、こちら向いていることがあるのを私は知らな  
い。

熱を出しても私の毎日は変わらないから、出来れば元気に過ごし  
たい。

体調が悪くて家事をサボつたからといって責めるような人は居な  
いけど、でも、やっぱりやらないといつ選択肢は存在しないような  
気がする。

.....

みんなを送り出して、一通りのことを終わらせてソファに腰を降

ろす。

「……うーん、微熱か」

念のため、検温したら三十七度一分だつた。

このくらいなら寝てれば治るかな。今日はバイトがない日だし、少しだけ横になろうとソファに掛けてあつたブランケットをひっぱつてお腹に掛けて横になる。

今朝も夫との関係改善をするべく、スキンシップ率を上げようと努力した。

起きてきた彼に「おはよっ」と抱きつき、出かける彼に「いってらっしゃー」とキスをした。

当然振り払われたり、拒まれたりはしない。  
返されないだけだ。

見返りを求めるから哀しくなる。

これが私の普通なんだ。  
これで、良いんだよね、これで……これが、一生続くと思つたら  
つぱりつぱりする。

文句も主張も十分したと思つ。

これ以上は私からは出来そうにない。

でもやめてしまつたら、完全に私と彼は触れ合つことはなくなつてしまつ。きっと彼はそれをなんとも思わないだろうけれど、私は我慢ならない。

さやつと瞼を閉じれば、つうと涙が田尻からこめかみへと流れていく。

……早く、生き終わりますよ！」

静かにお願いしてうとうとする。

..... R R R ..... R R R ..... R R .....

ちよつとだけ、そう思ったのに、ぐつと眠りこけてしまつたようだ。

ローテーブルの上に置きっぱなしなつていて携帯が震えている。時計を見たら、おやつの時間、買い物にも行かなくちゃ、身体を起こして電話に出れば店長さんだった。

『今大丈夫ですか？』

携帯越しに聞こえてくる店長さんの声はびこなく嬉しそうだ。今までふんわりと嬉しい気持ちを分けてもらつ。

そして、大丈夫ですよと返して続きを待つた。

『明日入荷予定だったものが、今日届いたんですけど見に来ませんか？ 僕もまだ開けていないのですが』  
「明日って、確かハンギングランプが届くんでしたっけ？」  
『そうです、そうです。オイルランプ型の可愛らしさやつですよ』

ハンギングランプは玄関とかダイニングテーブルの上とかに設置するタイプのランプだ。白熱球の明かりが室内を柔らかく包んでく

れる。

「うにも欲しいなーと思うのだけど、今回のも売値で四万円くらいするんだよね。私にとっては欲しいな、買っちゃえっ！」と即決出来る額じゃない。

「じゃあ、今から買い物に出ようと思つていたので、先に寄らせてもらひても良いですか？」

『…………』

嬉しそうな店長さんの声は、やっぱりなんとなく沈んでいた気持ちも持ち上がる。

身体は熱いような気がするけど、さつきより断然動きやすい。ぐつすり寝落ちしたからきっと良くなつたんだろうと、私は出かける準備を整えて、お店に向つた。

「んー、折角ですからカウンターの上にディスプレイしましようか？」

お店に到着すると、店長さんは例のノートに新しく入つたもの的情報を書き加えてくれていた。

そして、一緒にダンボールを開封する。

宝箱を開けるようでこの瞬間がとても楽しい。

今回中に入つてたのは、予定していた、ハンギングランプと、クリスマスが近くなるからかキャンドルスタンドが幾つか、あとは外枠の彫が豊かなトレイだつた。

仕事できているわけじゃないから、見てるだけで良いといつてもらえたけれど、そういうわけには行かない。取り出した商品についていた梱包材をダンボールに突つ込んで、ぎゅつぎゅつ……と、

「わわっ」

「危ないっ！」

ぐしゃりと一人分の体重でダンボールを破壊してしまった。ふわふわ、さあああ……と、流れ出た小さなボール状の梱包材に涙が出そうだ。

「大丈夫ですか？ 気をつけてくださいね。貴女を箱詰めにしては駄目ですよ」

「あ……あ……」

ぺたんと床に座り込んだまま呆然としてしまった。

私、何やつてるんだろう。

片手でぐつと頭を抱える。背の高いダンボールだったから、そのままずるりと入り込みそうになってしまった。店長さんが腕を引いてくれたけど、間に合わなくて店内の一部が梱包材だらけだ。

「吃驚して腰でも抜けましたか？」

ぱつぱつと私の髪に絡んでいたのだろう、小さな白い粒を払い落としてくれながら、私の手を引いてくれる。ぐいっと強い力で引き上げられてよろりと立ち上がった。

そのまま、ぼうつとしてしまっている私のスカートに付いた粒まで叩き落してくれながら、のんびりと店長さんが慰めてくれる。

「大丈夫ですよ。壊れたのはダンボールくらいです。因みにそれも僕が壊しました。掃除すれば元通りですから」

「和泉さん？」と心配そうに呼びかけられて、私はびくんと我に返った。

「す、すみませんっ。そうですね、掃除！　掃除します。掃除……そう、じ……」

「あ、れ……？」

いいながら方向転換すると、一瞬自分がどこを見ているのか分からなくなつた。

くらりと視界が揺らいで、慌ててカウンターに手をつく。

「ちょ！　大丈夫ですか？　手も凄く熱かつたですし、もしかして、熱があるんじゃないですか？」

「大丈夫です。とりあえず、片付けないと」

「こりつ、大丈夫じゃない、大丈夫なわけないですよ。とりあえず、座つてください」

強引に傍にある椅子に座らされる。

おかしいな、大丈夫だと思ったのに、ぐるぐるする。座つたら益々身体が揺れているような感じに襲われて額を押されて俯いた。

船にでも乗つていいよつだ。

酔いそうで気持ちが悪い。吐きそつとまではいわないけれど、なんというか下に引っ張られる力が強くて身体を起こしておぐのが酷く辛い。

はあ、と熱い息を吐いたところで、首筋に店長さんの手が触れてびくりと肩が跳ねた。短い謝罪のあと、静かに重ねる。

「熱、かなり高そうですね」

「大丈夫です」

「すみません。調子が悪いのに呼び出してしまって……タクシー呼びますから、病院にいつてください」「いえ、本当に……」

顔を上げたら既に電話を掛けていた。  
断る隙もない。

諦めてそのまま休ませて貰っている間に、店長さんは店内をさくさくと片付けていた。その途中でタクシーが来たのが見えると、なぜか責任を感じまくっている店長さんが支えてくれるけど

「大丈夫ですよ？ 一人で歩けます」

そういう私に「ですが……」と渋ったあと、僅かな間瞳を伏せて、顔を上げるとほんの少し困ったように眉を寄せたまま口角を引き上げ、そうですね。と手を離してもらつた。

「ちゃんと病院行つてくださいね？」

「えっと、はい。あの、私もお店散らかしちゃってすみません……」

重ねてくれた店長さんに私も頷いて、お詫びも添えた。通りに止まっているタクシーに乗り込んで、行き先を聞かれ逡巡する。

「…………市民病院にお願いします」

帰宅してしまったのだけれど、このまま帰つて夜まで熱が下がらなかつたら、また主人に怒られてしまつだろ？

体裁が悪いとまたいわれてしまつたと思つと、病院に行つておこなうという気になつた。

タクシーを降りて、なんとか受付を済ませる。

待合室の固い椅子に腰を降ろすとひんやりとしていて、熱くなつた身体に心地良い。全身がかつかと燃えているようで、はたはたと鼓動が早く息が切れる。

店長さんには悪いことをしてしまつたと反省。

タクシー代も、支払いは店に回すようにいわれていたらしくて受け取つてもらえなかつた。

受付で借りた体温計の音で、取り出すと『三十九・一』私的には有り得ない数字を表示していた。熱が上がり過ぎて、逆に平気に感じてしまつていたんだなと痛感。

はあと、溜息を落とし、続けて貰つた問診に田を落とす。  
「じじ」と田を擦つても、涙で視界が霞んで良く見えない。困つたなどうじょうと、田を近づけたり離したりしていると声が降つてきた

「代筆しましょうか？」

「店長さん」

声のしたほうへと顔を上げると、店長さんだ。ほんのりと微笑んで私の隣りへと腰を降ろした。

大丈夫だという間もなく、すつと抜き取られて一問一答を繰り返す。

「数日前に雨に濡れてから少し……」

「雨、ですか？ 最近雨降ってませんよ？」

「え、あ！ ああ、そうでしたっけ……すみません。何か勘違いを……」

濡れたのは夢の中だった。

私は慌てて取り成したけど、大丈夫かな？ ちらりと店長さんの表情を盗み見たけど、特にそんな瑣末なこと気にしている風ではなかつた。良かつた。と、胸を撫で下ろし改めて答える。

「朝は喉に違和感があつただけで、熱も微熱だつたんです」「はいはい……それで、今何度だつたんですか？」

私の返答をかりかりと書き込んでくれる。

そして、さつきの体温計が表示した数字を口にすると、長嘆息されてしまった。重ねて本当に申し訳ない。

「あ、っと、インフルエンザとかかも知れないので近くに居ないほうが……」

ふと、思い出したようにそういえば、店長さんは「今更ですよ」ふふっと笑いを零した。確かにそうかもしれないけど……移したと

あつては申し訳なぞ過ぎる。

「どうか気にしないで……ひとつ、これを渡してたら良いんですよ  
ね」

書き終わったのか、ボールペンと問診票を片手に持つて腰を上げると、気遣わしげに私の頭を撫でてから受付へと運んでいってくれた。

私が自分でやらなくてはいけないことなのに、とても申し訳ないでも、今は座っているだけも辛い。早く横になりたい……ぐらりぐらりと頭を揺らし時折隣りの店長さんにひつひつと当たってしまい、謝りながら私は診察の順番を待つ。

「膝でも、肩でも貸してさしあげたいといひますが……」

「平気、です。大丈夫」

そんなところ誰かに見られては申し訳ない。  
もちろん、店長さんに……そして、主人に……。あの人は私を放置するくせに私が誰かとかかわることを極端に好まない、何かあればきっと直ぐにまた引き籠もり生活が始まる。  
そんなのは、もう、嫌だ。

「あの、お店……」

「気にしないでください。どうせ流行つてませんから」

穏やかにそういってくれるけど、半分嘘だ。

気にするなどいうのは優しい店長さんのことだから、本音だらう。でも、夕方からは仕事帰りにふらりと寄つてくださるお密さんも多いはずだし、流行つていないと云うわけじゃない。

こんなことになるなら、密かな楽しみに食いついたりしないで、お断りすれば良かったと後悔する。

検査室に呼ばれるときの定急な発熱のためインフルエンザの検査をされた。

鼻の粘膜を採取して……なんだけど、これがまた痛い。そのあとも結果が出るまで、十五分くらい掛かってしまった。

続けて、朝から何も飲み食いしていないことに気が付いて点滴まで受けて帰ることになった。

一応、検査結果が陰性だったからその血を店長さんに預けて、先に帰つてもうおつと思つたのに、暇だからと残つてくれた。

「そんなことよりも、『主人に連絡したほうが良いですかね？』  
「え……ああ、平氣です。大したことないのでも、連絡して余計な心配を掛けてもいけませんから」

それに彼は心配しても私が期待するような心配の仕方はしてくれない。

病院に掛かっせんことが出来ればそれで十分だと考へるだらう。分かりきつてこることだけビ、やつ思こ至ると胸がきゅっと痛む。

期待、するから駄目なんだ。  
それが普通。

そういう聞かせて、やつぱつこんな私に付き合わせるのは、店長さんに申し訳なくて、帰るよつてこおつと腫つたら点滴を開始されてしまつて伝えることが出来なかつた。

検査室の隅つこのベッドに横になつて、ぽちんぽちんつと点滴が落ちてゐるのを眺めてると、つとうとと聞くくなつてくる。看護師さんのが「寝ていて良いですよ」とこつ言葉に甘えて瞼を落とした。

針を刺したほつの腕は掛け布団から出していたのだけビ、誰かがその手の先を、一定のリズムで、優しくぽんぽんと叩き「大丈夫」「直ぐに良くなるから」と何度も声を掛けた気がする。

.....

「和泉さん、終わりましたよー」

看護師さんの声に起きたときには、店長さんは私の足元の方に居て「帰りましょうか?」と微笑んでくれた。手馴れた動きで点滴を回収してくれている様子を眺めながら、やっぱりあれは夢だったんだろうと思つ。誰だつて、体調が悪いときは優しくして欲しいものだ。

兎角私は願望が夢に出やすい。

「優しい旦那さんですね」

と、看護師さんに声を掛けられて、慌てて否定しようとしたら「お世話になりました」とあっさり返してしまった。

「車できたので送りますよ」

会計を済ませて待合室に戻るとそこいつて促されるとどう今まで甘えて良いのか分からなくて、申し訳なくなる。でも、この流れからそれを断ることは出来ないしさせては貰えないだろ?。「こによこ」とお礼を告げれば、やつぱり気にしないでと返つてくれる。

店長さんの車は赤のクーパ。

なんからしい感じでとてもよく似合つ。乗り込むとフロントが外側に湾曲していく中は思ったより広かった。

「.....それから、わざわざみません。私と夫婦になんて間違われて.....はつきり否定してくださつて良かつたんですよ」

「え? ああ、構いませんよ。否定して説明し直すのも面倒でしょ

う？　ああ受けとけば直ぐに解放されますし

帰りの車の中で詫びればあっさりと返される。

そうだ。今更ながら再確認、店長さんは実に世渡りの上手い人なのだ。

「でも、店長さんの好きな人に申し訳ないです」

少しだけ椅子を斜めにして、まだ苦しい呼吸をゆっくりと繰り返し、そう告げれば刹那店長さんが息をつめたのが分かった。

あれ？　と思つてちらりと見れば、困ったように笑つていた。

「また、小夜ちゃんですか？」

「え……あ！　「」、「めんなさい」

「いーえ、大丈夫ですよ。まあ、確かに恋人は居ますけど、気にしないでください。きっと彼女も気にしませんから」

あつさりと肯定してそう告げられると、じついうわけかほんの少しだけ複雑な気分になる。

私と違つてとても心の広い人なんだなと思つと、自分の狭量さが恨めしい。

「店長さんと同じで、優しい人なんですね」

さらりと口にしたつもりだけど、どこか非難めいてしまつた気がする。そんな私を咎めることもなく「そうですか？」と苦笑した。

「彼女は確かに優しいと思いますけど、僕はそうでもないですよ」

それでもないんです。と重ねた意図が分からなくて、それ以上の

思考も回らなくて、私は「そなんですか……」と上の空で納得し、流れる景色を見ながら田を閉じたり開いたり、ふわふわと不安定に繰り返した。

「家中までお邪魔するのは余りに失礼だと思つので、ここまで、で……って、大丈夫ですか？！」

痛い。

玄関の鍵は開けた。

まだ子どもは帰つて居なくて、ちょっとがっかり。扉を支えてくれていた店長さんにお礼を重ねようと思つて振り返ろうとしたら、玄関の段差で派手に転んだ。

「直ぐに休んだほうが良いですよ。寝室一階ですか？ 自力で上がれますか？」

「ああ、寝室にはいきないので大丈夫です、」

「え？」

「そつちの和室で寝ますから……」

よじょと、ショートブーツを脱ぎながらソリソリと店長さんが黙つてしまつていたので重ねる。

「大丈夫、客間なのでお布団敷いてちゃんと横になれますから」

ついこの間まで私の寝室だつたんだから、平氣だ。

「そんな調子で布団の上げ下ろしが出来るんですか？ 余計なお世

話だとは思いますが、寝室で休んだほうが良くないですか?」

「いえ、その。ご心配ありがとうございます。えっと、風邪を主人に移してもいけないので、やっぱり別に寝ます」

唯でさえ、汚れ物の私が病原菌まで持つていたら同じ空気を吸わせるわけにもいかないだろう。

それでもし、もつと迷惑そうな顔をされたとしたら私は耐えられない。それなら最初から離れているほうが良い。

「では、僕が布団を敷きますから、貴女は着替えてきてください」

呆れたように溜息を零してそいつた店長さんは、仕方ないと玄関に入ってきた。

お邪魔しますと、上がれば座つたままの私を、ひょいと立たせて「そのくらいは出来ますか?」と確認する。私はこくこくと頷いて脱衣所に着替えに行つた。

着替えて戻れば、丁寧に布団を整え終わつたところで、申し訳なさも一入だ。

見送りをしてから布団に入らうと思つたら、あつさり断られほほ強制的に寝かされる。

「あれ、これ……」

「点滴を受けている間に病院の売店で買つてきました。あと、スポーツドリンクがあるので、喉が渴いたら飲んでください」

べたりと、冷却シートが額に乗つけられ問い合わせれば何でもないことのように返される。慌てて、財布を、と身体を起こせば、「気になるようなら、給料から引きますから今は休んで」と布団に戻された。

ちゃんと天引きしてくれるなら、まあ、良いか。

すみませんと、ありがとうを重ねて、ゆっくりと瞼を落としたところで

「やつぱり主人に連絡したほうが良くないですかね？」

と声を掛けられた。

「一人では寂しいでしょう？　いつも遅いなら少しでも早く戻つてくれるかもしませんし……」

「平気です！　平気……！」

勢いよく否定してしまつた。

思わず身体を起こしてしまつてぐらりと傾く。駄目だ、天井がま

だ揺れる。ほすつとそのまま元の位置におひて、今度はゆっくつと重ねた。

「もうすぐ、子どもも帰つてくると思いますから。連絡なんて必要ないです。余計な心配掛けたくないから」

「……そう、ですか？」

「私は慣れてるので、一人でも平氣ですから。心配しないで……迷惑掛けでごめんなさい」

「いえ……あ、っと、その。仕事は体調が良くなるまでお休みして大丈夫ですか、無理しないでくださいね……その、今日は無理させてすみませんでした」

丁寧に謝罪して、店長さんは帰つていった。

誰の気配もしなくなつた家の中は、やつぱり寂しい。寂しくて、寂しくて、やつぱり、大丈夫なんかじやなかつた。  
でも……人様に迷惑をお掛けするわけには、いかない……大丈夫。大丈夫。

呪文のように重ねて眠つた。

……

「お前の分も買つて帰つたけど、食べれる?」

「……あとで良いよ。ありがと」

「いやー」と、プリンもあるから

「うん」

彼の帰る頃合いに夕食が作れないことをメールしておいた。  
コンビニか、どこかで夕飯の調達はしてくれたようで良かつた。  
帰つてから、そう掛けてくれた声をどこか遠くで聞いてからまた深い眠りに落ちる。

次に目が覚めたときには、家中が静かになっていた。

そつと、和室から出るどびこもかも真っ暗だ。時計を見たら午後十一時。そんなに吃驚するほど遅くない。けど誰も起きていなかつた。

寝汗をかなりかいてしまったので着替えを済ませ、喉が渴いたから台所へと向う。

ダイニングテーブルの上には、コンビニのお弁当が置いてあった。ハンバーグとか、食べられるわけない。どうせならレトルトで良いからおかゆでも買ってきてくれれば良いのに、と普段なら零さない愚痴が零れ溜息とともに吐き出される。

隣りには、こんもりとなつているナイロン袋。

二人が食べたあとだろう。

「ミ袋に入れておいてくれてもバチは当たらないだらうし、そこまでは気が回らない。

今それらを片付ける気にはならなくて、すべては明日で良いやと放置して、当初の目的を遂げるため冷蔵庫を開けた。

彼の好みで年中作っている麦茶に手を掛けかけて、ふと止める。スポーツドリンクがてんこ盛りだ。店長さんに頂いた分もあるし、彼も買って帰ったのだろう。

実は私、珈琲、紅茶以外はあまり好んで飲まない。

炭酸飲料やジュースも苦手だし、もちろんスポーツドリンクもあって飲もうとは思わない。そのことを十年以上一緒に居る彼が知らないわけないだろうに彼は毎回買って帰る。

結局、自分で飲んでいるといつ結末が分からぬのだろうか？

苦笑して、丁度田の畠をひおいてあつた苺のパックから、苺を一つ抜き出して手で簡単に拭つてぱくつと口にする。水の音で誰かが起きてきたら……と思つたのもあるけど、面倒臭かった。

「酸っぱい……」

季節的にどうなのが分からぬけど、酸味が強い。

私はヘタを三角コーナーに放つて、蓋の開いていたスポーツドリンクを引っ張り出した。ぱすりと冷蔵庫が絞まる音を聞きながらコップに注ぎ少しだけ喉に流し込む。

「甘い」

やつぱり好きにはなれない。

飲みづらいことこの上ない。とりあえず、病院で貰つた薬を飲んで再び横になった。

気の使い方が全く持つて的外れだけど、彼も一応気にしてくれているんだと、そう、思う。思いたい……私がここで寝ていることに疑問すら持つてはいないだろうけれど。

うとうとしたら、真夜中に熱がまた上がってきたらしい。

息苦しく、熱くて寒くて、わけが分からなくて目が覚めた。意識は戻っているけれど、田を開けることは出来ない。

辛い、苦しい。

そう思つて無意味に助けを呼ぼうとしても、この部屋には誰も居ない。

居ても一階だから私の声が届くはずもない。

はあはあと吐く息は熱い。

一度解熱剤を飲んだ時間からどのくらい経ったかと計算するため  
に枕もとの時計を引っ張り込む。

「三時半……か……」

病院に居るときに解熱剤は飲んで帰ったんだから、六時間以上は  
優に経っている。

……薬、飲もう。

思つても台所までが遠い。身体を動かすことが酷く苦痛だ。  
自力じゃ無理……朝まで我慢すれば……下がるかもしれない。こ  
のまま、もう、寝てしまえ。そう思つてきゅうと臉を落とすのに、  
殴られていようのような頭痛に完全に寝落ちすることは出来ない。

『大丈夫』

『直ぐに良くなるから』

ぶつぶつと口内で繰り返す。

私が今一人ではなかつたら、薬も持つてきてもうれしごと早く  
苦痛から解放されるのに。

私が、一人でなかつたら……。

……はあはあ

夜明けまでがこんなに長いものだとは思わなかつた。

## 第七話

\*\*\*

「…………ま！…………め様！　姫様つ――」

「…………ん？」

私は悲鳴のような声で目を覚ました。

視界に入るのは白。

家の和室は天井にもクロスを貼つているから、こんな風ではない。といふことは、あんな状態でも私は眠つてしまつたんだろう。

身体が重い。

熱い…………額だけはとても冷たい。

薄つすらと双眸を持ち上げると、シユリの心配そうな顔が目に入った。起き上がろうとすれば押し留められる。

「駄目です。神子姫様は今とても高い熱をお出しになつていらっしゃ、きちんと休まなくては」

こうこうときだけは、夢と現実がリンクするんだなど、自嘲的な笑みが零れる。

あの時も余りに傷が痛くて苦しくて、私が壊れてしまいそうだったから、きっと夢とリンクした。今も、きっとそうだ。

ふふ、それでも、私の手を必死に握るのが、彼女だといふことこ笑える。都合の良い夢なら確實に彼が居そうなものなの……。

「ありがとう、シユリ……」

「いいえっ！ お礼など必要ありません。今、姫が目を覚ましたと医師に伝えてまいります。先ほども、流行り病の類ではないと診断してくださったので、一時的なものだと思いますから、安心してお休みください」

いつて立ち上がるうとしたシユリの手を反射的に掘んでしまった。シユリは一瞬驚いたように目を見開いたけれど、直ぐにその手に手を重ねて「大丈夫ですよ」と微笑む。

「直ぐに戻ります。わたくしは貴女様のお傍を離れたりはしません。安心ください、直ぐです……」

やんわりとそう告げられて、自分が何で子ども染みたことをしているんだろうと恥ずかしくなった。恥ずかしくなつて「すみません」と侘び、手の力を緩めた。彼女はその手をそつと優しく包んで、寝台の上へと戻してくれる。

いつた通り、シユリは直ぐに戻ってきた。

先生と呼ばれた人が簡単に私を見てくれて、これで熱は下がりますよと薬を置いていった。

「大丈夫です。飲めなくはないと思います。その、苦ことは思いますが……」

夢の中で飲む薬といつのはざひだひつと思ひ、きゅうと手に握られた包みを見詰める。

それを薬が苦手だと判断したのか、そういうて励ましてくれているのだろう彼女に思わず笑みが零れた。

彼女は真摯に私を心配してくれている。

それに、どんな風に現実とリンクしていようと、この薬を飲んで

私の身体にこんな変化が起きたと、今更ビックリはない。

やう行きついた私は「飲みますね」と微笑んで、からかいつと口の中に白い粉末を流し込んだ。それにあわせて

「お水を」

と、銀のゴブレットを握らせててくれる。

「ぐぐぐ……と水を呷れば、喉がすうっと冷えて気持ち良い。

でも、確かに苦い。

そして、上顎にくつ付いて飲みづらい。

それでもなんとか飲み干して、ほうっと一息吐いた私はゴブレットを彼女に戻し、そつと寝台に身体を横たえた。まだ起きずきと頭は痛むし辛くないといえば嘘だけど、直ぐ傍に私を心から心配してくれる存在を感じることが出来るとなその辛さは全然違う。

「北の国には文を出しました」

「え!」

思わず驚きに身体を起こしそうになる。

そんな私を「いけません」と奢めて彼女は少しだけ不思議そうな顔をした。

「神子姫様に何かあれば必ず知らせるよといわれていましたし、それにわたくしもそのほうが良いと独断で決定しました。もしかして、何か拙いことでもありましたでしょうか?」

じつと見詰めてくる彼女の瞳が不安に揺れる。

「拙くは、ありませんが……その、たかが熱を出したくらいで心配を掛けてしまつのは申し訳ないと思うのです」

「そのような」とほいざこませんよ。神子姫様はこの世界に唯一の方です。貴女様は癒しの神子姫様であり、人々を癒す代わりのようにじ自身を癒すことは出来ない。そんな貴女様がお辛いときに辛いと吐き出して何が悪いのですか」

少しだけ咎めるような口調なのに、どこか優しい……。  
ひとりと冷たい布を額に載せられて、瞼を落とす。

「私はそんなに偉いわけでは……」

「貴女様は神が遣わされたこの世界の奇跡です。偉いか偉くないかななどという陳腐な言葉では表すことは出来ません。どうか今は『自分がことだけをご案じください』

わたくしはずっとお傍におりますから、安心して眠つてください。と締め括り、そつと手を握られる。指が長く大きな手に包まれて、ほつと胸を撫で下ろす。

静かに深く呼吸を繰り返すと、わつきよつづつと楽になつたような気がした。

安心してしまい、ぐつすりと寝こけていたのだろう、目を開けたときには外は薄つすらと明るんでいた。ぼんやりと瞼を持ち上げて、ぱちぱちと瞬きを繰り返していると「おはようござります」と声が掛かる。

「…………シリ」

「はい、神子姫様。お加減は如何ですか?」

転寝しているとかそういう可愛ららしい雰囲気ではなく、私が眠つたときと同じ場所で、同じ様子でにっこりと微笑んで問い合わせられる。

「貴女、ずっとここに居てくれたの?…………て、あ……」

じりっと身体を動かすと彼女の手がついてきた…………といつよりは、私がしつかりと握っている。

これでは彼女が微塵も動いていなくとも納得。私は今度は熱ではなくて、恥ずかしさに顔を赤くした。子どもじやあるまいし、本当になんて情けないことを……。

「すみませんでした」

「いいえ、わたくしは神子姫様の寝姿を拝見出来たので幸せでした」

「え?」

「冗談です。けれど、本當にお気になさらないでください。それでお熱は如何でしょう?　どこかお辛いところはありませんか?」

私が空氣を読めない人間だからだと思うのだけど、どうにも人様

の冗談が良く分からぬ。つい本氣で取つてしまつて時間が止まつていた。

「 もへ、平氣だと思ひます。どにも辛くないです」

答えて起き上がりとすれば、スムーズに手を貸してくれる。

「 それはようじました。しかし、まだ油断は許されません。本日は一日ゆづくとお休みください。わたくしは、少し雑務が残つておりますので、また少しだけ席を外しますが直ぐに戻りますので」

「 あの、今日は……」

「 お休みください。貴女様が健勝でなくては首も不安がりますよ。本日は遙拝にてお願いしておきますので、どうかご安心ください」

きびきびと口にした彼女は、ぴしりと形の整つた礼をして、きゅっと踵を返し部屋を出て行つた。私はその後姿を、ぼうと見送つて、扉が閉まつると同時にたと我に返る。

「 」での唯一の用事がなくなつてしまえば、私に他にすることはない、せめて彼女をこれ以上心配させないためにも、もう一度寝台に戻つて眠るのが一番だつ。

そう思つて、肘をついたところで、外から何か音がするのが聞こえた。

「 ……？」

何か分からぬ。風の音かもしれないし、気のせいかもしれない。でもどつとも気になるから、私は寝台からするりと降りると自分でちゃんと歩けるかどうか足元を確認してから、窓辺に寄つた。

音はその外からだ。

あまり聞いたことないけれど、多分動物の声だと思う。私はその正体を確かめたくて、かたんっと窓を開いた。

「ひやつー。」

それと同時に頬を風が切り、慌てて目を閉じる。  
そして、何かの気配を感じて、私は恐る恐る目を開いて鳥を呑んだ。

傍にあつたティーテーブルの椅子の背

「……アルダ？」

の姿があつたからだ。

私に一羽ずつ鳥を識別する能力はないけれど、目的を持つてこの部屋に入つてくるハヤブサなんてアルダくらいのものだと思う。  
アルダはまるで私を呼ぶように、くいくいと片方の足を上げて指を丸めたり伸ばしたり、手招くようにしている。

「どうしたの？」

私がじわりと近づけば、より高く足を上げてアピールしてくる。  
その足には小さな箇がついていた。きっとこれを渡したいのだと思う。

「これを取りれば良いのね？」

問えばキイキイと少し高い音で鳴いた。

私はそれに触れて、かちりと蓋になつてている部分を外すと、ぽこんと紙が出てきた。この子がアルダなら、飼い主はレイアスだか

ら彼からだりつ。

くるくると紙の巻き皺を伸ばし最後から田を通す。やはりレイアスからになつていて安心して冒頭に戻つた。

#### 『最愛なるサシヤ』

から始まつていた。

彼が書いた。私のためにわざわざ筆を取つたということだけで胸が躍る。ついでつきまで寝込んでいたとは思えないくらい元気だと思う。

……現金なくらいだ。

『体調が思わしくないと報を受けました。

直ぐにでも早馬にて駆けつけたいところですが、どうしても抜けることが出来ない俺を許してください。

アルダが先に貴女のもとへと駆けつけるのが憎らしきへりです。都合をつけ次第直ぐに向かいます。

それまで、どうか今は貴女のことと一緒に心憂へださい。  
遼遠の地から貴女を想ひ、』

「アルダ、少し待つてくださいね」

私は、ティー・テーブルの上のジスケット これまで、そんなものがあつたのか分からないけれど、今はちょっとしたものが常備してある をじつと見ていたアルダに一枚渡してそう告げると、アルダは首肯してカツカツビスケットを突いた。

なんだか可愛い。

そう思い、ふふっと笑みを零しつつ、急いで筆を取る。

私が元気になつていてることと、無理に慌てる必要がないこと、何

より同じだけ、もしくはそれ以上に想つてゐることを書き綴つた。アルダに持たせられるだけの小さな紙では、あまり多くは綴れないけど、この二点だけ押さえれば問題ないよねと納得してくると丸める。

「「めんなさい。私が貴方が普段何をもらつてゐるか分からぬのよ?だから、あまり数を食べないほうが良いと思います。また来たときには、一枚あげますから、今田は我慢ですよ」

じつと残りのビスケットを見ていたアルダの背を撫でながらそういふと、少しだけしょげたように首肯する。

言葉が分かるのかな? とてもお利口さんだ。

そして、私の用事を理解したアルダは渡してくれたときと同じよう、足を差し出してくれた。

簡単にアルダを腕や肩に乗せないほうが良いだろうと、窓をもう一度かたんつと開くと、アルダは、ぐつと重心を下げるから、椅子の背を蹴つて外へと飛び出した。

その姿は青い高い空に吸い込まれ直ぐに見えなくなつてしまつ。無事にアルダが帰還することを願つて私はもう一度眠りに着いた。

## 第九話

\*\*\*

「……ん？」

障子戸から差し込んでくる明かりが、眩しくて目を覚ました。陽は高くなつてしまつているようだ。

ぼんやりと天井を見詰めてゆつくりと呼吸をする。

随分楽になつた。

喉のいがらつぼさもなくなつたし、きっと大丈夫だ。

時計を見たら、十時を過ぎていた。

かなり深く寝てしまつていたみたい。主人も子どもも出かけたちやんと出かけたかな？ 出たよね。相変わらず家のなかは静かだ。

布団の傍に置きっぱなしになつていた携帯を引き寄せ、一応確認する。

メールが一通来ていた。

一通は、主人だ。

『ゆつくり休めよ

まあ、一人做的事情もありませんから、寝ますよー、だ……。  
もう一通は店長さんだった。

『おはよ／＼ござります。

このメールで目を覚ましたらすみません。

お加減は如何ですか？ 今日はクリスマスオーナメントが届きました。

天使が三体。

早い回復を祈つて、表にディスプレイしておきますね』

時間を見れば九時過ぎの着信になつてている。

普段なら十分に起きている時間だし、目を覚ますこともなかつたから大丈夫だ。

添付されていた画像は、文中に出てきた天使たちだつた。

銀色のものが二体、赤銅色のが一体。

細やかな細工に、しつとりとした質感だ。

是非本物を見てみたい。

今から出て行つても大丈夫そんくらい、身体は軽くなつていたけれど、きっと今日出て行つたら店長さんは気にするだろ？から一日はお休みをもらつことにした。

彼には『ありがとうございます、大分楽になつたよ』と返信し。店長さんにも殆ど回復した旨を伝えた。

直ぐに彼から返信は来る。

開かなくとも実は内容は分かつっていた。

それでも一応開く『了解』の一言。余りに予想通りの返信で、笑いが零れる。

続けて鳴るから店長さんかと思つたら小夜子さんだつた。

『起きた？ 生きてる？ 電話して良い？』

今度は別の意味で笑いが零れた。

流石小夜子さん極端だ。

『良いですよ。待つてます』

ぴつと返信すれば、電話を置く前に鳴りはじめた。

私はとうあえず「あーっあー」と声を出してから電話に出る。

「はい」

『調子どう？ 熱下がった？ タベ明日見の家にいったら紗々のこと聞いて吃驚したわ』

矢継ぎ早に問い合わせられて、つい緊張感もなく笑ってしまう。

そんな様子が伝わったのか「紗々？」と可愛らしく問い合わせられた。

「大丈夫です。昨夜は辛かつたんですけど、もう平氣。元氣ですよ」  
『そう？ それなら良いんだけど、家までお見舞いに行こうと思つたら、明日見に止められたのよ。あたしが行くと休めないだらうからって』

酷い言い草だとぼやいた小夜子さんはやつぱり可愛らしい人だなと思つ。

『えーっと、ねえ、それから』

ほっこり優しい気分になつていたのに、なんだか珍しくいい淀む  
彼女に不安になる。どうかしましたかと問い合わせば、あー、とか、  
うー、とか。本当に珍しく煮え切らない。

「ええと、私何か……」

『あ！　ああ、違う違う！　明日見から話したつて聞いたから、  
大丈夫かなーと思って』

「……聞いたつて？　……あ、ああ

両刀だという話だらうか？　そう行き当たつて刹那息を詰めた。

『別に、後ろ暗いとか隠しているとか、そういうことはないんだけど、一般人がいきなり聞いたら驚くだらうなーと思って』

「なんだ」

でも、ほつとした。

『ん？』

「ううん。なんでもないです。私、気付かないうちに小夜子さんの  
気に触るようなことをしたかと思って、どきどきしちゃいました。  
でも、そんなことなら、良かつたつて……」

『そ、そう？』

「はい』

本当に良かったと思つた。

こちらにそのつもりがなくとも、誰かを傷つけてしまつことは多  
々ある。人と接していればそれは同じ人間ではないのだから仕方の  
ないことだけど、出来るだけ避けたいものだ。

ほつと胸を撫で下ろし息を吐けば、電話の向こうで小夜子さんも

同じように嘆息していた。

『明日見も気にしてないつていつてたけど、偏見つていうのかなあ？ やっぱりあるし、紗々とは、普通に仲良く出来て嬉しかったから……いや、もひ、本当聞いたときには明日見を絞め殺そつかと思つたわ』

きつぱりといい放つた彼女に私は乾いた笑いを零した。

彼女がいうと[冗談に聞こえない。店長さん無事で良かつたです。

それに、私なんかと仲良く出来ただけで嬉しいなんて、いつでもられて私の方が嬉しい。

熱で寝込んで居たなんて嘘みたいに、気持ちが元気になつた。

そして、大げさにも今度は快気祝いでもと誘つて貰つて電話を切つた。

ふと液晶画面を見れば、メールが一件。開いてみれば店長さんだつた。

『安心しました。

今日はゆっくり休んで、次は店をクリスマスのディスプレイに変えましょうね。

準備して待っています』

通常通りだと明後日になつてしまつから、少し遅くなつてしまつけど、それでも待つてくれてるという気持ちが嬉しかった。

お礼のメールを返信して、一息。

今年はうちもクリスマスツリーをだそつかな？

そう思つて半日は休んでいたんだけど、子どもが帰るのを待つて一緒にクリスマスツリーの飾り付けをした。オーナメントの数が激減していたし、壊れてしまっているものも多かった。子どもが小さいときに遊び倒したせいから、近日中に買い足さないとな。と思うものばかりだつたけど、電飾は生きていて綺麗だ。

彼は帰つても、そのことに気付いているのか気が付いていないのか微妙だった。

それが分かるまでに子どもが報告。

得意気に自慢していた。その様子眺めたあと夕食にした。

「…………なあ」

珍しく彼が私に声を掛けているようだ。  
ぱくぱくと食べていた子どもから視線を離して顔をあげれば目が  
合つた。本当に私に話しかけているようだ。

「ん?」

私はのんびりとお味噌汁を口に運びながら、続きを促す。

「仕事辞めた?」「ううだ?」

「は?」

突然のこと驚きすぎて、かちやんと食器を鳴らしてしまった。

「無理に仕事に出なこと、家計が苦しいのか?」

「え、い、いや、苦しくなことといえば嘘だけど、まあ、出来なくも  
ないけど……なんで?」

彼はとっくに食事は終ってしまった。

本当に早い。

味なんてきっと関係ない。

「なんであって、タベ熱出したのだつて、それが原因じゃないのか?」

「え、ち、違うつ。あれは兩こ……じゃなくて、」

「Uの前も倒れたばかりだし、ストレスが溜まるよつな」と重ねな  
くても、「

最大のストレッサーがよくいつわよつ。ぐつと飲み込んだ台詞が喉に詰まる。

「断りづらになら、俺が電話するし」

……い、嫌だつ！

ぎゅっとテーブルの上で握った拳に力が籠る。

「ちそうせまーと子どもが席を立ったのを見送り、リビングのテレビがついたのを確認してから軽く深呼吸。

「でも、慣れてきたところだし」

「お前の代わづらい誰にでも出来るだろ？」

誰にでも……誰にでも、出来る。

確かに私じゃなくとも出来ると思つ。

私がやつてることなんて、やっぱり店番程度のものだし、一人で何かしているわけじやない。でも、誰にでも出来るなら私がやっても良いじやない。

良いよね？

だつてまだ、やめて欲しいなんて店長さんからいわれてないし、明日はクリスマスの飾り付けだってするんだからつ。

私にだつて出来る」とはある。  
あるはずだよ。

「家に、」  
「ん？」

「家に一人で居るの嫌なの。もつ、嫌なの」

ぱつぱつと口にする。

声に出すのが苦しくて、心臓がドコドコ五円蠅い。

彼はそんな私に気が付くこともなく、ああ、そう。と相槌を打つ。

「大丈夫ならそれで良いけど、無理してゐないうと思つただけ  
……無理、してないから」

会話はそれで終わつて、彼は席を立つた。

私はその後姿を見送つて、きゅっと唇を噛み締める。

全然、届かない。

伝わらない。伝える隙もない……

主人は、どうして私が家で一人が嫌なのか、気にならないのかな?  
気に、ならないのだろう。

きつと興味ない。

私に、興味がないのだから仕方ない。

結婚し、主人は私の生活に責任を持たねばと思ってくれているの  
だろうと思つ。だから、彼はあれでも私を守つていてるつもりなのだ  
うひ。

籠の鳥は籠にさえ入つていれば安全。

安心。

餌だけ定期的に与えていれば死にはしない。

子どもだった頃<sup>1</sup>、結婚した責任は果たしている。  
そう、思っているのだろう。

そうして、変な形で守られて私は心が死んだ。死んだ心が助けを求めて、寂しくて苦しくて辛くて……偽りでも良いからと愛を求めて、あんな夢の世界を作ったのかもしない。

でも、本当はちゃんと、いつも地に足の付く場所で私は生きた  
い。

愛されたい。  
そして、それが許されるのは私が選んだパートナーである夫だけ  
だ。

恋愛時代とまでは行かなくても良い。それでも、肉親としてではなく、一人の女性として愛して欲しいのに……。  
ただ私は無為に時間を重ねるだけ。  
それなら早く生き終れば良い。

早く、早く。

家に居るとその想いばかりが募る。  
早く明日になれ。

そして、早く……

……

結局タベは、泣きそつた現実的な夢を見た。

起きたとき夢なのか現実なのか分からぬくらい、現実的で……

「私、何度もいってるじゃない。寂しいって、あの子はこれからどんどん手が放れていくし、貴方には愛されている気がしないし、家で一人で居たら、一日誰とも口を利くことなく過ぐすんだよ。帰つても貴方は相手にしてくれないし、寂しくて、寂しくて、頭がおかしくなりそうだよ。昨日のは唯の風邪だと思うけど、倒れたのは貴方のせい。仕事のせいにしないで……私を助けて」

私の叫びだけが頭にこびりついている。

こんな言葉を投げつけられてしまった主人は、どんな顔をしていただろ？

それすら分からぬ。

彼の心が見えないと同じように、その表情すら読み取ることは出来なくなっていた。

私たちにはもう互いを慈しむといつ気持ちの共有は出来ないのかもしれない。

ぼんやりとそんなことを考えながら、お店に向った。

丸一日家から出なかつただけだけど、街路樹に電飾が施された。これからは足早に帰る道をのんびり帰ることになりそうだ。

「あ」

丁度お店の前に到着する、外から見える窓にメールで届いていた天使が仲良くなっていた。

思っていたものより大きくてちょっと吃驚。

中央の天使が吹いているラッパの音が聞こえてきそうで、なんだ

か微笑ましい気持ちになった。

……リーンリン……。

「あれ？」

いつもは木製のからじりとこつ音に迎えられるのと、顔をあげたらウエルカムベルも真鍮製のものに変わっていて透明な音が響いた。

ベルの先には天使が付いている。

軸にはクリスマスリースがあしらわれていてビックなく愛らしこ造りになっている。

おはようござります。と声を掛けたけれど、店長さんの姿はなくてまだ奥に居るんだろうけど、ドアが開きっぱなしはちょっと無用心だ。

人を疑うなんてしなきゃうな、店長さんらしさといえばらしげど……。

そのまま店の奥に入れば、お店と店長さんの自宅を繋ぐ通路に荷物がでんじ盛りになっていた。

きっとクリスマス用のオーナメントだと想いつ。

今日はこれを、合間に並べて行かないといけないんだよね。

楽しみ。

自然と顔が綻んだ。

販売用のもので気に入ったら家にも買って帰る。あるものだけではやっぱり物足りない。

## 第十一話

店長さんの姿を探して、お家にお邪魔したらロビングでパソコンを弄つてゐるようだつた。

集中してゐるのか、全然気が付いてくれそつもなくて、ほんの少し悪戯心の浮かんだ私は、そーつと足音を忍ばせて歩み寄つた。

……ほんつ

「店長さん」

「ひつー！」

がたんっ！ 「ンンっ！… かしゃんっ！…

「い、つー…」

「…………あ

想定外の展開に私の頭が付いていかなかつた。

予想では、うわあ！ 吃驚した。程度の反応をいただければと思つたのに……。

一瞬にして事件現場になつてしまつた。

「え、あ……い、和泉さん、おお、おはよー！ やれこます」

「…………はい、おはよー…………『やれこ』、ます」

ローテーブルで打ち付けた膝を抱えたまま、いきなりを匂ぎ見た店長さんに掛けられた声に、なんとか応える。

「あ、の……す、すみません。その、え、と、ちよつと、その、ま

さか、ええと、膝、大丈夫ですか？」

「は、はい、平気ですよ、うん」

「カップ、大丈夫ですか？」

何から片付けて良いか分からなくて、とりあえずノートパソコンの傍に転がったマグカップに視線を走らせた。

中身は空だつたらしくて、水分的な惨事は起じていない。

ひとりと転がったカップを起こしながら、店長さんは苦笑して「平氣です」と重ね、片手でパソコンをぱちんと閉じた。

壊れていなければ良いのだけど……。

今、それを詮索しても良く分からないから、あとで聞くとして、私は良く分からぬ、本や紙まで散乱したので、それを拾い集めようと膝を折ると「大丈夫ですよ」と慌てて店長さんがかき集めてしまひ。あひと見えたものは画集みたいだった。

「すみません、お仕事中だったんですね……」

その慌てよひじょんぼりと肩を落とす。

変なことを考えず、普通に声を掛ければ良かつた。

人間急に変わったことをしようとするところがないと痛感する。

「構いませんよ。」ひらひらそ氣が付かなくてすみません。声掛けてくださいたんでしょ？」「あ、えーっと、その」

「構いませんよ。」ひらひらそ氣が付かなくてすみません。声掛けてくださいたんでしょ？」「あ、えーっと、その」

げながら、傾いてしまっていた眼鏡を両手でなおす。

「普通に表から入ってきて、その、お邪魔するときに声は掛けたんですけど……」ちらりと見つけたときは、その、意図的に直前まで声を掛けませんでした。『ごめんなさい』

「それは、またどうして？」

不思議そうにしてつつ重ねられる問い掛けに、自分がなんて子どもっぽいことをしてしまっていたのかと思うと、身が縮む思いだつた。

「その、店長さんを……」

「僕を？」

「……驚かそうと思つて……」

「ああ、おどろか……つて、貴女がですか？」

ショボショボと口にした私に、店長さんは田を丸くして、大げさなほほじ瞬いた。

そこまで驚かれると益々申し訳なくなつて、すみませんと重ねるばかりだ。何も壊れてなければ本当に良いのだけれど。

店長さんは「なるほど」と重ねて今度はくすくすと笑い始めた。どうしよう、店長さん本人が壊れてしまつたんだつたら……一番心配要らなさそうなところまで心配になつてしまつ。

……べと

「え」

「……んー、熱は、もうなれやつですね？ 良かつた」

大きな手のひらが突然私の額に掛かり、今度は私の時間が止まる。顔は赤いようですが、と重ねられて、ふわあつと益々頬が熱を

持つてしまつ。

「悪戯心が湧く〜り」元気になつて良かつたです」

本日の本題に申し訳ありません。  
もう一度と、店長さんの背後には立ちませんから、許してください。

額に手を当てられたまま、私はどんどん俯いてしまつ。  
血と離れていく手をほんの少し寂しいとか思つのは間違つてい  
る。間違つてゐるし、それに、

「よしよし」

ぽんぽんと頭頂部を叩かれる。今度は私がきょとんとする番みた  
いだ。

「元気になつたのに元気がないよう見えたので」

「元気ですか？」と笑顔で重ねられて、慌てて「元気です」と返し  
た。

なんとか笑えたと思つ。

笑つてたよね、私。  
やつぱり店長さんは良い人だと感ひ。

だからこそ、こんな私にはあまり触れたりしないほうが良いこと思  
う。私が汚してしまつては申し訳なさ過ぎる。  
さうつと、少しだけ下がつて「何から始めますか?」と問い合わせ  
た。

「九時に業者がクリスマスツリーを……ってあれ？ もつ過ぎていますね？」

「え、はい。私が家を出たのが九時でしたから」

「道路が混んでるのかな？ 事故じゃなかつたら良いけど、まあ、兎に角もう直ぐくると思うんです。きたらその飾り付けをお願いします。店の中央を昨日空けておいたのでがらんとしてると思いますよ」

とんとんつとローテープルで資料関係なのか、紙の束や本を整えて積み重ねそういうて脇に抱える。

「僕は」「いつ片付けてから店に出ますから、先に」

「表掃いておきますね」

「いえ、それは駄目です。今朝は風が強いので、外には出なくて良いです。室内清掃をお願いします。荷物どかしだけできちんとしていないと思うので」

思ひといった店長さんに疑問符が浮かんだのを悟られた。

「夜に又小夜ちゃんが、着ない服の置き場がないと持ってきたので、片付けを手伝わせたんですよ。ああ見えて彼女は、生活に必要な基本的なこと、掃除とか、料理とかからつきし駄目なんです。きっとそのままになつてると思います。直ぐに、僕も手伝えますからね」

確かに、小夜子さんの雰囲気からは所帯染みた感じは窺えない。どれもスマートにこなしそうだけど、どちらかといえば、こなさせるほうが上手そうだ。なるほどと納得して、私は来たほうへと戻る。

「あ、そうだ！」

「はい？」

「表に並んでた天使も、ウェルカムベルもとても可愛かったです」

忘れないうちに伝えておかねばと口にすれば、一階へと上がる階段に足を掛けていた店長さんは嬉しげに瞳を細める。その笑顔に見送られて私は店へと戻った。

ちゃんといえて良かつた。

私だって部屋の模様替えとか気が付いてもらえないど、とても袁しい。

気付いてもいつて貰えないなら気がついていないのと同じことだ。

私は店長さんがいつていた通り散らかっていた、濃茶のフローリングの上の埃とか紙くずを掃き集めながら一人頷いた。

「あ

病院に付き添つてもらつたお礼はいいそびれてしまった。

次はそれをちゃんとといわないと……。きゅっと片手で箒の柄を握り締めて、空いた手で少し乱れた前髪を梳き整える。

なんとなくまだ触れられた感触が残っているようで、胸がドキドキした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2517x/>

---

恋愛不感症

2011年12月31日17時52分発行